

れども、古へ吉備の國府ありし頃は、人煙稠密最も繁華を極めたりとぞ。平家物語に松殿藤原基房配流の時國府のほとり湯迫といふところに流すと見え、今猶ほ湯迫と稱する村落あり。又、妹尾太郎兼光を殺せし時、備前の國守十郎藏人の代官國府にありて見えたるは即ちこの地のことなり。

關白基房配流の地 國府市場の東北に隣りて、大字湯迫に残り、その地を關白屋敷といふ。基房は藤原忠通の第二子にして、治承の比平相國の爲めに貶せられて、この地に移され、居ること三年にして終に京都に歸れりといふ。明和年間藩主池田繼政の遺址に就て松樹を植ゑ、また高さ三尺五寸、方一尺の碑を建設して紀念となす。碑今に存せり。猶、碑を距る西南數十歩に最明寺址あり。淨土寺またこの村に屬し、境内に後鳥羽天皇々子の墓と傳ふるものあり、而も、その寺域は、舊岡山城の天主閣及び操山（偕樂園）等の勝地に展望して風景また愛すべきものあり。開基は即ち天平勝寶元年報恩大師にして、天台宗四十八ヶ寺勅願所の一に屬せり。

宇野村 高島の南とす。この村の字東川原は志士藤本鐵石の出身地といふ。また、村内に八幡神社あり。當國の名祠とす。

西大寺驛附近の北方には、赤磐郡を界せる龍口山の小丘陵蜿蜒として連亘す。かくて驛より汽車は猶ほ轟々として西を指し、遂に岡山市の瓦葺粉壁をその前に展開するに至る。（操山後樂園は岡山市の條に説くべし）。山崎氏曰く、「備前國內平野極めて少なく、そのやゝ大なるは、國の西南隅に於て岡山附近の平野あるのみ、この平野は東大川、西大川二川の下流灌漑及び兒島灣西岸の平野を包括するものにして、東北より西南に長く延びて備中國にも亘り、備前に屬するものは面積約二百二十五平方呎を占め、國內に於ける唯一の平野にして、戸口もまた最も稠密なる地方とし、岡山市及び西大寺町その他の繁華なる都邑少なからず。

岡山市 中國屈指の都會にして、岡山縣廳の所在地なり。天正年間宇喜多氏これを開き、維新前は池田氏三十二萬石の城府たりき。市は東方上道郡に連り、南西北の三面は御津郡に圍繞せられ、旭川の水北より來りて其東部を貫流し、河口三幡港に至りて兒島灣に入る。東面二十一町、南北三十二町、面積零方里五分四厘にして、戸數一萬六千餘、人口八萬千餘を有す。停車場は市の西端上出石にあり。土地平坦にして街

衢縦横東西南北に通じ、唯北方一帯の低丘の遠く蜿蜒たるを見るのみ。市を分つて二大部と爲し、旭川以東は旭東と謂ひ、以西を旭西といふ。而して市坊の敷は實に九五の多きに達す。市街を通せる本街道は旭東森下町より大黒町小橋町に至り、小橋・中橋、京橋を経、西大寺町より北折して榮町通を過ぎ、上の町より西して又北し、山崎町、丸龜町より更に西曲して、岩田町、萬町に出づるもの即是れ。而して京橋通・榮町通は最も市の繁華區を成し、家屋宏壯、車馬雜遝頗る殷盛の趣を盡す。先づ停車場を下りて東に向ひ、溝渠に架したる小橋を渡りて進めば、天台宗の巨刹たる、

●岡山寺 は磨屋町にあり。天平勝寶年間報恩大師の勅を奉じて建立せる巨刹にしてもと岡山城主金光宗高の菩提寺たりしもの、當初城内にありしを、宇喜多直家築城の際に當りて此地に遷したりと傳ふ。國清寺、蓮昌寺と共に岡山市三大寺院の稱あり。更に行けば、山崎町より上の町通に通ずる街路にして、既に早く殷富の趣を呈す。これを東すること二三町にして、榮町通の繁華に至る。家屋櫛比、人烟稠密、まこと

に一都會たるを耻ぢず。左すれば弓の町に、

●岡山縣廳 あり。美作、備前、備中三州を管し、一市十九郡その人口凡百十八萬許りといふ。地形や、高く、建築また宏壯なり。

●地方裁判所 縣廳の附近には地方裁判所、區裁判所、登記所、拘置監、警察署、戦捷紀念圖書館、師團司令部、師範學校等散點せり。その地方裁判所は大阪控訴院の所管なり。而して、

●亞公園 の七層樓は高く其前に聳立す。この閣一に準成閣と稱し、高さ八十餘尺、登臨すれば市街の全景を一眸の下に集むるを得ると共に、遙に兒島灣の晴波を望むとを得べし。また園内に二三の旗亭あり。傍泉池を穿ち梅櫻を植ゑて風致を補ふ。

●縣廳の傍を過ぎて東すれば、石關町に、  
●岡山神社 あり。縣社にして、貞觀年間の開設と傳ふ。初め城内にありしを、天正年間宇喜多氏城を再營するに當り、これを今の地に遷移し、後池田氏大に社殿を修營



後、第三高等學校醫務部と稱せしもの、設備の完全なるを以て著名なり。されど藥學科を設けず。

醫學專門學校を遷す。城跡の本を據れば、直ち。

岡山古城址 に入る。停車場より此に至る約十二町なり。城は一に鳥城と稱し、天文社給の頃、金光興次郎宗高殆どこの地に築きしが、元龜元年、喜多直家宗高を殺してその城を敗め、天正五年大に土木を起して、更に城廓を築き、池田を壘ち、工竣りて上野郡治城より移りて、これに居り、遂に備前備中、美作の三國の主となる。慶長二年、其子秀家近社の安土城を據して、天主閣を増築す。旭川の氷を城下に引きて、三二大橋を架するの工事を起せしが、關原の役、秀家軍敗れて封土を失ひ、その後小島川秀家一の城のほとりなりしを、まなくして國除かれ、池田縣廳の治所となり、光政に至りて木に築きし。爾後宇孫相傳り、以て明治維新に及びり。今は唯天主閣を存するのみ。内山等は醫學專門學校の他に岡山中學校、岡山縣商業學校、養正學校等あり。岡山

縣病院、岡山測候所また此地にあり。

再び榮町通に戻り、繁華般賑なる街路を南し、西大寺町に至りて、東に折るれば、敷町にして市の繁華を集めたりとも稱すべき京橋の橋畔に達す。商賈軒をつらね、行人織るがごとく、喧騒の聲四隣に徹す。旭川の水は東北より來りて南に流れ、三幡港に通ずる船舶多く碇泊し、頗る交通の便あり。橋を渡れば、中橋地方にして、南に巨大なる烟筒の高く天を摩するを見るべし。これ花畑にある岡山紡績會社にして、日々製出するもの頗る多額に達すと云ふ。旭川の一支流に架せる小橋を渡りて、愈々東すれば門田屋敷に至る。地に岡山孤兒院あり。私人の經營にかゝると雖も、その規模頗る大にして、効の見るべきものあると海内その比を見ず。

●借樂園 は東山公園と稱す。丘陵相連れるところでありて、上道郡三擡村に屬す。

岡山市より西大寺町に達する縣道はその中央部を貫通せり。園内に、戊辰、西南兩役に戦死せるもの、忠魂を祀れる招魂社あり。また、その東方操山に三勳神社あり、和

氣清麿、兒島高德、楠正行の三靈を合祀し、その南に隣りて東照宮、玉井ノ宮あり。

丘上には、古松老杉亭々として繁茂し、且櫻樹數百株を栽植す。山上より眺望すれば

西には旭川を隔て、岡山市一萬の瓦屋を觀、南は麥隴菜圃を掠めて遙かに兒島灣を瞻む。風光頗る明媚にして、四時市民の來遊するもの絶えず。人工庭園の美は後樂園に及ばざれども、天然の勝は却て此地に多きが如しといふ。

●第六高等學校 操山の麓、三勳祠の北にあり。明治三十二年の起工にして、同三十

三年九月の開校といふ。

●借樂園より真直に西すれば、小橋町に、

●國清寺 あり。禪宗臨濟にして、池田氏累代の香花院といふ。寺傳に據れば、慶長

九年國主池田輝政播州姫路在城の時男山の麓に一寺を創立す。即ち當寺の創始なりといへり。後、寛永九年池田光政の封をこの地に受くるに及びて、寺もまた移轉し、池田氏累世の香華院となり、大華和尚を以て開山となすと。寺域松杉鬱々として數箇の



べし。野崎氏名勝誌曰、「後樂園、面積二萬七千零十三坪、園は舊藩主池田綱政の創設にして、貞享三年其臣津田永忠に命じて工事を監督せしめ、同四年初めて工を起し、數年を経て落成す、爾後池田氏世々其の庭園家屋を修補し、元祿年間には更に其區域を擴めて多く樹木を栽培す。地勢は南方稍や高くして岡阜の狀を爲し、雜樹蔭鬱、宛然深山に入るの感あり、東北隅は平夷にして或は松樹の間を歩すべく、或は園外の風景を望むべし、此園を設けたる特り遊樂の爲めのみに非ずして、或は農民稼穡の艱難を視察し、或は藩士の武伎を講習せしめ、又は儒臣を集めて經典を講せしむる爲めに造りしものたり、今、園内の勝地は別に目を掲げ遊人回覺の順序に従ひて左に之を詳説せん、鶴見橋は岡山市宇出石町より後樂園に抵る入口、旭川に架したる木橋にして、長さ七十間餘、粗造にして建築の見るべきものなしと雖も、橋上の眺望開豁にして、夏夕暑を避け涼を納るゝに宜し、橋を渡れば、園の北門に達し、塙を隔て、左に暫軒を望む、暫軒は屋を二棟に分ち、窓を開けば眼下に旭川の清流を瞰み、北方には秦嶺

諸山を見るべく、夏夜の涼風殊に掬すべし、鶴鳴館は北門の右方に在り、草葺にして建坪凡そ百四十坪、二ヶ所に玄關を設く、舊と五六の室ありしを近年之を併せて一の廣間と爲し、岡山縣會を開く時は此を以て議場とし、又諸種の集會宴席に充つ東の玄關より入れば、本館の前に一株の古松あり、昔時里長某の庭中に在りしを移植せしものなりとぞ、延養亭は園中第一の建物にして、鶴鳴館の東南に隣り、建坪七十七坪餘、古へ近國諸藩主及び其の使節等を延きて饗應せし處にして、去明治十九年聖駕西巡の際玉座を設けたるも亦此亭なり。室は東南に面し、岡山城の天主閣、瓶井山の三層塔を一時に收め得るのみならず、坐して園内の勝を観るべく、其の亭前には奇石羅列して、苔滑かに草青く、其間白鶴の能く人に馴れて徜徉するありて、風景殊に佳なり、望湖閣は一に榮唱と名け、延養亭の西北にあり、建坪五十七坪、席の廣さ七十疊、柿葺の回廊を設けて斜めに延養亭に通ず、閣の東南に池あり、花葉池と云ひ、池畔に巨岩の屹立するあり、高さ四間餘、周回十三尋、松樹其の岩腹より生ず、此より北に

回れば一の舞臺あり、寛永四年の建築にして、柿葺建塼四十六坪餘、其の三方に數十坪の餘地を剩して、二面に小石を敷き、欄端には條龍麟の紋を付す、樂を演ずる時は望湖閣北手の障子を閉ま坐して之を觀覽すべし。花葉は築唱の南に方れる庭園の名にして、北に門あり、其外は直ちに西門に通じ、之を花葉口と云ふ、門内は地勢高く秀で、自から丘阜の状を爲し、喬樹亭を枝を交へて、四時日光を遮り、綠苔空地を蔽ひて、朝暮清風を貯ふ、樹木の稠密なると園中此境を以て最とし、庭上は條の小徑を開き以て左記の茂松庵に通ず。茂松庵は昔は舊藩主の茶事を修めたる茶室にして廣さ二十二坪餘、室を分ちて三つとし、構造素樸にして雅致あり、其南に隣りて四天主堂あり、更に東北に抵れば地蔵堂あり、舊藩主の安置する所なりと云ふ、傍らに石標を建て、二色岡の三半を刻す。地勢高くして庄岡の形を爲し、池水其下を回る、礎を下る數十歩にして水畔に達す、池水清澄鏡のごとく、瀧さ東西五十七間、南北十二間、南端に兩門を設け、水溢る時は之を旭川に注ぎ出さじむ、二色岡には楓樹多く、晚

秋の候は手枝萬葉盡く錦繡を粧ひて、二月の花よりも紅るなり、二色の名蓋し是より題るもの乎、**藤池軒**二色岡より竹林に沿ひて東に行けば右に二の門あり、南門と云ふ、其東に隣りて**藤池軒**あり、庫の廣さ二十二坪、之を二室に分ち、別に厨を設け、園中の勝を望むには第一の場處にして、後は竹林を隔て旭川の流に接し、前は即ち**藤池**に臨む、池は周囲五十石の間、地下に水道を設けて水を東より引き、池中に瀧みして一潭を爲し、更に溢れて二條の小流を爲り、唯心山の麓に注ぐ、大の客を誘ふて園に遊ぶ者は多く此潭を借りて宴を張る、**文藤池軒**の東に二架の藤棚あり、西なるは花白く、東なるは花紫にして、初夏滿開の候は頗る美觀なり、其北に大藤數十株あり、藤籠の東に池を穿ちて**燕花**を植ゑ、且八箇の小板橋を架す、蓋し三河の火之橋に擬するものなり、**流店**は八ッ橋の北に在り、建坪十二坪餘の樓閣にして、樓下に左右二條の小棧を架し、中央に水を引き、其の兩側を右を爲し、板を以て樓外の流れを遮れば、氷石に激じ流々として、樓下に進り來る、或は橋を泛ぶべく、或は魚を飼ふべ



し、其水は東に繞りて瓦頭より南に注ぐものと相合し縈回して八ッ橋の下に出づ、亦一奇構なり、梅林、流店の東に櫻樹の林を爲せる處あり、其間を歩して東南の方に出れば、茲に一帶の梅林あり、數は一百樹に過ぎざれども、槎枒たる枝頭紅白の花を着け、疎影横斜、土地亦俗と離れて、幽閑愛すべし、其東竹林の間に門あり、園外に通ず是れを東門と云ひ、門外を櫻馬場と稱す、利休堂、櫻の馬場より南折したる處にあり、舊と岡山藩老臣伊木忠澄千家の製に倣ひて、初め其の別墅に建設せしを、後ち此地に移す、屋を三室に分ち、第一室には元と利休の像を安置せしが今は之を他所に移せり其他曇室あり、待合あり、構造質素にして古雅愛すべし、花交ノ瀧、は梅林の西流店の南にあり、奇石錯落たる一道の飛泉あり、即ち花交ノ瀧と云ふ、溪に沿ふて一路縈回し東西に通ずるものを岐蘇谷と稱し、東の盡頭に泉池あり、花交池と云ふ、瀧東西十二間、南北三十五間餘、瀑布と相對し、池中に小嶼あり、百石島と呼ぶ、唯心山は園の中央に崛起する丘陵にして、園中第一の勝景なり、簾池軒よりすれば水に沿ふ

て行くと百歩に過ぎず、流店よりすれば其西北に連りて距離稍や邇し、山は樹木鬱然として茂生し、其間に石を布置し、又三條の小徑を通ず、巔よりは園内の諸景を一眸の中に收め得べく、北は樹梢を掠めて遠く龍山の連峰を望み、時に汽車の黒烟を吐きて疾走するを認むべし、傍らに一亭榭あり、唯心堂と云ふ、最も觀月に可なり、島ノ茶屋、唯心山を北に下れば、其前に池あり、東西五十間、南北三十五間、園中第一の大池にして、池中に三個の小島嶼あり、南に偏せし一島に橋を架し、島上に茶亭を設く、島ノ茶屋是れなり、亭中二席に分ち、繞らすに稚松を以てし、又怪石を散置す、其傍らの水中に石標を建て、表に「上道郡」裏に「境澤」の字を刻す、此より、又小板橋を渡りて隣島に抵れば、其傍ら又石標を建て、表に「御野郡」裏に「みのしま」の數字を刻す、此園舊と御野、上道の二郡に跨がり、此地は其の境界に當りしを以て境澤の名あるもの乎、時に白鶴來りて池中に唳むを見る等眞に蓬萊仙島に遊ぶの思ひあるべし、新亭は園の東北隅にあり、窓を開けば園外の曠野を望み、その左右を

千入森と稱し、楓樹數十株枝を交へて夫を蔽ふ、晚秋隕霜の候滿目の紅葉翁陽に相映じて、錦繡の燦爛たる如く實に一美觀なり、森の奥に稻荷祠及び辨天祠あり。その西に由貴神社あり、拜殿、繪馬堂、神庫等あり、池田慶政の筆にかゝる神號の扁額をかゝりて拜殿の楹端にあり、その神社は東京なる池田氏源邸にありしを慶應の後この地に移せしものなりと、其西に隣りて慈眼堂あり、堂前に二主門あり、如意輪三字の額を掲げ傍らに鐘樓あり、佛殿は巨石を疊みて礎とし、石階を設けて賽人の上下に便にす余曾は觀世音にして池田氏の念持寺なりしと云ふ、其他園内の勝景は一々枚擧するに遑ならず、此には其の梗概を記するのみ。

再び榮町通より西中山下の地に至れば、岡山縣師範學校あり。校は寛文九年池田光政が諸士の子弟の爲めに僧學館を設けたるの遺蹟として、今たほその舊規を存せり。

蓮島寺は宇東田町にあり。法華宗にして、興國三年松田將監元盛岡山城内の榎馬場に創造し、後、一時廢絶せしを天正年中宇喜多直家旭川の東、森下の地に再興し、再興

に今の地に移す。往清は寺領五百石を領し、支院四十八坊を支配せる巨刹なりしが、池田氏封を備前に受ると及び大々寺院の地を創りて奉割する所あり。今の本堂は南面して大々十八間四脚、實に市内第一の巨堂なり。表門より本堂に至る左右に支院八坊あり。又本堂の右側に守護神祠ありて、最尊一丸大明王と號す。別に當寺には茶畑頭寺開祖日像上人の親筆に傳る唐紙五十五枚纏懸二丈三尺、横一丈三尺、の太鼻茶籠を藏し、毎年陰曆二月二十八日より十二日間開扉を行ふ、參詣人頗る夥たしといふ。

如上の他、岡山市の名勝として、小早川秀秋の墓は日蓮宗本行院の寺内にあり。勝興寺は庵屋町に屬して、建長四年宇喜多直家の創立といふ。神社には、伊勢神社、春日神社あり、市の名産としては、錦進、熊野染、編笠、織詰、金屬彫刻品、正阿線製吉備團子等を擧ぐべし。大日本地誌曰、「岡山市は廣島市に次ぐ中國第二の大都會にして、山陽鐵道は東西に通じ、中國鐵道は起點を此の地に發して北方津山町に通じ、市

内を貫流する旭川の水運あり。其河口三幡港よりは汽船により四國との連絡をなす、本市は斯の如く交通自在にして、加ふるに東に大阪、神戸西に廣島、赤間關、南に高松を控ゆるを以て商業頗る繁盛を致し、縣下の物産たる綾苳、紋苳小倉織、綿ネル、生糸、綿絲、米穀等の取引盛に行はる、殊に器械製綿絲、苳類は内國各地は勿論遠く海外に輸出せられ、綿絲の原綿は神戸港を介してインド及びアメリカより輸入す、備前紡績會社、岡山紡績會社、製紙會社等は多量の商品を出し、又た商業會議所は岡山農工銀行、二十二銀行、山陽商業銀行等の金融機關と共に市の商業原動力をなし、商況極めて活潑なり。又曰、「岡山縣の花苳業は、本邦屈指の工業にして、其の産額年百四十萬圓の多額に達せり、先づ其の沿革を記せん此の地方の蘭苳は數百年前より著名なれど、其の頃は普通疊表、莫産と稱するもののみなりしが、明治九年都宇郡の人磯崎眠龜、疊を此等の改良に注ぎ、苦心の結果、明治十一年に至りて、錦莫産の發明を爲すに至れり、其の品質精巧、意匠また温雅にして、大に見るべきもありしが、十七

年に至り、ドイツ國ハンブルグの商賈の賞賛を博し、製品賣買の契約を爲せしより、翌十八年にアメリカの商賈また來り買ひ、これより海外輸出の端緒は開かれ、斯業に多大の刺戟を與へたり。かくて同業者は益々奮勵し、終に綾苳、紋苳を製出し、今日に至りては其の種類實に數十種の多きに及び、機具類の專賣特許を得たるものも亦四十餘種に達せり。されど一盛一衰は免かれざりしとにて、需用者多數の結果、製造者次第に増加し、遂に濫製品を輸出して信用を失墜し、二十九年頃において、多數の製品は神戸市場に山を爲し、斯業者は非常の悲境に沈淪せしも、忽ちにして又其の聲價を恢復し、今日に至りては、アメリカ合衆國に於ける重き關稅の賦課あるに拘らず、着々として其の販路を擴張し、製品また次第に新意匠を出すに至れり。されど隣縣廣島縣及び九州地方に於ても斯業の發達日を追うて盛に、良好なる新意匠は日に應用せらるを以て、動もすれば其の技術に追越さるの虞あり、第五回内國博覽會の審査官の評に曰く「本縣は花苳の本場なれども、製作上の注意周到ならずして、廣島、福





一萬坪にして、老樹鬱々として茂生し、清風颯として鳥聲自から閑なり。祭式は古來傳ふるもの妙からざる中に、御田植祭といふは其式頗る盛にして、當社の神秘と稱し、今尚ほ存せり。また、元祿以降毎歲九月の祭日に際し、その社境に於て馬市を開くの例あり。

○兒島半島 兒島半島は岡山市の南に突出し、中に兒島灣を包む。多くは四五百米の丘岳より成る。兒島灣に面して妹尾、茶屋町、八幡町等あり。瀬戸内海に面して日比町、味野町、下津井町あり。岡山宇野間の鉄路車驛は鹿田、妹尾、早島、金尾町、味野由加、八濱、宇野にして、宇野より常に四國通ひの汽船の連絡あり。

四國街道は、岡山市より起り、妹尾町(備中郡窪郡)を経てまづこの半島の頭部に當れる藤戸に達す。備中倉敷町より來れる街道は同じく藤戸を過り牛島の北岸を東に走り、用吉、田井を経て南折以て日比町に至れり。藤戸より、四國街道は更に牛島の西部を横斷して味野町より下津井港に達す。備中倉敷町より來れる街道は、藤戸の西に於て二路に岐れ、一は藤戸を經(前記)、他はこの四國街道に交叉して木見を經、瑜伽山を越えて南海岸の田之口に達せり。

藤戸の渡 半島の頭部なる藤戸より大川(備中との國界)の河口に至る一線は、古の細き海峡となせしところなるも、桑海の變、今は僅に一縷の小流を剩すのみ。海峡は即ち往時の藤戸の渡これにして、元暦の昔、源平の古戰場たり。初め、後鳥羽天皇の元暦元年左馬頭平行盛兒島に據る、三河守源範賴この地に來り海を隔て、相對せしが、渡舟なくして渡ることを得ず。時に、佐々木盛綱夜潜かに土民を語らひて、淺所を試み目標を置きて、翌日手兵と共に此所を騎渡す。繼ぎて土肥、梶原、千葉、畠山等各對岸に渡りて、行盛を撃破し、これを屋島に走らしむ。後、賴朝大に盛綱の功を賞してこの兒島一郡を與へたりといふ。今も、藤戸の西方粒江村には盛綱の遺址と稱せらるゝ鞭木浮列岩、引馬ヶ淵等を存せり。平家物語に曰、「佐々木盛綱壽永三年九月廿五日夜に入りて浦の男を一人語り、直垂、小袖、大口、白鞘卷などを取らせ、賺しおほせて、此海に馬にて渡りぬべき處やあると聞きければ、此男案内は能く存じ候、譬へば月の瀬のやうなる處候ふが、月の頭は東に候(大脇の渡りを云ふ)、月の末は西に

候(即ち藤戸の渡しを云ふ)伴の瀬のあはひ海面十町も候はん、是れ御馬などにて容易く渡らせ給ふべしと申しければ、佐々木、いざさらば彼の男と二人紛れ出で、裸體になりて伴の川の瀬のやうなる處を渡りて見るに、實にいと深うは無かりけり、膝腰の立つ處もあり、鬢の濡る、處もあり、深き處と泳ぎて浅き所に遊びつきぬ、男申すは、これより南は北より遙に浅く候ふ、敵兵なみ揃へて參らせ候ふ所へ裸體にては如何にもかなひ給ひ候ふまで、唯これより歸らせ給へと云ひければ、佐々木實にもと歸りける。下郎はごともなきものにて、また人にも語はれて案内もや教へすらん、我ばかりにて知らめとて、かの男を殺し首かき切りて捨てにける。

熊野神社 林村にあり。一書曰、順徳天皇承久三年、北條義時、冷泉宮頼仁親王(後鳥羽帝皇子)を兒島に遷したり、後、親王は林村(兩岡村の内)の尊瀧院に薨す、今、木見村にその墓ありといふ、時に親王の弟櫻井宮覺仁親王もまた亂を避けてこの地に來り、兄宮と同住して、後同じく、尊瀧院に薨す、今、その墓は林村新熊野神社内に

あり、後人これを櫻井墓と稱す。

味野町 四國街道の一驛にして、岡山を距る七里二十五町といふ。人口五千にして地に兒島郡に役所以下の公衙あり。製鹽の業甚だ盛といふ。

下津井町 味野の南二里ばかりにあり。地は、半島の西南端にして、四國渡航の要津に當り、船舶常に輻湊す。人口三千四百、岡山よりの四國街道はこの地に至りて盡く道程十里二十五町なり。その他、備中倉敷町に至る五里十五町、海路讚岐丸龜に至る三里二十八町、同じく高松に至る七里八町と云ふ。また、町の北方通生村に八幡神社あり。

味野より東に海岸を傳へば、下、田之口、日比等の諸邑あり。就れも瀬戸内海の要港にして、船舶の寄港するもの多し。下村には紡織會社あり。田之口(味野より一里)には小倉織、眞田織を産す。田之口の東大字引網(下津井より二里餘)は、所謂韓琴の泊址にして、往昔は西國往來の埠頭として、船舶蟻集し、大に繁盛を極めしといふ、海山の風光頗る佳なり。濫川よりは、四國に至る海底電線あり。海には堅場島、釜島、大無衣、小無衣、松島、六甲島等星散羅列し、頗る風景に富めり。釜島は天慶の亂に藤原純友の據りし古戰場とい





叙して曰く「其廳蓋枕山據林而巨海承其所瞰乎、前其正面隔海乘雲以高山者阿波祖谷之山、山以爲讀東至於八島西至於象頭山、其間峰巒丘陵林麓田野城廓樓觀民居街衢、巨者可把小者甚於螻蟻、」云々。以て其の一斑を窺ふに足るべし。また當寺所藏の寶物頗る多し。由加神社は縣社にして手置帆負命、彦狹知命を祭る。創建年月は未だ詳らかならざるも元は蓮臺寺に鎮座して瑜珈大權現と號せり。王政維新神佛の混淆を禁せられ今の地に移して瑜珈神社と稱し。又た由加の字を用ふ。本社二神は火災、盜難其の他の災厄を除き之れを祈る者靈驗著るしと稱し、國內の信者は萬を以つて算へ、毎月二十三日就中六月二十三日の大祭には賽人鷹集して頗ぶる雜沓せり。地は宇野線の由加停車場より一里に足らず。停車場より山麓まで車を通じ同處より十八町の阪路を躋れば本社に達す。入口に金華表あり。石階を登りて右折すれば又た石華表あり。是れより内は土地高坦にして、神鈴門より左すれば本社の前に至る。本社は後丘なる巨岩の上に鎮し、其の前に幣殿、拜殿あり。拜殿の前は左右瑞籬を繞らし、地上

に石を疊みて平坦鏡の如し。又た拜殿の左に長廊を架し、屈曲して社務所に通ず。後山には老樹鬱茂し、境内には櫻楓の若木數十株あり。廣瀬旭莊の登瑜珈山に曰、夢裡蒼蠅鳴、枕上青燈熄、早行賽神人、門外紛如織、奮起叱館人、咄嗟辨朝食、欲攀萬步山、初踰一寸關、暖氣熾人膚、雨意憑風力、天東有陰雲、黝然黑於墨、如蛟如夜叉、雜遝將來逼、疇昔所見山、一半被吞蝕、日出雲勢衰、山近風路塞、新晴使心勇、舉足高而丞、修坂繞樹根、此爲入山城、同伴語且行、不覺幾回踏、松是宿瘤醜、竹皆史魚直、黃楊晏嬰矮、蒼藤子玉復、飛流過額揚、栖禽被足抑、磴斷鹿柴孤、壁峭狐館仄、奇葩互開凋、陰窟簇神隱、地濕恠菌榮、苔深珍石匿、縈紆出林梢、汪漭觀海色、白者唯去帆、青處是遠國、茶店四五家、人烟浮湖側、薄產衣餅饅、瘠田收來蕪、何處是神祠、樓廟懸南北、金碧映晨光、眩曜富采飾、猶雖隔一層、未行心先得、仰視前行人、亦在中途息。筑紫紀行に曰、田の口より瑜珈山にのぼる、山坂二十町ばかり登りて、潔き茶屋のあるに入りて休む。前面をあけて、新しき疊青々と敷きたるに腰うちかけ

て、見渡せば、讃岐の山々、島々、丸龜の城などと、皆な眼下に見下されて、樹色烟を  
 ふくみ、海氣日に映じ、布置の巧なること名畫も及ぶまじと覺えて、一望の絶景に精  
 神さわやかなり、眺め去りて、また行く、道は赭石の色したる赤土山を廻る、坂は少  
 なく平道多し、かくて十三四町ほどにして本社に近づく二町ばかりこなたに大なる石  
 の華表立てり、それよりは一町ばかり平地にて、茶屋宿屋五六十軒兩側に立つべき、  
 家毎に婢二三人づゝ門に立出ゐて、行く人を見て、いろ／＼に囁づり呼ぶ所柄とて詞  
 も異様に、聲も訛ありておかしけれど、貌形は心してかゝえ置きけるにや、餘りあし  
 きは稀にして、髪華やを高く結びあげ、紅粉の粧ひ厚きに過て、なまめきたちたる  
 様、山中僻遠の地にあはせては、殊に目に立ち打驚かるゝ程なり、此町屋を離るれば  
 仁王門あり、門のあなたに銅の華表ありて、華表の本左右に石の狛犬向ひ立てり、是  
 よりまた坂地にて、磴道を登り行きて本社に至る、拜殿は瓦葺にて、造作の様頗る鉅  
 麗と云べし、本社の後奥院おはします、此御前にある貌犬陶物にて、高さ三尺計り

あり、作り様古雅にして珍しく覺ゆ、神は瑜伽大権現と稱して、狐七十五匹御使はし  
 めたりとかや、此御社を守る社僧は眞言宗にて、寺をば瑜伽山蓮臺寺自性院といひて、  
 神領三十石つけりといふ、方丈客殿のあたりより、大師堂鐘樓堂等のあるを見廻に、  
 すべて華好なる事甚愛すべく、目を悦ばしめて、寺僧の富裕なる事まで推測らるゝ様  
 なり、斯て下向して、二王門の方より茶屋に入りて休む、西屋といひて此一町の程に、  
 勝れて大なる茶屋なり、座敷も四間許りありと見えて潔し、婢も他家よりは勝れて  
 容よく華なるが、酒肴飯蕎麥きり饅飩など、乞に任せて持運ぶ様、物馴れて無禮  
 しからず、價は問ふに思測りしよりはいと賤直に驚かれて、すべて皆山中の美風なり  
 とは思ひ知りぬ、午刻頃下津井に歸りて船出す。航薇日記に曰く、尾原(木見村)より  
 山路に登る、即ち瑜伽山の道なり、溪水潺湲として、石莖多く生じて、奇景多し、山  
 間みな田畝にして、幾級も石を以て築き上げ、山腹まで稻を植る實に驚くに堪たり、  
 山轉じ湖廻り一里餘にして瑜伽山にいたる、此山松樹多く、奇石突兀として、其間に

生ずるものは躑躅と蘭とを多しとす、真に一佳境といふべし、山の最も高き所に瑜伽權現の祠あり。祠宇莊麗にて、樓門巍々たり。

兒島半島の北岸、兒島灣に面する地もまた名邑少なからず。八濱、郡、小串等あり。小串は、灣口に横はり、その海岸に煙突の聳ゆるは、硫酸銅を以て人造肥料を造ることなり。金光山は半島の第一の高峯にして、八濱村の東に屹立し、高く兒島灣の口を扼せり。兒島灣は東西三里、南北二里、周圍十里、灣口東に向つて狭く、西に至りて漸く廣し、灣内水産に富み、白魚、米蝦、鰻、沙魚、牡蠣、伏老等多し、就中牡蠣、伏老は沿海の漁民殖養の法に注意し、收利甚だ多し、沙魚は、毎年初夏の候と中秋の節とに漁獲甚だ多くして、岡山その他の地方より來りて船を泛べ給を垂るゝもの多し。その他、常山城址は、用吉の西南嶺常山にあり。古へ上月隆徳の守城にして、天正三年小早川隆景の爲めに滅され、爾後、戸川氏の所領となる。また、神武天皇高島行在所地は甲浦村大字宮浦にあり、同帝紀に乙卯年春三月入吉備國起行宮以居之是曰高島

宮積三年間備舟楫畜兵食將欲以一舉而平天下也とあるものこれなり。番田の立石は小串の南銚立村大字番田にあり、高さ三丈餘また奇觀なり。

○中國鐵道(津山線)沿線 中國鐵道は岡山に接続して起り、北方旭川に沿うて溯り、美作國福渡驛に達してより川に別れて東北方に轉じ、以て作州津山驛に至る。この鐵道は、將來津山より伯耆の米子に達し、官設山陰線に連絡して山陽山陰二道の連絡を完備せんと欲するものなり。されど、その沿道山嶽多く、工事至難にして未だその開通を見ず。現時は僅に岡山、津山間三十四七十六鎖を通ずるに過ぎず。されど、岡山より因幡の鳥取、伯耆の米子、もしくは出雲の松江地方に往復せんとするものは、皆なこの鐵道に依るを便とすべし。また、旭川には川舟の便ありて、作州の勝山、久世、落合地方より岡山に通せり。備前國內に於けるこの鐵路の車驛は玉柏、野々口、金川、建部の各驛とす。

●玉柏驛 岡山より四哩二十六鎖といふ。旭川の上流に沿へる一村落にして、停車場

より旭川を隔て、十五町、上道郡高島村に龍口城址あり。天正中撮所元常の居城にして、宇喜多秀家の爲めに陥られたる所なりといふ。關白屋敷址(前出)また近し。

加佐米山 地名辭書曰、「金山の別峰にして、牧石村大字鮎畑に屬す。寺あり、笠井山妙法寺と呼び、薬師を安置せり、山の絶頂に經塚を築く、方二間ばかり石を積みたり山中に笠朝臣の古墳と稱ふるものあり(國誌)。夫木集「天がしたかさめの山の草木まで春のめぐみに霧をあまねき」。

金山寺 牧石村大字金山寺村、字金山の半腹にあり(岡山市を距る二里二十四町)。天台宗にして元と觀音寺と號し、天平勝寶年中報恩大師妙見峰に創造し、康治年中今の地に移す。實に報恩大師創立國內四十八ヶ寺の本山といへり。境内坪數は三千三百六十坪にして、本堂には報恩大師作千手觀音の像を安置し、其左右護摩堂、開山堂、三重塔、護法堂、三王權現祠、稻荷祠、豪圓僧正堂等あり。地は背後に金山の峻嶺を負ひ、南方は開けて兒島灣及び讚岐の翠樹を望み、眺矚頗る秀麗なり。寺寶には、中

興開山榮西禪師の唐より携へ來りたる迦葉尊者袈裟、密器金剛鈴鉢、紺紙金泥の法華經(光明皇后御筆)、不動明王像(弘法大師作)五大尊像(同上)、禁中九重守版木(傳教大師彫刻)、その他數點あり。猶、金山(千四百八十餘尺)山中には、潮満石、八疊石鬼切岩などありといふ。

玉柏より汽車は旭川に沿うて、一曲また一曲、或は隧道を穿ち、前に畫くが如き村落を見、或は晴帆一々順風に孕みて下るなど、頗る山水の趣に富めり。野々口驛に至りて、津山街道は來りて會す。同驛の南に道林寺あり。これより北一里餘、金川の一色ありて、停車場を置く。

金川村 人口二千餘を有する津山街道の一驛次にして、鐵道、岡山を距る十二哩、作州福渡を距る六哩半、里程岡山へ四里三十二町といふ。而も、地は宇甘川の旭川に合流する落合に當り、風光頗る明媚なり。物産としては、旭川の香魚、鎌、鍬、竹細工紋蓆等を産す。

妙覺寺 金川停車場を距る十町にして、臥龍山の南麓にあり。日蓮宗不受不施派の

本山として名高し。大日本地誌曰、「備前に於ける日蓮宗の中、不受不施派の根底頗る深きは注意すべし、不受不施派は江戸時代を通じて嚴禁せられ、非常の虐待を受けしにも不拘、或は夜人靜まりて後密に土藏の中において祈念し、または柱を割りて中に題目を封じ、嚴刑酷罰の下、幾多の苦難と戦ひ法網をくぐりて父子兄弟相傳へ、明治に至り、遂にその再興を見るに至れり、而して、現今の不受不施派は更に二派に分る一は單に不受不施派と稱し、同國津高郡金川村妙覺寺を以て本山となし、一は不受不施派講門派と稱し、教會組織にして別に寺院を有せず、同國蓮華教院を以て本部となせり。猶、妙覺寺の創立は明治九年といふ。

日應寺 金川の西方二里にして、馬屋村にあり。日蓮宗の古刹とす。

圓城寺 上田村字圓城にあり。日蓮宗にして、元正天皇靈龜元年の創建といふ。往時は正法寺と呼ばれて本宮山にありしを、後、今の地に遷したるものなり。

加茂山及本宮山 加茂山は御津の北部にあり。山中、樹木多く、殊に松、樅、杉、

檜等の良材を出すを以て名あり。また、山の西南に鹿殺と稱する難所あり。本宮山は加茂山の北に位す。高さ千九百二十餘尺にして、加茂山と南北相對峙し、また多く良材を出すを以て名あり。

金川より、鐵道は隧道を穿ち、建部驛を經、旭川の鐵橋（長さ六百十尺）を渡りて作州福渡驛に至る。此所には更に金川以北旭川東邊（上道郡）の地の名勝を尋れん。

伊田鑛山 金川村の東二十町なる五城村にありて、旭川の水運を利用するの便あり。鑛石は黃銅鑛に少量の黃鐵鑛を雜へ、方鉛鑛、磁硫鐵鑛、磁鐵鑛を副産とせり。また同村に佐野鑛山あり、磁硫鐵鑛を主産とし、現時それより綠礬を製造せり。また、共産の鑛石として、黃銅鑛、方鉛鑛を産出す。五城村新店より前田に至る里程は東南二里なり。

八幡神社 竹板村大字小倉にあり。延喜以前の勸請になる古祠なるべしといふ。地境、風光また佳なり。

布都之魂神社 布都美村大字石上いしのかみにあり。創建年月は詳かならざれども、社傳に據れば、崇神天皇の御宇大和國山邊郡より此地に移し、後ち廢絶せしを、寛文十年國守源綱政其の舊趾をトして社殿を再築し、累代神領を寄附せりとぞ、社地は、登路八町餘の丘陵にして、満山松柏鬱茂し、本殿、拜殿、幣殿、神樂殿、神饌所等其の中央に鎮す。山麓字風呂の谷に小池あり、小流此より發して旭川に入る。其の近傍足洗淵等の舊跡あり。岡山市を距る正北六里とす。

## 備中國

備中國は東は美作と備前とに接し、西は備後に境し、北は伯耆に連り、南は瀬戸内海に臨む。東西大凡十一里、南北二十里、面積百十餘方里を有し、岡山縣の管下に屬し、都窪、淺口、小田、後月、吉備、上房、川上、阿哲の八郡より成る。國の北部は中國山脈主軸の走るところにして、數多の高峯を起し、其餘波は延いて國の全部に及び、從ひて國內全く山巒を以て蔽はる。北境にある中國山脈の主軸は西南西より東北東に走り、千米乃至千五百米の高距を保ちて、山陰山陽の分水界をなし、日野川（伯耆）と高梁川の灌域を分てり。備中、備後、伯耆の境に三國山（一二四〇米）あり。其東に飛石山あり。これより稍低夷し、鷹巢山、鷹畑山（七百米）あり。その東にある谷田峠（四九〇米）は中國山路を横斷する最も低夷せるものとす。この東方再び隆起し、石原山（九九二米）明石山（八四六米）を崛起し、高梁川の源頭に於て愈高く、小栗が

山(一二五三米)三か月山(一〇四〇米)を聳立せしむ。この主軸より岐れたる阿哲郡の山地は、北部に於て千米内外の高距を有し、矢の峰(九三九米)男前山(一一三〇米)女前山(一一二二米)大佐山(九一七米)等最も著名なり。美作の境上には次郎三山(一〇〇〇米)大岩山(一〇〇二米)硯山(八九二米)等あり。これより南するに従ひ、波状の丘巒相接し、全く高原の趣を呈し、備後比婆郡東部の高原地に接し、高梁川の西に愛宕山(六八五米)鷹巢山(五〇八米)黒髪山(六〇〇米)等あり。阿哲郡以南、川上郡の地は、川邊川の支流成羽川の南北に於て殊に標式的高原地を成し、川の南北に平川及び西油野の高臺地あり。また、成羽川の北方高梁川に臨みて、飯部臺地(二八〇米内外)春木臺地(三六〇米)あり。これ等高原上には玄武岩より成れる鈍圓錐状の山ありて、鐘または鉢を伏せたるとき状を成す。日野山(七六九米)彌高山(六六〇米)等その最も著しきものなり。これ等高原の南方は、再び山地状を成し、高山(六四三米)海見山(五二〇米)青瀧山(五六〇米)平山(四九一米)等あり。上房郡、吉

備郡の山地には太平山(七二八米)大藏山(六九二米)祇園山(四五〇米)引立山(六〇〇米)等あり。高梁町附近に鷄足山(四二七米)及び愛宕山(五六八米)あり。後月小田二郡には小田窪地帯、鴨方窪地帯あり。此間に陽生山脈連互し、陽生山(四三五米)最高し。これより山巒全低夷し、遂に岡山市の西なる小丘に終る。鴨方窪地帯の南には二二〇米の高距を有する、山地連互し、御嶽山(三三三米)其主峰を成す。國はかくの如く山嶽高原多く、平地は川邊川末流の沿岸に過ぎず。總社附近は小田川窪地帯の東部の稍廣くなりたる處にして、川邊、總社、板倉等諸邑あり。其他玉島附近平野、倉敷附近平野等あり。河流は皆北より南に流れ、高梁川(川邊川)の一大長流國の中央を流れて、一大動脈の形を成す。支流に唐松川、成羽川、小山田川等あり。其他直接に内海に沿ふものに、鴨方川、板倉川等あり。市邑は山陽線路上に庭瀬町、倉敷町、玉島町、笠岡町等あり。高梁川の沿岸に高梁町、其上流に新見町あり。

沿革 古へ國府を賀陽郡に置く。鎌府の初め土肥實平梶原景時をして守護たらしめ

元弘中高橋英光守護となり、松山城に居る。足利尊氏の反して山陽を徇ふるに及びて高師秀を守護とし、天正年中山名時氏吉野に歸順するや、國の豪族秋庭重明これに應じ、共に師秀を逐ひ、重明守護代となりて松山に居る。天授中足利義滿細川頼之をして守護を兼ねしむ。應永年間その弟滿之職を襲ぎ、上房郡井ノ山に治す。二子基之、滿重相繼ぎ、滿重の孫勝久に至り、文明々廳の際細川、秋庭の二氏皆な衰へ、莊元資は小田郡猿掛に據り、三村宗親は成羽にあり、各々統屬するところなし。永正六年上野頼久秋庭氏に代りて守護代となり、松山に居る。同十二年將軍義植細川政春を以て守護に補し、淺口郡鴨方に治す。既にして大内、尼子の二氏各々侵入して尼子氏遂に西北諸郡に據る。天文二年莊爲資上野氏を亡し、徙つて松山に居り、小田、下道、上房三郡を併す。同二十二年宗親の子三村家親毛利元就に附し、猿掛城主穂田爲資を攻めてこれを降し、川上、小田二郡を取る。永祿三年家親毛利氏の援を乞ひ、莊高資を殺して松山に據り、勢ひ漸く強大なり。同九年美作に入りて宇喜多直家の刺客に殺さ

れ、子元親嗣ぐ。元龜元年直家來り侵して鴨方を攻め細川通政を殺して元親を松山に圍む。毛利氏兵を遣りてこれを救ひ、直家を撃ちてこれを却く。天正二年織田信長西伐を謀り、元親を誘降す。明年毛利氏の兵松山を陥れ、元親を殺し、細川通政を降し、盡く全國を併す。同十年豊臣秀吉大舉して來り伐ち、高松を圍む。毛利氏終に河邊川以東の地を割きて和を講ず。後、秀吉その地を以て、宇喜多秀家に加賜し、關ヶ原の役畢り、徳川氏毛利氏の地を削り、秀家の故地を收めて小早川秀秋に與へ、また戸川達安を庭瀬に、木下家定を足守に、蒔田廣定を淺尾に封す。秀秋卒して封除し、小堀政次をして松山城に居りて國務を掌らしめ、子正一に至つて職を罷む。元和の初め池田長幸を松山に、伊東長實を岡田に封じ、寛文の末池田光政新墾田をその二子政吉輝祿に分與し、又元祿中關長治を新見に徙封す。王政革新、松山を改めて高梁と稱し成羽藩を立て、倉敷縣を置き、尋で皆な廢して深津縣に併せ、更に改めて小田縣を置き、明治八年十月岡山縣の縣治に屬す。





里、高松城址へ距る二里十一町、高松稻荷へ至る二里二十九町といふ。

坪井梅林 庭瀬停車場の南二十町餘、山田村大字妹尾崎字坪井にあり。老梅數百株

山に倚りて梅林を爲す。山上に廬舎の設けあり。且、眺望絶美にして、兒島灣の風光

岡山市の瓦甍等一々これを指掌すべし。

妹尾町 庭瀬停車場の南一里四町にあり。備前岡山より同兒島郡に通ずる四國街道

の衝に當り、岡山よりの里程約三里といふ。商業盛にして、牡蠣、伏老、鰻等この地の

名産とす。明治三年柳北航薇日記曰、「妹尾を立出つ、新開（この地はもと海にてあり

しを淺瀬砂地の自ら田畝となりけるより、備中備前の境になり）の三間川より、ひき

船にて下りぬ、二里ばかり行て植松といふ所につきぬ、このほとり蘆荻の花雪の如く

衣袂に點す、木綿花も處々に堆かく風景頗るよし、「一望寒村處々同、黄雲刈盡水田空、

木綿花吐蘆花舞、晴日人行風雪中」。

早島町茶屋町は、妹尾町の西南にして、共に都窪郡の南部に居り、花筵製織の業尤

も盛なり。凡そ花筵は岡山縣下に於ける著名なる産物にして、近世神戸を経て海外に輸出すること甚だ多し。而して、その産額の大半はこの郡より出づといふ。妹尾町、撫川の地方もその製織の業頗る盛なり。また、茶屋町よりは近時多く小倉織を産す。

倉敷町 庭瀬の次驛を置く。備中南部に於ける屈指の商業地にして、玉島、高梁と併稱せらるゝ國內の小都會なり。人口八千餘、倉敷川その西を流れ、且、鐵道車驛あるを以て、陸運水運共に便なり。加ふるに、往時より富商家の多かりしを以て稱せられ、家も民家整正、人烟稠密なり。今、町に都窪郡役所以下の官衙を置く。また紡績會社、精米會社等ありて、花筵、蠶表、木綿、小倉織、綿糸等の産業盛なり。曾て慶應元年、幕府に抗せる長州藩騎兵隊の一隊はこの地を襲うて岡山藩に戦を挑みしことありき。鐵道、岡山へ八哩とす。街道の重なるものには、山陽鐵道に沿ひて岡山市に達するもの、南方兒島郡に入りて下津井港より四國に連絡するもの、及び町の北端よ

り高深川に沿ひて上房郡高梁町に達するもの等あり。里程は玉島へ二里、笠岡へ八里下津井へ五里十五町、高梁町へ約九里といふ。

倉敷公園 倉敷市街の中央に位して、一小丘を成せり。鶴形山と稱し、老樹蒼鬱、これに登臨すれば倉敷の全市は脚下にあり。

足高神社 倉敷の南葦高村大字笹沖にあり。式内にして、大山祇尊を祀る。葦高の地名またこれに依れりといふ。

帯江観音 倉敷停車場の東南二十餘町、帯江村大字中帯江にあり。一に不洗観音と稱し、これに祈れば、安産の冥護ありとて、遠近來賽の子女多し。毎歲舊正月十七日、舊七月十七日を以て縁日となす。

日間山 帯江村羽島の南にあり。山甚だ高からざれども、夙に眺望の宜しきを以て聞えたり。而して、往時この山は一の島嶼にして、日向島と稱せりと傳ふ。また、山腹に法輪寺あり。眞言宗にして、天平勝寶年間報恩大師の道場と傳ふ。寺の西邊に小

野小町姿見井と稱するものあり、倉敷停車場より東南二十町内外とす。

金堀鑛山 倉敷町の東北一里弱、中庄村字黒崎にあり。鑛石は黄銅鑛、方鉛鑛、同亞鉛鑛を産すといふ。また、同鑛山の南に隣りて、全盛鑛山あり、同じく黄銅鑛、方鉛鑛、閃亜鉛鑛を産出すといふ。

酒津村 中洲村に屬す。倉敷、河邊兩川の分岐點にして、夙に酒津焼と稱する陶器を出すを以て名あり。この陶器は日用品を製するを以て主となし、伊部、虫明のそれに比して、價額や、低廉なるを以て、世の需用多しといふ。

菅生村の名勝 菅生村は倉敷の北にあり。この地の大字子位は昔時名工匠の居りし地として名高く、青江鍛冶の名は世に久しく聞えたり。また、同村に武内菅生神社あり。安養寺は一に朝原寺と呼び、眞言宗にして、由緒古き精舎とす。今、菅生村大字淺原に屬せり。

山陽街道は、ほゞ山陽線路に沿ひて岡山を出て、眞金、山手(福山)に古城址あり、延元年同將軍大江田氏經

の守城といふ)を経て、川邊川(高梁川の下流)を渡り以て邊村に至る。人口二千の一村落に過ぎざれど、川邊川に水運の便あるを以て、人烟や、盛なり。また地の南に古墳あり。其西北岡田村は吉備郡中部の名區にして、もと岡田氏一萬石の城邑たり。曾て下道郡役所はこの地に置かれ、今も總社警察署岡田分署をこの地に設く。岡山市を距る六里五町なり。箭田村は川邊の西にして、同じく山陽道の驛次に當り、南方玉島町の道路及び北方高梁道に連絡(日美にて接続す)する道路あり。且、地は吉備眞備の遺跡を以て知らる。岡山を距ること六里二十町、玉島町を距ること二里餘なり。

●吉備眞備墓 箭田村にあり。玉島驛を距ること二里餘にして、人車の便あり。眞備はその先吉備津彦命に出で、世々吉備に居る。國勝の子にして、靈龜二年二十四にして遣唐の留學生となり、唐に居ること二十年、歸朝して恩寵甚だ渥く、後また天平四年遣唐の副使として唐に赴き、優遇到らざるなし。爾後官位正四位下大宰大貳に陞り、怡土城(筑前國)を築くことを建言し、西海道節府使となり、九州の防備を盡す。後更に正二位右大臣に擧げらる。聖武帝崩後、官を辭して、生地たるこの地に還り、寶龜六年八十三にして薨す。著はすところ私教類聚三十八卷あり。また、現時用ふると

ころの片假名は實にこの人の創むるところとす。一書曰、「八田村に吉備大臣の廟あり二十年ばかり前に八田村より一里西なる東三成村の百姓、古き塚をほり、鐵器を出しその銘に下道氏國勝國頼の母の骨、和銅元年とあり、その器は所の地藏院に安置せり領主伊東伊豆殿國勝の社建立の心にて地藏院を改め、國勝寺と號けらる、骨器の銘に二十字餘ある由なり、國勝は即ち吉備大臣の親父なりと。」猶、附近に眞備の屋敷地と傳ふるものあり。賴山陽の拜吉備公廟に曰「黍國蒼茫帶夕燠、豐碑表道仰瞻君、張華傳物丈夫魂、胡廣中庸天下聞、綿蕝禮誰興一代、狄鞮國總讀三墳、千年功羅須公論、休向當徵檄文」。菅茶山の古備公廟に曰「公會懷壁泣京師、主聖連城早見知、北學親傳周禮樂、東歸更製潔朝記、爲能血食經千歲、轉信和羹美一時、近日書生委擲散、薦將蘋藻淚先垂」。

倉敷驛を出で、より汽車は西南走し、大川、河邊の兩川を渡りて、淺口郡に入る。河邊川はその上流を高梁川と稱す。下流都窪郡の酒津に於て二分し、一は即ち大川

となりて備前兒島郡の境界をなして海に朝す。川に舟楫を通ずるもの凡そ二十里、高粱町以下に於てことに便なり。連島村は大川の河口にして、村に眞言宗寶島寺あり。承和年間の創設にして、聖寶和尚の開基といふ。更に、その西方西浦村に篋取神社あり。玉島町の東北一里に當り、社殿丘上にありて、後には一帯の岡巒を負ひ前は千頃の田圃を見越して、水島群島より遠くは四國の翠黛に對し、風景宛も畫圖の如し。猶社の北溪に青木の梅林あり。更に、これを聞く淺口郡南邊の海岸は、往昔海水の深く灣入せしものにして、後汀線漸く南し、現時の地形を爲せしは少くとも三百年以後のことなるべしと。而して、古圖（元和、寛永）に依れば現時の連島、片島、乙島、柏島等は就れも海中の島嶼なりしを知るべく、その地名にも、如上の他、龜島、八島、玉島、爪崎、阿賀崎などあり。仁德紀曰、「六十七年於吉備國川島川（河邊川の古名）派、有虬、令苦人、時路人觸無所而行、必被其害、以多死亡、於是笠臣祖願守、爲人勇悍而強力、臨派淵、以三全瓠投水曰、汝屢吐毒、令苦

路人、余殺汝、沈是瓠、則余避之、不能沈者、仍斬汝身、時水虬化鹿、以引入瓠、瓠不沈、即舉劍入水斬虬、更求虬之余余黨類、乃諸虬族、滿淵底之岫穴、悉斬之、河水變血、故號其水曰縣守淵也、これ、即ち、當時王化に従はざりし不逞の徒を勇力ある縣守が征服せし記實なり。

●●● 玉島町 鐵道岡山驛を距ること十四哩、その停車場は町の北一里にあり。地は實に備中國第一の要港として、人口二萬餘を有し、淺口郡役所以下の官衙及び玉島區裁判所、吉備紡績會社、中備紡績會社等の建物あり。銀行また三箇を有す。海陸の運輸は極めて便利にして、ことに肥料の輸入甚だ盛なり。而して、その港は港口正南に向ひ海水深く灣入す、玉島灣即ちこれなり。また、物産としては穀類、綿、繭、紡績絲、花莖等を擧ぐべし。交通路としては、高粱町に到る縣道の長尾村を過り箭田に於て山陽國道に交叉し、尙ほ北方山田、日美を経て同町に達するものあり。里程は約九里、その郡界に於て坂路ありと雖も、猶近世の改修に係はるを以て、車馬の往來自在なり。

また、高梁地方より出入の貨物は高梁川水運の便利を籍りて、高瀬舟にて運搬し、玉島港より日々數艘の便あり。また、矢掛町に至る縣道は、北方道口を経て同地に至り山陽國道に會す。他に山陽鐵道に沿ふもの、沿海を黒崎、寄島に至るもの等あり。また、この地よりは讃岐の多度津及び丸龜へ定期汽船の便ありて、日々二回づ、往復す。就れも航行二時間にして達すべく、金比羅參詣には最も便なり。

羽黒神社 玉島町にあり。往時よりこの地の鎮守神にして、殊に舟人の崇敬厚く、祭典は毎年九月十四、十五日の兩日これを執行す。

萬春園 玉島停車場の北六町、長尾村にあり。一植物園にして、至珍なる草樹木石多く、ことに蘭、萬年青に尤物多し。

大元金神 玉島停車場より僅かに四町にして同長尾村八幡山の麓にあり。金神教會の本部にして、毎年春秋兩期祭典を執行す。

吉備鑛泉 玉島停車場の西北十六町、池田村龜山の麓にあり。明治二十六年の開泉

に係る。土地高燥にして、病痾養療に適せり。

圓通寺 玉島停車場の南一里、柏崎村大字柏島の丘上にあり。玉島町よりは西南二十五町にしてその地海に面す。寺は曹洞禪林にして、元祿中の重興と稱す。老松蒼鬱晩春の候には躑躅花亂發して、その色海水に相映じ、頗る奇觀なり。且、眼下に水島灘を下瞰して、彼方に四國の翠黛を望み、眺矚の美、淺口郡第一と稱す。堂宇また頗る宏麗なり。

養父ヶ鼻(琴の浦) 玉島停車場の南一里半にある勝地なり。全山古松を以てこれを蔽ひ、山頂に戸島神社を奉祀す。この邊一帶の海岸、これを稱して琴の浦といひ、前に水島灘に開きて、源平の古戰場たる水島を望み、その風光の絶佳なる、そらろに遊客をして去るに忍びざらしむるものあり。且、干潮の際には海岸一帶貝拾をなすによく、晩春初夏の候來遊の客多しといふ。

沙美浦海水浴場 玉島停車場の南二里半にして、黒崎村にあり。玉島港より日々數

回の通船往來し、且、人車の便あり。その地、後に山を負ひて老樹全山に繁茂し、翠色滴るが如く、海岸には奇岩起伏して、沙白く、水青く、西南には寄島の一青螺を指すべく、遠くは水島、鹽飽の群島より讃豫の群峯を望見すべく、風色頗る絶佳なり。清人王治本の詩に曰く「涼風落日放游船、白玉江干碧海前、帆影欹斜隨岸轉、峰痕平痰滯雲連、微明燈壁崖邊崖、創映星光水底天、七月今宵猶既望、坐看皓魄出波妍」と。また、有方録曰、「西山翁及社中諸子、約沙見遊、欲觀梅花、平旦離鴨方、二里路岐、有樹大拱、曰維舟樹、相傳、在昔潮水浸灌、海岸在此、外國船舶、維船待風、其木酷似貝多羅、沙見村、負山臨水、民皆淳朴、有梅三百餘株、盛開可愛、山脚方石如屋、大斧鑿、痕存。」猶、黒崎の西方一里に阿倉の不動瀧あり。

遙照山 玉島停車場の西北二里にして、山は盤距五里餘、淺口、小田兩郡に跨りて、標高千六百九十尺と稱す。山上に一精舎あり。嚴蓮寺と號し、仁明天皇承和十四年慈覺大師の草創に係る、往昔は法燈頗る盛なりしといへり。また、佛體は巨石にして、

表裏に佛像を彫刻し、牡蠣その他の貝殻の附着せるを以て名あり。

猿掛山 玉島停車場の北方三里にして、吉備郡穂井田村にあり。全山樹木鬱茂し、山上に猿掛の城址あり。また、山麓に吉備眞備の遺跡と唱ふる琴彈岩あり。洞松寺は禪宗にして、應永の創建、寺内に毛利元就の子穂田元清父子の墓碑あり。

山陽國道は備田より吳妹、三谷を通じて矢掛町に至る。

矢掛町 玉島停車場より里程三里とす。町は小田川に臨み、雄倉山を負ひ、地勢頗る佳なり。往時は頗る有名なる驛次なりしも、鐵道開設以來其繁華を南方笠岡に奪はれ、商業漸く衰退せり。抽餅子を地の名産となす。又此町に縣立矢掛中學校あり。町の東、猿掛山に毛利氏の古城址(前記)を存す。里程は東方川邊へ三里半、岡山へ九里十町、西方小田へ一里餘、西江原へ三里とす。

彌高銅山 三谷村大字横谷にあり。元文以降の稼行と稱せしも、後久しく廢坑に歸し、近世再びこれが發掘に着手せしもの、國內著名の銅鑛なり。

鵜江神社 矢掛町の西、川面村にあり。鵜宮と稱し、式内の古祠にして、樂々森彦命を奉祀すといふ。

鬼の釜 鬼ヶ嶽は、小林川の上流にありて、宇戸村に屬す。山容風致多く、且、頗る怪巖奇石に富めり。ことに鬼釜と稱する穴竇尤も名ありといふ。

玉島停車場より山陽鐵道に乗じて、西すれば、遙照山を主峯とせる低山脈は鐵路の北方を東西に横はり、山陽國道と濱街道とは全くその連絡を絶つ。

大谷金神 吉備村字大谷にあり。金光教會の本部にして、玉島停車場より西二里八町、鴨方停車場より東一里とす。金光教は嘉永年間金光大陣の創設したる一派にして初め佛に屬し、明治六年改めて神社となす。謂ゆる三柱神として月乃大神、日乃大神、金乃大神を奉祀せるもの、信徒甚だ多く、他府縣を通じて、教會支部四十餘ヶ所あり。毎歲春秋の祭日には、遠近の詣者雲集してその雜踏名狀すべからず。山陽鐵道は特に金神停車場を設けて詣者の昇降に便するを見ても、その殷盛を推知すべく、岡山の黒

住教と相並んで、寔に地方有數の流行迷信教たり。猶、特に金光中學校あり。一書曰、「金光教は、淺口郡の農夫藤井文次郎の創むる處にして、其説に、金光大神は他の諸神と異なり、靈驗最も灼然たれば、之を信するものは、災厄凶禍にかゝるの憂なく、もし未だ信念を發せずして、疾に惱み禍を受けつゝあるものと雖、一度之を信じなばよく禍を轉じて福となすを得べし」とて、嘉永年間より盛んに傳道を試みて愚民を誘ひしより、これ亦今日に於ては相當の信徒を有するに至りしが如し。因に今日は獨立の一派と認められ、第三世金光大陣管長として日に發展を爲しつゝあるに似たり。

泉勝院の櫻 占見村にありて、金神よりは僅に數町に過ぎず。櫻樹數百株を栽植し花時の美觀言ふべからず。

菅茶山の赴鴨方途中に曰「女兒傾筐采新糧、雨後寒生迥野風、知是授衣期已近、村家竹裡響棉弓」鳴榔聲斷水煙虛、霞露飄風繞故墟、潮退晚汀沙磧潤、女兒相喚捕草魚」。

鴨方驛 玉島の次驛にして、同驛より六哩を距て、更に西方山嶺を越え約六哩にし



て笠岡驛へ到るべし。村は停車場を距る二十町にして、人口は約二千餘を有す。地はまた碩儒西山拙齋の出身地として名あり。鐵兜の備中道中有懷西山先生に曰く「窮郷例由名士著、西山夫子讀書所、土人導我乘春風、一路出花入松去、墓門不掃青苔重、遺愛空留玉芙蓉、摩挲懷古感逝水、百年吾道何所宗、重過山陰情不已、下馬猶望鴨方里、想見再拜啓函時、一片白雲夕陽紫」、今、拙齋翁の碑は鴨方村長川寺を距る一里餘の山腹にあり。また、加茂山には細川通董の古城址あり。鴨方驛より南方寄島港までは里程一里四町にして、里道あり。

寄島港 鴨方停車場の南一里四町、玉島停車場の西南約三里ばかりにして、玉島との間は縣道を通せり。地は淺口郡の西南沿岸なる一邑にして、この港より中國航海の汽船便あり。また、食鹽の産地としてその名高し。寄島は港の東南二十町餘にある一島嶼にして、周圍二十三四町を有す。また、その西南に三郎島と稱する三小島あり、島に奇岩矮松多く、且、眺望の雅趣あるを稱せらる。而も、干潮にはこの三島一に歸

し、潮満つれば、また三島に分る、島上に富士明神祠あり。

鴨方驛より、汽車は小丘陵の間を過ぎ、直ちに小田郡笠岡町に至れば、水色山光、忽ちにして一場の好風景を幻出し、久しく山陽鐵道の平凡なる山野に倦みたる旅客をして思はず胸襟を披いて之に對せしむ。深碧なる海に長く横はれるは神島の一大島嶼にして、片島の青螺これと相連り、圓形を描ける灣は到る處に白帆の影を點綴し、更に遙に備後の幾島を隔て、沼隈半島の青螺と相對し、風光の美宛として一幅の名畫を展けたるが如し。菅茶山の口林（里見村新庄）路上に曰「海路變環人影長 窖烟春相冷斜影、山村十月猶多事、數處低田插蘭秧」。

笠岡町 今、民口一萬餘、國內著名の海港にして、水陸交通の要衝に當る。市街は東西に長く、南北に短く、商漁相半せる一種異色の街衢を成せり。而も、地はもと小田縣廳のありし所、今も小田郡役所を始めとして、笠岡警察署、同區裁判所等の設備あり。物産としては多く麥稈真田を産し、また、その市場に現はる、農産物には穀類

藍あり。製造品としては麥稈真田の他に、紡績糸、生糸、花苳等あり。その他製作工場としては、山陽製糸株式會社、笠岡紡績株式會社、中備製糸株式會社等を有し、岡山銀行支店、二十二銀行支店はその重なる金融機關たり。交通路としては、山陽鐵道并に縣道の他、町内西部殿川町より北を指す井原街道あり。同じく縣道にして、町を北に距る二十町にして分岐し、その北行するもの井原町に達し、やゝ東に邊して北行するものは新山を経て小田に達し、共に山陽國道に連絡す。猶、この港は國內の良港として知られ、海口は停車場に近接せるを以て、海陸の交通至便なり。従つて大小和船の出入甚だ頻繁なれど、惜いかな港灣淺にして百五十噸内外の汽船を容るゝに過ぎず、毎日一回の汽船便あり。讃岐の多度津とは海上僅に十里を隔つるを以て金比羅參詣者は當港より乗船するを捷路とす。鐵道は岡山を距る二十六哩にして、福山へは西方福山を隔つるに過ぎず。その他、井原町へ三里二十七町、小田村へ三里十八町、矢掛町へ四里十八町、成羽町へ九里、新見町へ二十二里十八町とす。

遍照寺 笠岡町にあり。真言の古刹にして、天正年間の創建に係る。僧宥順の開基なり。

古城山 笠岡町の東海濱にあり。この山、正保元祿の頃には海中の一山島なりしといふ。高さ三百尺、昔は應神山と山つゝいさなりしを、戰國の比この山上に城砦を築造するに當り分割したるものなりと傳ふ。山容温雅にして、老松蟠屈、頂に狐王廟あり海山の眺望尤も美と稱せらる。而して、その城はもと永祿年間村上高重の守城地にして、後、幕府時代には小堀氏、池田氏等これに居れりといふ。

道通神社 笠島停車場の東南一里にして、横島村にあり。猿田彦命を奉祀す。  
 神島(神島瀬戸) 神島は笠岡の南に布ける群島中第二の大島にして、周圍約四里十三町餘、島中山脈は東西に互りてこれを南北の二部に分つ。北を内浦と南を外浦と稱す。合せて人口三千二百ばかり、住民は多く漁業を營みまた耕種を副業となす。謂ゆる神島瀬戸とは内浦の東端の淺口郡に對して成せる海峡の稱にして、一にこれを天神

瀬と呼び、幅員二町餘、附近風景絶佳にして、海水浴并びに釣魚等に適せり。また、海峡の西松林の中に菅公を祀れる一小祠あり。

高島 神島の南十二町に居りて、神島外浦に屬す。方一里十七町餘、島中に玉柏と字する一部落ありて、神武天皇を奉祀す。

白石島 高島の南十三町にあり。方二里二十町餘、その東北海上二町餘の所に巨岩兀立す。これを沖の白石島と稱し、色白くして甚だ奇觀なり。また、島の東北海岸に弘法溪と稱する奇溪ありて、僧空海を祀る、景勝尤も佳なり。散木「白石の洲をすぐ

るとてよめる、問へかしの沖の白石しらすとももの思ふ舟のなきこがるゝを」秀野の白石舟中に曰「打頭風急渡江船、矛櫓搖々破水烟、蓬雨牧聲潮勢轉、青山流過夕陽前」。

北木島 白石島の東南七町にあり。この附近群島中の最大なるものにして、周圍四里三十一町、人口約三千二百ばかり、その南部に小灣あり、東に開く、これを大浦といへり。菅茶山の途中口占に曰「本兒洲畔白鷗飛、笠子岡邊紫蟹肥、水國女郎能盪漿、

輕力遙載束薪歸」。

眞鍋島 北木島の東南十八町にあり。方一里三十町餘、人口二千八百とす。山家集に曰「まなべと申す島に京より商人ども下りてやうくの積物ども商ひてまた鹽飽の海にわたりて商はんする由申けるをきゝて「まなべよりしわくへ通ふあき人は罪をかひにて渡るなりけり」。

如上の他、猶、大飛島、小飛島、武島（備中國の極南にして、讃岐國三崎と相距ること僅に一里といふ）等あり。また、以上の島々に附屬せる小島あり。これ等は孰れも相助けて謂ゆる瀬戸内海の美を盡せるもの、笠岡より小舟を舩して、これ等島嶼の間を悠遊せば、その興實に盡くべからざるものあらん。

笠岡驛より、山陽鐵道は金崎の一隧道を過ぎて備前國に入る。福山驛に至る約九哩なり。

大仙山 笠岡停車場の北五町にあり。伯耆大仙の末派にして、毎年舊七月及び十二月の廿四日を以て縁日となす。

備中國

二二九

●桃梨園 笠岡停車場の東一里、今井村(小田郡)字廣瀬にありて、人車の便あり。桃紅梨白、花時の美觀思ふべし。

井原街道は笠岡町の北二十町追分宿に於て東西に二分し、一は小田に於て、一は井原町に於て、各々山陽國道に會す。前者の街道上山口村及び後者街道の西なる稻倉、大江兩村附近に於ては時々石器期の遺物を發掘することありといふ。

●小田の渡 山陽國道の小田村近傍その舊趾なるべし。古書に曰ふ、今の驛路は此を渡らざれども、古へは是より南へ渡りて走出村、木之子村を西へ行きしなり。何時の頃にか河の流れつきかはりて今の如くなれり云々。茲に云ふ河とは小田川の事にて、往昔は今の國道を横ぎり、其河幅もいと廣かりしなるべし。嘉言の古歌に曰「有明の月の夜ふかく出ぬれば小田のわたりに雁ぞ啼なる」。猶、小田の東南木之子村字高月より石器時代の遺物を出す。

●千手院 山野上村にあり。眞言宗天平年間草創の古刹にして、開基は僧行基といふ

境内風致に富めり。

●興讓館 西江原村にあり。安政二年創立の私立學校にして、當初は教諭所と稱せしが、後、改稱し、坂谷朗廬を聘して、領内の子弟を教育せしめし所なり。朗廬は、川上郡日里の人にして、學徳共に譽高く、殊に文に熟達したり。館は、蓋し、國內私立學校の嚆矢といふ。

●永祥寺 同村にあり。曹洞の巨刹にして、嘉吉元年(或は曰、永享年間と)これを創建す。開山は即ち僧良秀にして、開基は那須與市宗高といふ。境地幽邃、且、その東西に二瀑あり。東瀧は高さ十尺、幅十尺西瀧は高さ三十尺、幅十尺、共に觀るべし。猶、この地の小菅城は、古へ那須與一の子孫の居城なりしといふ。

小田を経て來れる山陽國道は、江原新町の小邑を経て、江原川を渡る。これより國道は北に一路を派し、また南は笠岡町よりの街道に接続す。北に岐れたるは即ち備後街道にして、その國道より一二町入りたる所に後月郡の首邑井原町あり。國道は更に西を指し、七日市、高屋の諸邑を経て、終に備後國に入る。高屋は四江原を距ること一里半、岡山を距ること十四五町にして、國內に於ける山陽國道の極西地なり。菅茶山の高

屋途中に曰、「山雲半駁漏斜陽、埃樹蕭條十月霜、野店留人勸壽麵、一籃銀織出飯香」。

井原町 笠岡町の北方約三里半、岡山市を距る十二里ばかりにあり。後月郡衙の所在地にして、人口凡三千、郡衙の他に井原警察署、井原織物會社、中備製糸會社、井原製食會社等あり。綿、藍、玉、刻烟草等を以て物産となす。また、小田川は備後國深安郡よりこの町の北を過ぎ、更に山陽國道の南に沿ひて東流し以て河邊川に入れり。重玄寺 足次村天神山の東にあり。曹洞の禪林にして、僧千畝の開基、創建は嘉吉年間といへり。

天神溪 足次村(吉井)の北にあり。巨松老杉多く、且、菅公の神祠あり。社前、溪流に沿うて楓樹多く、秋時尤も觀るべし。幽閑の境なり。

吉井鑛山 宇戸川と小田川との會湊點附近なる山腹に位し、吉井に屬す。鑛石は主に黃銅鑛及び黃鐵鑛なり。また、附近に廢坑多し。

花瀧 明治村の花瀧にありて、西江原村より北二里餘を距つ。瀧は、里民その水聲の高低によりて晴雨を知るより一名を鳴瀧と稱し、高さ六間、幅二間、巨岩の上より落下して、白沫花の散るが如く美にして且つ壯なり。附近、また山高く溪深し。瀑水の末は即ち江戸川なり。

清和寺 下鳴村にあり、元慶中の創立にして、曹洞禪家に屬す。蛇穴 上鳴村の西方にして、鳴川の傍にあり。入口狹隘なりと雖も、入るに従ひて漸く廣く、且、低下して、深さ凡そ六百に達すといふ。

かくて、備後街道は東三原の一村を経て、後月郡より川上郡に入る。郡界に近く高山村あり。それより路は西折して備後神石郡の山中に入る。

高山村 後月郡界の山上に居り、備後街道の一驛次とす。東北成羽町へ里程約四里なり。

穴門山神社 高山村大字高山市に鎮坐す。即ち、長田山の中腹にして、社前は崖に臨み、社後には松杉鬱茂す。前に溪流を環らし、風景幽邃なり。また、社傍の山腹に

一の洞窟あり。天の岩戸に擬す。

昇龍瀧と魚切瀧 共に高山村の北、平川村にあり。前者の所在地を字穴針といひ、後者の所在地を字下郷といふ。

昔時の謂ゆる手之庄とは今の手莊村、大賀村、日里村等これにして、高山村の東、成羽町の南とす。その中手莊村の地頭はやゝ小驛市をなせり。

その名勝としては、大賀村に松原山あり、大竹川の南岸に峙ちて、景致愛すべし。また、同大賀村上大竹に澤柳瀧あり、懸下三段に分れて落下し、頗る壯觀なり。また、手莊村に白蛇瀧及び國吉城址あり、後者はその地を手莊村の字七池といひ、國吉山の巔にして、古へ、安藤元理の創起といふ、後、明治維新に至るまで、三村氏、口羽氏、糟屋氏、池田氏、水谷氏、交々これに居れり。

○中國鐵道(湛井線)及高梁街道 岡山市を起點として起る中國鐵道に二あり。一は同市より作州津山を経て伯耆の米子に至らんとするものにして、此は既に前出せり。此に記せんとするものは、岡山市より山陽國道及び高梁街道に沿ひて河邊川の灌域を溯り、以て上房郡高梁町に達せんとするものにして、現在終點驛を湛井に置く。その

車驛には、三門、一宮(以上備前)、吉備津、稻荷、足守、總社、湛井の各驛あり。吉備津神社、高松城址、高松稻荷、國分寺、國府址、豪溪等の名勝古蹟は、雜然としてその間に散在す。湛井より高梁街道は、一路遠く川邊川の流域に沿ひて、日美(山陽國道の箭田及び山陽鐵道車驛の玉島港に連續する街道あり)を経て高梁町に至る、實に備中北部の一中心地をなせり。これより阿哲郡を経て、出雲に入るの一路は、遠く高梁川の水流に沿うて、川面、草間、井倉、親見町、上市、新郷の諸邑を経て國界を越ゆ新見町は阿哲郡役所の所在地なり。この他、高梁町を中心として起る道路には、同所より西又北方成羽町及び吹屋町に至る道路あり。吹屋町の山中よりは多く銅その他の鑛産物を産し、此等は皆な成羽町より成羽川の水便にて遠く玉島港へ輸送せり。また、高梁町より北を指す道路は、鳥井川の流域巨瀬村に於て二分し、一は直ちに北方水田村(上水田村に著名なる鐘乳洞あり)に到り、他はやゝ西して、中津井、刑部、上刑部を経て坂地峠より隣國美作に入り、直ちに山陰國道に相會す。



八十餘歳にして薨じ、之を吉備の中山に葬る。後、仁徳天皇の御宇勅して一宮大明神の神號を賜ひ、神殿及び末社七十二宇を創立せしめらる。爾來社殿を造營する毎に其の舊様を改めず、規模の宏大なる建築の壯麗なる備中一國に冠たり。先づ眞金本村大華衣の在る處より左折すれば、一條の賽路ありて、其の兩側老樹鬱然繁茂して列を爲す、之を櫻の馬場と云ふ。馬場の盡る處より石階を登れば正面に總拜殿梁間三間、桁行十五間、拜殿梁間五間半、桁行二間半あり。之に接して本殿梁間十間二尺、桁行九間二尺あり。拜殿の西に長廊を架す、長さ百八十間、回廊に沿ひて二三の末社あり。又其盡る處に細谷川の古蹟あり。碑を建て、之を標す。又此社に御釜の鳴動といふ事あり。回廊の中央より西に入り、一の小廊に沿ひて進めば正殿に御釜ノ御殿あり、安原備中守の創建なり。賽人若し吉凶禍福を占はんと欲すれば、先づ供米料を投じて之を阿曾女に請ふべし。阿曾女は、柴を竈に焚き供米を篩に入れて御釜の蒸氣に翳すと暫時にして、御釜忽然として鳴動す。願主吉なれば其響き雷よりも高く、若し不吉な

れば聲低くして茶釜の沸騰するに似たり。即ち其音の大小を以て禍福を豫知すべきなりと稱す。所謂吉備の中山とは、吉備津神社の後にある丘岡にして、一に茶白山または鯉山と稱し、吉備津彦命の山陵なり。本殿より御陵まで距離五町といふ。山は備前御津郡との國境に近く、一堆の砂山にして、松樹雜生し、一條の小流山中より發し、吉備津神社の境内を横ぎりて宮内本村に注ぐ。古歌に名高き細谷川は是れなり。舊は有木の別所より發源し、備前の境に入れる長流なりし由古史に見えたるも、今は一小溪流に過ぎずして、夏は水の涸るゝとありといふ。歌に曰く「まがねふく吉備のなか山帯にせる細谷川の音のさやけさ」「常磐なるさびの中山おしなへてちとせを松の深きいろかな」、善滋朝臣爲政「動なき君が御代かな眞金ふくさびの中山常磐かきはい」「後鳥羽院「まがねふく吉備の中山うちとけて細谷川に岩ぞぐなり」權僧正公朝「苗代にほそ谷川をせきかけて吉備の山田は帯をひくなり」。また、吉備中山の山つゝきに有木山あり。此に小祠を安んじて、有木神社といふ、即ち吉備津彦神社の攝社なり。地



今は風景の賞すべきなしと雖も、古へより吉備の名所にして、中山、細谷川と共にその名噴々たり。備中名所考に曰、有木はせばきところなれど成親卿の配所にて、遂にそこに身まかり給ひし事などあはれなるものから、世に名高きにや、大賞會の歌などに詠まれしはことごとろなるにや思へりしはあらざりけり。藤原經衡の歌に曰「祈るこしるし有木の山なればちとせのほども頼もしきかな」、橘盛永「有木山今ありきとも君こそはかぞへもしらめ松のちとせを」。猶、中山山中には音羽瀧あり、清泉數條、山上より湧出し、直下數丈の瀑布を懸く、下流は即ち細谷川なり。猶、有名なる丸木橋址あり。山上よりは、阿、讚の諸山を雲烟糶糊の間に望み、近くは兒島灣内の白帆を指點す、尤も好望の地なり。また、名高き僧榮西はこの吉備津神社の神官賀陽氏に出でたりといふ。同僧は、後、文治三年宋に赴きて詳に佛教の奥義を極め、建久二年歸朝して、始めて禪宗を唱へ、且、京都建仁寺を創立したる英僧なり。人類學雜誌曰吉備津彦命の御墓は、吉備中山の絶頂にありて、瓢形の大塚なり、全體に岩石の缺片

相重なり、眞誠の石塚のやうに見ゆ、南北百八間、東西五十八間、瓢形の頭は南を向き、塚の近傍には埴輪物の破片も散在す、山中また石舟といふものあり、長方形の刳り抜き石棺にして、南北長さ六尺四寸、東西の幅三尺三寸高さ一尺三寸、厚さ六寸、蓋石を粉失せり、石槨の幅は五尺餘、奥行は三間ばかり、高さは四尺を有す。明治二年柳北紀行曰、馬より下りて、吉備津の宮に詣づ、宮殿甚だ古く、往古の遺風を存するもの多し、余各地の寺院祠宇を觀るに、未だこの宮の如くかみさびたるものを見ずこの吉備津の宮は大吉備津彦の尊を祭る（即ち孝靈天皇なり）、聞く、天皇の時鬼會あり、この地に住む鬼天皇を呪詛せんとて鯉と化し、板倉川を下たる、天皇これを射て殺し給ふ、いま足守より西二里許に鬼の城といふ山あり。山上に鬼の鍋とて丈餘の大釜あり、其古色數千年の物たるよし、此の宮の傍に回廊あり、古色最深し、廊を過ぎて祠殿にいたる、殿簷に銅燈數十あり、みな數百年間のものにして、殊に愛玩すべし、祠傍に猿樂の舞殿あり、荒廢してたゞ落葉狼籍たるを見る、回廊を左りにめぐれ

ば一屋宇あり、中に神竈しんろうを築けり、上古の釜あり、二媪そのかたはら其傍にあつて松葉を薪に作る、この媪は此神の仕女なり、余に語ていふ、この神釜其の靈甚だ大なり、われ等二人の外宮人も拜する事を得ず、祠殿に於て祈るとあれば、此神釜鳴動すると恐るべしと、其姿も物いふさまも千早振神代の人に見ゆる心地せり、荒れはてし吉備の中山なか／＼に在すか如き神の御社、土人いふ、此回廊は在昔備前の吉備の宮に續きたりと備前備後みな吉備の宮あれ共、此備中の宮最も上古のさまを存すと云ふ、廊を出て祠後に大なる石碣あるを見る、石に刻して吉備中山細谷川の古跡といふ、其あたり紅葉多く、溪水潺湲として人間に遠き景色あり、此地は三薇中の古蹟にて、往昔を追想するに餘りあり、祠前より市街櫛比して一都會をなす、酒店妓館も多くありて、遊客もまた少からず、日已に西に傾きければ馬を馳せ、再び撫川より妹尾に歸る。

高松城址 眞金村より北凡そ三十町の高松村にあり。岡山市よりは西方凡そ三里にして、山陽鐵道の庭瀬驛よりは北二里十一町にして、人車の便あり。城は、天正年間

毛利輝元の屬城となり、清水長左衛門宗治の據守せしところなるが、天正十年織田信長その將羽柴秀吉を遣して、毛利氏征討の師を出すや、兵を移してこの城を攻めしも宗治よく防ぎ、月を躑えて下らず、秀吉即ち一策を案じ、足守川を壅ぎ、水を城中に灌ぎたり。時に織田信長の本能寺變あり。秀吉毛利氏と和を議するに及び、宗治は白刃して、城兵の死を救ふ。世に高松城の水攻と傳唱するもの即ちこれなり。而も、今はこの地邊變じて全く田圃と化し、僅に石堰の址及び長左衛門の古墳遺址の碑石等を存するのみ。陰徳太平記曰「高松城は、平地の少し小高き山なりと雖も、四邊に深田を帯び、或は池沼をめぐらし、僅に一騎打の細道を通じ、五千の士卒死地にありて、生を思はず、かゝる所を人力を以て攻めんには勞して功無かるべし。」大日本地誌曰「高松城の地たる、東北に立田、鼓、龍王の連山を控へ、西南に足守川を帯び、城の周圍三方は沼澤にして、僅かに細徑を通じ、斬濠もまた廣深なり、秀吉攻城に着手するの後の形勢地理を熟視し、徒らに力攻すれば兵を損すること多きが故に、寧ろ河流と時

季とを利用して、水を灌ぐの有利なるを悟り、意を長圍に決し、まづ四近の村落を焼き、五月七日（天正十年）陣を蛙ヶ鼻に移し、巨堤を築きて、足守川を堰ぎ、水を城に灌ぐ、於是、新堤より山麓に至る、面積約百八十八町歩の地、渺茫たる大湖沼に變じ、梅雨またこれを助けて水量を増し、六月二日に至りては、城の水に浸されざるは僅かに數尺に過ぎざるに至れる。かくの如くにして、長隄既に成るや、隄上に柵を植ゑ、隄外に廠舎を造り、數町を距る毎に哨所を置き、晝は旗箆を列ね、夜は篝火を多くし、巡邏守備、頃刻も怠ることなく、以て城兵の夜襲と脱出とを防ぐ、既にして急報の毛利氏に達するや、元春、隆景の二將、大に三萬有餘の兵を卒して、五月二十一日岩崎山、日間山に到着し、諸隊を別ちて、天神山、寺山、服部山に屯せしめ、輝元もまた本軍を卒の、吉田より猿掛山に到り、一部隊を幸山城に置く、秀吉即ち兵一萬を分ちて之に備ふ。兩軍の先頭相距る事數町に過ぎずと雖、此の間足守川の支流たる長良川の流ありて水勢小ならず、故を以て兩軍相持して戦はず。城兵頗る望を失ふ。

此の時に當り、毛利氏は、其の兵力の殆んど全部を擧げて來援したりと雖、天候及び地理に制せられて、高松城の急を援ふ能はざる而已ならず、信長、信忠父子の親征又近きにあるを探知し、遂に（一）備中、備後、美作、因幡、伯耆を織田氏に割讓する事、（二）高松城將清水宗治の生命を保全する事の二條件を提出し、安國寺惠瓊を使者として黒田孝高の陣に遣はし、秀吉に和議を求めたれども、秀吉は斷然之を拒斥したり。惠瓊これを憂ひ、私に兩軍の間に奔走周旋し、また自ら城中に入りて、宗治に説くに義を以てし、宗治が一死籠城士卒の生命を贖はんとするの決心あるを看做し、狀を秀吉に告げて和議の締結を懇請せり。會々本能寺の變報、六月三日の夜半を以て秀吉の陣中に達す。秀吉大に驚き、直ちに其の素志を翻し、前日提議の講和を諾し、割讓地の幾分を減じて、山陰道は伯耆の八橋川、山陽道は備中の河邊川を境とし、以て宗治の死に代ゆることとなし、四日宗治自盡し、尋て相互の誓約を交換し、和議始めて成る。明治二年柳北紀行曰、時雨月二十九日、庭瀬より田野に出づ、こゝは往時豊臣太閤三

萬の兵もて、毛利輝元が十三萬の兵と戦ひたる古蹟なり、左のかたに高き山あり、庇山といふ、輝元及び吉川元春小早川隆景の陣せる所なり、此邊り今に箭鏃鋒刃を田畝よりほり出すも多しとぞ、川の小西などいふ地をうち過て、高松に至る、こゝは花房氏の采邑なり。この田間に小高き山あり、こは高松の城墟にて、毛利の家臣清水長左衛門、嘗てこゝに據り、豊閣の水攻にせし城なり、この辰巳には山あり、蛙が鼻と云ふ、すなはち豊閣の本營を据ゑし所にて、かの庇山毛利の本營と、遙に相對す。廣瀬旭莊の高松藝將清水某自殺所、天命將歸猿面郎、敢辭一劔伏秋霜、穎川水滿援兵絶、淮壇堰堅敵勢強、竈底産蛙思昔日、墳前下馬吊斜陽、野流依舊環殘壘、遺恨千年孰短長。

高松稻荷 高松村大字稻荷にありて、妙教寺と稱す。山陽線庭瀨驛よりは北二里二十五町なり。寺は、慶長六年、僧日圓の開基に係る。寺域は龍王山(俗に稻荷山と稱す)の中腹に位し、全山松樹蒼鬱とし、巔きに登りて、北を望めば、因伯の諸山煙霞

杳靄の間に聳え、西南一面遙かに檀ノ浦、志度ノ浦を眺め、海面一碧鏡函を開くが如し。境内には本堂、客殿、庫裡、經堂、鐘樓、二王門あり。別に鎮守堂及び拜殿ありて、叱枳尼天を安置し、俗に之を稻荷と稱す。天平勝寶四年、孝謙天皇不豫醫藥効を奏せず、報恩大師に勅して加持せしむ。大師乃ち叱枳尼天を念せしに天皇の疾立どころに癒ゆ。後、又、桓武天皇の御惱平癒を祈りて靈驗ありしかば、大師勅を奉じ此地に堂宇を創造して之を祭る。天正の亂に際し、堂宇悉く烏有に歸せしを、日圓上人再興して法華の道場となす。これその縁起の大略なり。毎歲、陰曆二月の初午及び毎月廿五日の縁日には、參詣人遠近より麁集して、その雜沓名狀すべからず。また、縣立農學校あり。柳北紀行曰、「高松の稻荷にいたり見るに、祠は莊麗にして備中に有名なるのみならず、近國の舟人漁夫までも皆來り詣で、士女陸續として盛んなり、後ろに石山あり、峨々として、松柏繁茂す、これを登る八町許り、巨石屏立せり、上に石碣あり、最上位稻荷大明神と刻す、この祠を守りし僧日圓が書なり、別に祠宇を建てず、

天然の石面に彫刻したる杯奇といふべし、山頂を下る數十歩、古井あり、水清くして飲むべし、傍に野人夫婦火を焚き居たり、この地に勝景ありやと問ふに、龍王山近きにありと答ふ、その老嫗をやとひて路しるべとし、左の山路よりすゝむ、麋鹿の過る路ばかりなり、青松巨石の外雜樹とはなし、行く一里許り、峰巒を越て一高山あり、巨松數樹矗立せり、石を攀て登る、これ龍王山なり、妹尾よりはるかに見ゆる山にして、備中の一名區たり、さきに過ぎし稻荷山ははるかに下に見ゆ、この山頂に石祠あり、八大龍王の祠にして、側に荒田喜權現と書せし石碣あり、何の神たるを知らず、眺觀千里連山遠海蒼茫として、間に田圃湖水を點綴す、風景絶奇、足守（木下侯の城地）の人家は臥蠶の如く目睫に見ゆ、山頂に彷徨して去る能はず、龍王山歌を作る、「龍王山高烟靄茫、我立其巔左右望、四面峯樹如魚背、圍繞有似朝龍王、巨石是鱗勢欲動、老松爲鬣其色蒼、龍王何時出溟渤、來栖此山幾星霜、君不聞前世界潰烈日、崑崙陷而江海翔、人類無遺况魚鼈、靈物有靈獨潛藏、我視山質皆砂礫、老巖含潮氣淒涼、

吁嗟山高處便淵深處、宜哉龍王長作郷、山を下り稻荷山の上に出るに、丈餘の石あるを見る、其石平かにして數人を坐せしむべし、土人呼で八疊巖といふ、この邊は松菌を多く産す、年々土人酒肴を携へて來り遊ぶもの少なからず、蕨もまた多く生ず、實に一勝地なり、山を下りて稻荷祠前の花屋と云ふ酒肆に午飯す、酒殺また鮮美、樓前に竹林あり、翠色拭ふが如し、此地の女兒頭上の簪釵多く梳を垂る、櫛は龍甲にて珊瑚を點綴す、形珍らかなり、歸路板倉を過ぎ宮内にいたる、この路に普賢院といふ寺あり、此に妹尾太郎兼安が墳堂を存す、兼安平家に事へ、此地に城堡を築く、其戰死するもこの板倉川にてなり、馬より下りて吉備津の宮に詣す。』

高松地藏 高松村大字原古方の蓮福寺にあり、毎歲舊十一月十五日より向ふ二週日これを開扉し、地藏市を開く、甚だ盛なり。

足守町 足守停車場の北、足守川の溪谷にあり。もと木下氏一萬五千石の治所にして、今、人口三千三百餘を有す。町の北に大井村あり、高梁街道より岐れし縣道はこの

地まで通じ、更にその北に福谷鑛泉あり、町は岡山市を距る四里二十町、山陽線庭瀬驛を距る三里十九町といふ。

葦守宮趾 足守町にあり。應神天皇山陽道御巡幸の折の行在所といふ。

鬼の釜 新山の山中にありて、地を阿曾村大字黒尾といふ。釜は直經六尺餘、周圍凡

そ二丈の巨釜にして、これに吉備津彦命の温羅(百濟の王子と傳ふ)征討の事を談す。

また、温羅の居守せしといふ鬼之城の古墟あり。

足守より鐵道は、西稻南を指し、總社驛を経て、終端驛湛井に至る。

國分寺 三須村大字上林にありて、都窪郡の管内とす。即ち山陽國道を北に入るこ

と數町の所にあり。寺は、天平年間、僧行基の勅を奉じて創立せる全國々分寺の二に

して、貞治中僧蟾蚌これを重興す。寺境は、平坦にして、老樹鬱茂し。諸堂その間に

散在す。また、三重塔あり。寶物としては、聖武帝宸筆の經偈、弘法大師筆五大尊像、

智證大師筆虚空藏畫像等を收藏す。近傍の名勝としては、日差山、福山城址、法華尼

寺(光明皇后御願)址、王塚などあり。且つ、同村の大字赤瀨は畫像雪舟の出生地なりと聞く。

總社町 今、吉備郡役所の所在地にして、高梁街道の街に當り、人口約三千を有す

岡山を距ること五里十四町なり。

總社 總社町にあり。縣社にして、大化年間の勸請、元弘中足利氏の重興といふ。

實に千餘年前の古祠たり。

國府址 總社明神の地を以て國府の遺跡となす。古書に謂ゆる、備中國府在賀夜郡

行程上九日下五日海路十二日上中國管九郡とあるもの即ちこれなり。

寶福寺 湛井停車場の北にありて、淺尾村大字井尻野に屬す。寺は、臨濟禪家の名

刹にして、貞永中僧鈍庵の創立、二世王溪に至りて、法燈尤も熾なり。更に、天正年

間却火の犯すところとなりて、久しく衰退せしが、徳川氏に至りて、寺田百石を附與

せられ、やゝ舊觀に復す。畫僧雪舟は嘗てこの寺の沙彌たりしことありといふ。堂宇



十餘宇、建築壯大、また觀るべし。

豪溪

池田村大字榎谷にあり。岡山市を

距ること凡七里半といふ。同村大字宍粟よ

り高梁街道に岐れて右折し、榎谷川の右岸

に沿ひ、北行すること一里半にして、その

前に出づ。溪は榎谷川の流に枕み、巉巖

數十頭、峯然として雲中に屏立し、矮樹稚

松巖面に點綴茂生す。深邃尤も愛すべく、

推して國中第一の奇勝となすべし。また、

前面なる一大巖石の中央に天柱の二大字を

刻す。備前の人登々庵嘗て此地に遊び、其

景の絶佳なるを愛するの餘り、自ら此の二

大字を書して岩面に鏤刻したりと。其岩は蘚苔を以て蔽はれ、近づかざれば讀む能は  
ずと雖も、共に併せて好事の一奇觀と爲すべし。最近某氏の紀文に曰、「湛井驛につき  
ぬ、是より俚は川に沿うて馳す、川には澄みたる水の靜かに流れて、網舟ゆるく上り來  
る、隧道の如き石門を過ぎて程なく、道は右手の細きへ曲れり、左右の山には、所々  
古風なる岩の聳えて、田圃の間にも大なる岩の突立てるあり。水の枯れくし淺き小  
川にも種々の形したる石の轉ばりつ、池田、榎谷などいふ村の名をも、余は農家の表  
札にて知りぬ、余の外には、遊覽者らしきものとは一人もなく、里の女はもの珍ら  
しげに余が俚を見送りぬ、山と山とは次第に迫りて、風はますます薄寒く、車上の余  
はしかと外套の袖を合せぬ、げに冬枯の山と風雨に錆びたる岩とは、余が心を凍らせ  
んばかりなりき、川上に横はれる岩の上には所々氷の光り閃めきぬ、かの畫聖雪舟  
はこのあたりの自然よりいみじき感化を受けしと聞けど、この温味なき寂しき自然  
は、げにも彼の筆致に似かよへるものかな、道漸く狭まるにつれ、左右の山は皆な岩

となりぬ、俵を下りて、俵夫とつれ立ち行けば、小高き所には小家ありて、後には巨岩の押被ふあり、石段を上れば、瘦せし老婆の一人衣縫ひつゝ、繪葉書を賣れるあり、日はすでにくれかゝりぬ、急ぎて其所を下り、一町も行けば、既に行手には、天柱と彫付けし巨岩ありて、その下方には遊覧者の名の多く書き散らしあり、天柱と相並んでは更に嶮岩の聳ゆるあり、前後左右眼にふるゝものは皆な奇巖怪石ならぬはなし、更に行けば、見返り橋といへる小さき土橋あり、凡そ十町ばかり辿りしも、岩の間は抜け得ざりき。』

栗粟より、高梁街道は高梁川の右岸に沿ひて西行し、高松村より凡そ五里にして、美袋の一邑を得。この間街

道の南、川の彼岸なる泰村には式内石疊神社、正木神社などあり、就れも石を神體とせるものなりといふ。

美袋村 今、日美村の大字にして高梁街道の一驛邑とす。玉島港より箭田(山陽國道に當る)を経て來れる街道は、この地に於て高梁街道と相會せり。

高梁町 美袋の北三里とす。町は高梁川に枕み、南北に狭長なる市街を連ぬ。人口

六千五百餘、上房郡役所、高梁警察署、同區裁判所、同監獄支署、縣立高梁中學校等の所在地なり。岡山市までの里程は十一里二十七町にして、現時湛井を終點とせる中國鐵道はこの地まで延長せんと欲するものなり。また、國の南海岸玉島港までは、里程約九里、道路比較的良好なり。且、同玉島港附近の河口まで高梁川に舟便あり、高梁舟を上下して百貨の輸送に便す。寔に備中國中部の商業中心區とも稱すべく、北部地方の物産は、高梁川の舟便によりて、皆な一度この地に集り、更に玉島港へ輸送して各地に散するなり。猶、町内の銀行會社には高梁製糸會社、同五六合資會社、同爲換合資會社、備作實合資會社、煙草合名會社、高梁實藍合資會社、同五福會社、中國麥稈株式會社等あり。物産には、烟草、麥稈眞田、紙等をその主なるものとす。猶、この地は、もと松山と稱し、板倉氏五萬石の城邑にして、今、町の北字臥牛山にその城址を殘せり。

松山城址 高梁市街の北臥牛山にありて、一に城山と稱す。往昔元弘の頃高梁英光



此地方の守護となりて始めてこの松山に治す。後、足利尊氏山陽道を徇ふるに方り、高ノ師秀を以て守護たらしむ。正平年間、秋庭重明守護代となり、天文年間には莊爲資當城に主として小田、下道、上房の三郡を領す。永祿年間、三村家親毛利氏の援を乞ひ、高資を殺して松山城に據り、其子元親叛きて毛利氏に滅さる。羽柴秀吉の西伐するや、宇喜多秀家に此地を與へ、關ヶ原の役後、徳川氏小早川秀秋を松山に封す。元和の初め、池田長幸此地に封せられ、後、板倉勝澄の治所となり、爾後相繼ぎて明治維新に至る。今は老樹の森々たる間に、其外壁を存するのみ。

●頼久寺 高梁町にあり。禪宗臨濟派にして、當初は安國寺と稱し、延元中足利尊氏の創立といふ。後、永正年間城主上頼久これを再修し、即ち頼久寺と改む。更に天保中、焼失し、桂巖和尚これを重興すといふ。

●安養寺 高梁町の東にあり。城主勝職の建立にして、曹洞禪家に屬す。  
●松山村佛刹 巨福寺、薬師院、松連寺等あり。中、薬師院は、弘仁中僧空海の草

創と稱し、松連寺は眞言宗にして、慶安年間水谷勝隆の建立と稱す。猶、松山村には清和天皇朝創立と傳ふる八幡祠あり。

●高倉山 松山村にあり。一に下山と稱し、山上、眺望頗る佳なり。

高梁附近を西に出でし縣道は、落合を経て成羽町に至り、猶、北行二里半ばかりにして、吹屋町に至る。

●山中幸盛墓 落合村大字阿部にあり。高梁川の沿岸とす。幸盛は、天正年間、尼子勝久と共に上月城に據りて、毛利氏に抗し、羽柴秀吉の來援を待つ。秀吉到らず。即ち、勝久は自盡し、幸盛は伴り降りて、毛利元春を刺さんと欲し、果さず。藝州へ護送の途中、この地の渡頭に於て殺されしものなり。現今、この地に碑を建て、その英魂を弔す。

●深耕寺 落合村大字原田にあり。寛弘中の創建にして、一に花山天皇の開山と傳ふ。●禪宗を奉ぜり。

●成羽町 高梁町の西方約二里とす。成羽川に據り、川上郡中第一の名邑なり。人口

約二千五百、成羽川に水運の便多くして、吹屋の山中より採掘する銅、其他の鑛産物は皆な此地を經、高梁川により玉島港に輸送するを例とせり。名産には、醬油、酒、烟草等あり。また、成羽の西十數町に一奇景あり、成羽川の水俄に低下し、水勢奔馳、鳴る音雷の如し、里人呼んで鏡ヶ瀬と稱す、尤も奇觀なり。又同村字羽山に穴小屋と稱する奇洞あり、到る處皆洞窟にして、其の最も高濶なるを槍立場と稱す。竇上小孔あり、日光僅かにこれより洩る、また奇觀なり。笠岡より成羽に至る里程約九里、岡山より同十二里二十六町といふ。

吹屋町 成羽町の北二里半にあり。川上郡の北隅山地に居りて、一部落を成し、銅鑛を以てその名著はる。

吹屋銅山 吹屋銅山の開坑は大同二年にして、實に星霜二千餘年を経たり。鑛坑は二、三は吹屋の東方大澤にあり。一は東北吉岡にありて、吉岡鑛山と呼ぶ。實に岡山縣下第一の富坑にして、採掘面積百二萬三十餘坪を有し、一ヶ年間の製煉高凡そ十

萬貫に及ぶといふ。坑夫數百人、その日用需要品は、多くそれを東南十七里餘にある岡山市に仰げり。且、その採鑛精練の經營は凡て新式に則り、動力としては石油發動機を備へ、加ふるに濾過池、沈澱池を設置して、鑛毒の蔓延を防げり。而して、その鑛石はこれを大阪製精練所に送るか、若しくは同地の商人に販賣すといふ。現時、三菱合資會社の稼行に屬せり。

高梁町の北より國の東邊を北に走れる道路は、水田村に一路を派せし他、刑部、上刑部の諸村を經て、坂地峠より國界を越え、以て美作の山陰國道に相會せり。その途上、中津井村は碩儒室鳩巢の産地として知らる。

また、刑部村の小坂部はこの山路中の一名邑にして、岡山を距る十二里二十五町、新見町を距る約四里、美作國高田を距る約三里半とす。

鐘乳竇 上水田村字井殿にありて、高梁町より北方五里を隔つ。竇は渾て石灰石より成り、洞口高さ三丈、巾二丈、奥に入る一町にして、穴漸く窄し。尙ほ匍匐して天然の隧道を過ぐれば、穴再び濶く、高さ丈餘に及ぶも、未だ其盡る處を知らず。里人

いふ、草を此處の流谷に投ずれば、半里を隔てたる水田村、鵜殿の洞に流出すと。竇の内部は盡く鐘乳を以て被はれ、觀覽者が携ふる所の松明に映じて白く光を生じ、頗る美觀なり。竇内また其形に由りて名あり、釜の壇、五重ノ塔、天ノ岩戸、鐘石、鬼ノ豆石、七畔田、天柱等は其重なるものなり。志賀氏風景論曰、里人此洞を神視す、上房郡高梁町より二里二十八町巨瀬村に到り、更に二里三十二町阿賀郡皆部村に到り更に一里二十町水田村に達す、村に此洞在り、洞口甚だ大、然れども中に入るや、暫くにして行き當り、石壁峭立す、壁に小口あり、燭を秉り僣僂して此口を入れば、第一房あり、方凡四五十間、石鐘乳、底鐘森列すること萬株、石灰岩の洞壁に沈澱するもの形狀多變、「御釜ノ臺」、「魚ノ棚」等の名稱を附す、復た行き當り石壁あり、壁上横に小穴あり、匍匐して入れば、第二房あり、房内は高低の二段をなす、更に前む、懸崖斗絶す、崖を下れば湍水あり、小飛瀑をなし轟然聲あり、湍を渡れば行き當りに石壁あり、壁上小穴あり、穴より中に入れば、第三房あり、廣さ五六疊許、前二房に

比較せば殊に小、行き當りに石壁あり、壁上小穴あり、此より内未だ測りたる者なし南谿遊記曰、備中國、中田領の山中に俗にかねちの穴と稱する洞穴あり、かねちとは、鐘乳といふ事なり、其の洞穴の中に、鐘乳石の多くあれば、名付けしなり、松山城下よりは、七八里をへだてたり、其の穴、入口大にして、しばらく入れば行き當りて、石壁あり、その石壁に、小き穴あり、其の小き穴をくゞり入れば、甚、大に廣きところに至る、此の所は、少しの日光もなく、暗黒はなはだしき所なり、案内の者松明を多くともし入ることなり、其の所の廣さ凡四五十間四方もあるべし、此の所に上より鐘乳石夥しく飛び下り居る、又、御釜の石臺魚の棚などいふ所あり、皆自然の石にて、其の形をなせり、段々、奥の方に入り行くに、又、行き當りに石壁あり、其の石壁の上に、横さまに小穴あり、やうく匍匐して、くゞり入る程の小穴なり、其の穴をやうくにしてぬけ出づれば、又、廣き所に至る、此の所は二段になりて、高き所あり、又、低き所あり、遙かに瀧の音きこゆ、松明をふり立てて、だんぐりに進み

ゆくに、切岸の如き懸岸あり、其のかけをやうくにしてつたひ下れば、瀧の流の川ありて、水、足首をひたすばかりなり、其の川を渡り越えて、猶、すゝみゆけば、又ゆき當りて石壁あり、其の壁上に、又小穴あり、それをもくぐり抜ければ、又、廣き所あり、此の所は、初の二ヶ所よりは、大に狭くして、纔かに五六疊じきばかりと見ゆ、又、此の向の石壁に小穴あり、これより奥へ、つひに恐れて入りたる者無し、其の奥はいかなる所なるか、いまだ知る人なし、いとめづらしき洞穴なり。

高梁町より伯耆に到る街道は、更に北西方高梁川に沿ひて一里半、川面村を經、阿哲郡に入りて、草間村を得、この途中、街道の東中井村西方は山田方谷の郷里として知らる。

不動瀧 草間村にあり。一に衣掛瀧または棚ヶ瀧瀧と稱す。まづ、草間村の入口より右折し、小流に沼ひて登ること二十四五町にして瀑に達す。高さ十五丈、幅二十五間、水聲輕踏として飛沫雪の如し、尤も幽閑の境とす。

羅生門 草間村大字土橋にあり。石灰岩の洞貫したる二大石門十餘間を隔て、山間

に直立す。而もその上に樹木を生じ、高さ各三四十尺、尤も奇觀なり。而して溪流は相集りて、鐘乳洞内にあり。末流狭りて、深潭を成す。猶、この地の字湯川は玄賓和尚隱退の地として夙に名を知らる。

新見町 草間村の北三里許りにあり。高梁川の東岸に據り、人口四千許り、往時は關氏一萬八千石の城邑にして、今も阿哲郡役所以下の公衙あり。名産としては、「つくばね」と稱する風味ある漬物を産す。また、高梁川に香魚の産あり。同川は、この町の河岸より河口に達するまで凡そ二十里の間、舟運の便あり。されど、高梁町に至る間は、蟻ヶ瀬、蜂ヶ瀬などの急灘ありて、舟をやるにや、危嶮なりといふ。岡山市を距ること二里二十八町、笠岡町を距ること二十二里十八町、備後の東城を距ること六里二十七町といふ。

黒髮山 新見町の東方にあり。山中に觀音堂ありといふ。萬葉集「ぬばたまのくろかみ山をあさこえて山下つゆにぬれにけるかも」。

●●●  
萬歲井 新見町の南方萬歲村大字矢戸にあり。傳へていふ、この井泉は、昔、宇多天皇この地に巡幸し給ひし時命名あらせられしものなりと。古歌に曰く、君の代にもろ人のくむ萬代の水はつきせぬ岩井なりけり。

新見より、街道は井、釜の村邑を経て國界を臨ゆ。新見より井に至る一里、井より釜に至る約二里といふ。續、井村の北千屋村の花見は高梁川の水源地なりといふ。其附近各所に鐵坑散在せり。

### 備後國

備後國は本地方の中部に位し、備中を東にし、出雲伯耆を北にし、西は安藝と接し南は全く瀬戸内海に臨む。東西十八里、南北廿八里、面積二百二十方里を有し、一市九郡より成る。一市は尾ノ道市にして、九郡は御調、世羅、深安、沼隈、蘆品、神石、甲奴、双三、比婆即ち是なり。廣島縣の管轄に屬す。地勢は中國山脈その北境を略々東西に走り、その餘波國內に蜿蜒せるを以て、山嶺多く起伏し、高臺狀を爲せるの地また尠なからず。南するに従ひ、次第に陵夷し、遂に瀬戸内海に終ること、備中に同じ。中國山脈は千二百米内外の高距を保ち、山陰山陽兩道の分水嶺をなす。國の西北隅に、備後、石見、出雲三國に跨れる三國山(八五四米)あり。これより女龜山(八九三米)を経て東北に延び、琴引山(一〇七〇米)天萬木山(一二二八米)七日連山(一二七三米)毛無山(一三七二米)猿政山(一四一七米)等起し、更に東方に連互して、衣木山(一

○九五米) 道後山(二四〇〇米)を経て、備後、備中、伯耆の境なる三國山(二二四七迷)に至る。この中國山脈主軸以南、即ち門田川以北の地、及び東城川の上流地方には、前者に猿城山(五二〇米)冠山(八〇一米)船山(九八八米)黒石山(一〇六一米)美古登山(一三六四米)毛無山(一三三六米)等あり。後者には尺田山(一一〇七米)猫山(一一六六米)太平山(一一二〇米)多飯が連山(一〇九六米)等あり。西城町附近には九百乃至七百米の峰巒相接して重疊す。門田川の南方、即ち國の中部に於て、双三、世羅の二郡は最もよく高臺地たる地勢を備へ、甲奴、神石、蘆品等の三郡は概して高臺地狀を爲せども、所々に聳起せる山岳多し。西方の國境、三次川の右岸に小土山(七六〇米)大土山(七九五米)天神岳(七八九米)等あり。世羅郡甲山の附近に、新山(六八五米)屹立山(七一一米)等あり。甲奴郡には、御神山(九〇六米)嶽山(八五〇米)あり。神石郡には、日野山(七六九米)八國峰(七一二米)等あり。これより次第に南し、蘆田川南方に一隆起帶を起し、佛通寺山(四九六米)龍土山(五六九米)等を聳立せ

しめ、遂に瀬戸内海に至る。かくのごとく峰巒起伏するを以て、國中平野少く、唯海岸地方及び河岸に少許の平地を開けるのみ。されど國中處々に小盆地を開き、三次町近傍、庄原近傍、甲山附近、上下附近、皆な百六十米乃至二百六十米の高距を保ち、山間に稀なる沃田を開けり。府中町附近の平野は山地の間にある一窪地帯にして、備中小田川沿岸の窪地帯と相連る。福山町附近の平野は、即ち蘆田川の三角洲にして、國中最も廣き平野なれども、その面積は僅かに四十二方村にすぎず。河川は國の北部西部に江川及び江川に屬する諸川あり。多くは西流又西南流す。櫃田川、門田川、三次川これなり。東北部及び東部にある諸水は東城川山野川のこれに合し、備中に入り高梁川の支流をなす。蘆田川は國の南部の諸水を集めて、備後灘に朝宗す。

沿岸 古へ國府を蘆田郡に置く。鎌府の初め土肥實平梶原景時を守護とす。建武中尊氏の叛して西に奔るや、朝廷淺山條就を以て守護とし、神邊に治す。既にして尊氏東上し、國の豪族宮、三吉の諸氏悉くこれに應ず。正平四年尊氏その庶子直冬をして

頼に居らしめ、中國探題として國務を掌りしが、後、吉野に歸順して京師に入り、兵  
 敗れて石見に奔る。同十七年山名時氏當國を略定し、終に足利義詮に降る。明徳の初  
 め、子氏清謀叛して誅せられ、備中の守護細川滿之、その子基之相繼で守護を兼ね。  
 嘉吉年中時氏の曾孫持豊赤松滿祐を誅せる功を以て守護に補し、次子是豊を遣て神邊  
 に治す。文明年間宗家政豊の次子俊豊入つて守護を襲ぎ、傳へて山名氏政に至る。天  
 文七年大内義隆に滅さる。時に尼子經久また北畠を蠶食す。安藝の毛利元就大内氏に  
 附し、宮、三吉、杉原諸氏を降す。天文の末大内氏亡び、全國毛利氏に屬し、關ヶ原  
 の役畢り、徳川氏毛利氏の地を削り、當國を擧げて福島正則に賜ふ。元和の初め、罪  
 ありてその封を收められ、八郡を割きて淺野長晟に賜ひ、又水野勝成を福山に封す。  
 寛永九年長晟その子長治に分封す。また元祿年中水野勝岑早夭して封陣せられ、松平  
 忠雅代りて封を受く。寶永年中これを桑名に徙して阿部正邦を封す。王政革新福山縣  
 と爲し、尋で深津縣と改稱し、またこれを廢して、小田、廣島兩縣より分治し、明治

九年悉く廣島縣の管治に屬す。

**交通** 官設山陽線は備中全國より來り、大門の一驛を経て、福山町に達し、廣田川  
 を渡り、松永、尾の道、糸崎、三原を経て、安藝國に入る。尾の道は瀬戸内海航路の  
 主要港を成せり。國中丘壘の間を経て山陰地方に出づる道路は、福山より加茂、油木  
 を經て東城町に至るものと、府中より上下、庄原を経て西城町に至るものに、尾の道  
 より甲山吉舎を経て三次町に至るものとの三路あり。三次街道は車を通ず。  
**産業** 米は福山平地、府中平地をまた主産地となす。食用農産物には大豆小豆甘藷  
 等あり。特用農産物には備後表の材料たる蘭を産す。沼隈、御調、双三の三郡を主産  
 地と爲す。又薄荷を産す。双三郡には麻の産出あり。比婆郡には牧牛業盛なり。双三  
 神石二郡またこれに次ぐ。林業は最も盛にして、杉、樅、櫟等の林相美なり。山柳、檜  
 杣等より經木眞田の原料を製す。水産物には、鯛、鱈、鰯、鯖、鱈、鰯、鰯、鰯、鰯等あり  
 淡水魚には三次川に鮎を産す。沿海の地、製鹽を以て聞えたるものまた尠なからず。





町に到る府中街道及び府中より油木、東城、西城を経て伯州に達する道路竝に上下庄原を過りて雲州に入る道路あり。孰れも縣道にして、その里程は、横尾へ一里十町、新市へ四里、油木へ十里、東城へ十五里、庄原へ十五里といふ。また、神邊街道とは町内字吉津町より東北方神邊に通ずるものにして、國道は備中高屋より來りて神邊を通じ、更に西方に來りて蘆田川を渡れり。この他、町より蘆田川を渡りて南を指す一路は、約三里半にして鞆津へ達す（近時鞆津まで輕便鐵道布設の計畫あり）。鐵道は岡山より三十六哩、廣島へ六十四哩を隔つ。

福山城址 驛北にあり。元和五年、水野日向守勝成の創營にして、維新前は阿部氏十萬石の居城たりき。今、廢殘の餘、外廓は多く毀ちて田圃となり、僅かに五層の天主閣と二三の城櫓の存するを見る。その構造は必ずしも大ならざれども、また頗る堅牢、用材の大部分はこれを伏見城より移せしものと傳ふ。近世に至り、その本丸を開ひて遊園となす。中に阿部神社あり。文化中阿部正精の創始に係り、その祖大比古命

を祀る。境内、老樹多く、頗る幽趣あり。

賢忠寺 福山町字東町にあり。曹洞禪家、元和中水野勝成の開基にして、その本尊像は小松内府重盛の念持佛なりしと稱す。寺域に水野氏の廟屋あり。

足利義昭館址 福山町の東方十數町にあり。菰山と呼び古松林をなす。實に、天正年間、將軍義昭の京師を逃れてより、たまく毛利輝元の請待に遇ひ、知行五千石を附せられて幽居せし古跡なり。

福山町を東北に出づれば、約一里半にして、山陽國道の一驛次神邊村に達す。此所に名高き山陽の詩人菅太仲の靈址あり。西山拙齋の赴神邊驛途上に曰「三十里程行且歌、春鷗波去入煙蘿、荒村春暈竹田外、幾所桃花夕照多」。

神邊村 山陽國道の一驛次なれど、維新後、鐵道開通してより、やゝ衰頽せり。驛は、舊と、建武年間備後の守護淺山就條の封地にして、今、驛東に發ゆる黄葉山の半腹にその古城の跡を存せり。著名なる漢詩人菅茶山は、實にこの地の産にして、茶山

の開きし私塾を黄葉夕陽村舎或は廉塾と呼ぶ、黄葉夕陽村舎の名稱は、蓋しその塾舎の黄葉山の山麓にありたればなり。旭莊の到神邊驛に曰く「青松挾路暮風清、野風蒼茫已不明、庭實如山皆驛致、里胥登埃盡郊迎、一條空際塵埃氣、千炬星中人馬聲、側有書生荷行李、單身帶影渡長程」。山陽の寓廉塾に曰「紙上功名添足蛇、漫追老圃學桑麻、野橋分徑斜通市、村塾臨流別作家、讀授兒童遇生字、行沿籬落見狂花、笑吾故態終無已、時復談兵畫白沙」。山陽の過廉塾に曰「驛門右折路橫斜、亂柳疎篁舊隱家、鳧鴨不知人已逝、猶隨流水齊梅花」。拙齋の賦贈茶山に曰「川南川北探餘花、日夕逢迎醉紫霞、羨爾平生無俗累、交遊強半是僧家」また溪上晚歩に曰「日落茶山外、翠光隔水多、欲吟磯上月、其奈暮寒何」。

●●●● 國分寺 神邊の北御領にあり。即ち、天平年間聖武帝勅建の國分寺と稱ふ。

福山の西を流る、蘆田川は、上流を太田川といふ。源を世羅郡天神嶽に發し、御調、神谷、高屋の諸流を併せ、福山町の西南を過り、川口村に至りて海に朝す。下流、沿岸の地は概して平曠にして、沃野多く、數多

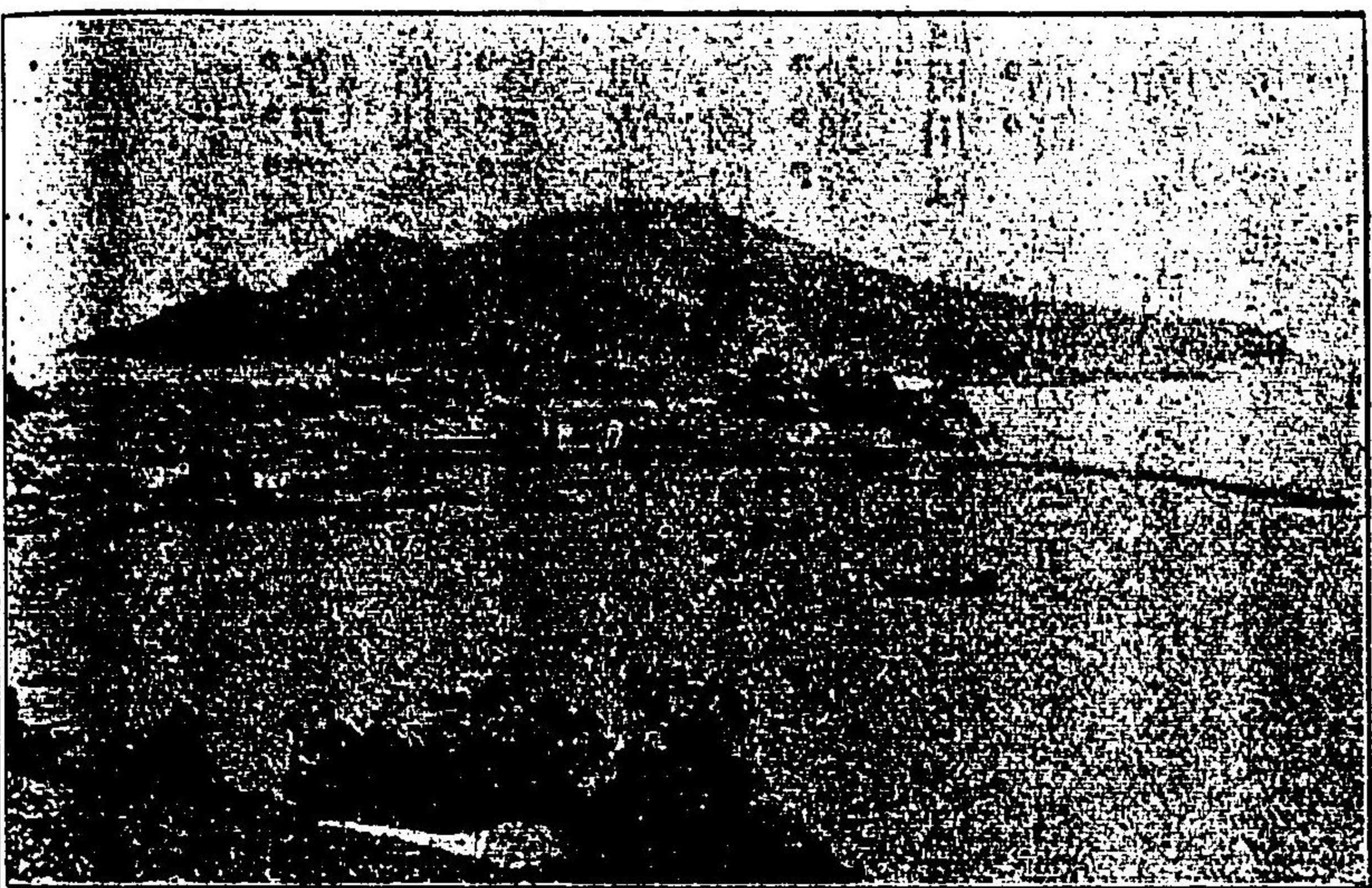
の三角洲を形成せり。未木集の歌に曰く「まれに來て飽かずわかれしあした川なみだぞ袖にみなと流るゝ」  
「たぢかへるあしたの濱の濱千鳥こひしき波にねをのみぞなく」。

●●●● 草戸稻荷 福山停車場の西南二十町、沼隈郡、草戸村にあり。三備地方及び四國等に信徒甚だ多しと聞く。

●●●● 草戸明王院 萩寺或は中道山圓光寺と稱す。眞言宗にして、大同中の草創、僧空海の建立と稱す。境内に五重塔あり、畫聖巨勢金岡母堂の建つるところと傳ふ。また推して國內有數の巨刹となすべし。

●●●● 妙顯寺 草戸村の南水呑村にあり。日蓮宗を奉じ、正平年中日像上人の開創と稱す。蘆田川は、水呑村の東北に於て海に朝し、その河口海中に葦島あり。

●●●● 鞆町 福山町の南三里半とす。沼隈半島の東南角に位し、古來瀬戸内海の要津として知らる。町、一名を鞆津とも稱し、舊名を渡守といふ。神功皇后征韓の歸途、糸崎よりこの地に渡り、鞆を納め給ひしより、爾後鞆津の名を得たりと稱す。また、この



地には往昔蕃客宿泊の驛館を置かれしともありといふ。足利氏に至りては、尊氏の西下にも東上にもこの地を過りしとあり。尋で足利直冬もこの地に在住せり。戦國に及んでは、將軍義昭、毛利輝元に倚らんとして此地に來りしを輝元之を公方に居らしむ。福島氏の時、其臣大崎玄蕃をして此に居らしめ、城を古城山に築きしが中途にしてこれを廢せり。地は後に丘陵を負ひ、前には仙酔、辨天、玉津、皇后の諸島横たはり、阜頭長く斗出して風波を防ぎ、船舶の碇繋に便にして、市街頗る殷賑なるのみならず、

最も勝景を以て著はる。即ち鞆の浦と呼ぶものこれにして、江山秀麗、展望頗る美にして、避暑の一適好地となす。猶、地は昔時帆船時代にありては、帆船常に林立、播州の室津に併びて、中國有数の要津に擧げられしも、港内の規模小にして汽船の出入に便ならざるが爲め、また舊日の盛を見ず。且、瀬戸内海通ひの汽船の、日々上下とも寄港するあるも、陸上の交通十分ならざるより、漸く衰頹の觀あるを免れず。然れども、此所より海上十町ばかりなる仙酔島の景趣は、古今渝るところなく、そらろに遊賞の客をして稱賞を禁する能はざらしむ。町の人口は約一萬ばかり、名産には保命酒、鱒魚等あり。里程、松永町を距る四里、廣島市を距る二十七里、尾道町を距る海路五里といふ。文化中吉田重房筑紫紀行曰「巳刻頃鞆津に至る、備後の福山の殿の領地にて、入口に船番所あり、此邊に勝れたる大湊にて、人家無慮千軒餘あり、本町といふには商家多くいと賑はし、鍛冶屋町といふは一丁の内鍛冶のみ居れり、又魚の店といふ町もあり、總て此浦には鮮魚殊に多くして、西東の端には漁者のみ住めり、名

物とするは世に備前焼といふ陶器、又は保命酒、壘表、七島莖、綿等にて、所々に賣家多く見ゆ、濱邊に續ける町中にかめしく華麗に構へたる屋敷のあるを、何ぞと問へば朝鮮の三使經過の時の、御馳走の館舎なりといふ、さて此所、彼所歩くに、女共二尺計の平桶に、魚物また青物を入れて呼はりつゝ、賣歩くにあへる、其風なりといふを珍しく見聞す、斯て山の手に祇園の御社あるに詣つ、前に石の華表あり、礎に登りて、隨身門といふを過れば、御社は檜皮葺にて南向に立せ給ふ、前に銅の猫犬向ひ居れり、舞臺いと麗し、石の手水鉢は自然石の、長さ一間半計なるを用ひたり、門前に小松寺といふ眞言宗の寺あり、寺内に内府重盛公の御石碑あり、同じ公の御位牌又記録の巻物等あり、百錢を以て開帳し拜見を許す、庭には重盛公手自植置給ひしといふ松あり、極めて老松にて、高さは僅三間計にして、枝どもは甚長く、圍りに延袤盡く垂下りて、末は地を摩れり、斯る珍しき松は、彼の公の御手自植給ひしならずとも、心なく見過すべしや、其れより町屋を過て濱邊の方に行けば、裏町とて青樓酒家の町あり、遊女家は二三軒、廊つきの粧奇麗にして、風體少し變りあれど、とりづくに美しくて並居たり、茶屋は十軒餘あり、家々の門口に婢出居て、旅客の袖を執つて引留め、強て立寄り遊宴せよとせちに勸む、袖を引切りぬとも離すまじく見ゆれば、詮方なく引入るゝに任せて入りて、腰うち掛け煙草など飲みて、心を緩めて、晝の間は心せわし用事をも終ひて、晩の程より來て宵の月をも賞し、緩やかに遊んなど賤し置て出ぬ、此家は饅頭屋喜助といひて、中にも勝れたるにて、座敷の風景もよしといへり、斯て町はづれの岸邊に、彼祇園の御旅所あり、其後に廻りて南に向ひて海上を眺望すれば、眼前には泉水島面白く浮みて見え、遙には伊勢の浦々、島々、烟靄の中に葦蒼たり、この頃は斯の如き絶景をしばしば見るなれども、いとあかす面白く覺えて、心もはれなくし、此所に芭蕉翁の塚あり、自然の青石にて、發句並に銘文を彫りたり。

安國寺 輛町にあり。曆應中、足利氏の構營と稱ふる古刹なり。寺に安置せる本尊佛像は、韓土將來のものと稱し、制作、頗る珍重すべし。

沼名前神社 鞆町大字後地に屬す。社に、神功皇后の遺趾を談じ、近世、これに祇園社を合祀して、國幣小社に班す。境域、山を負ひ、海に臨み、無數の群島を隔て、遙かに伊豫讃岐の翠巒を眺望するなど、山光水色ともに景致尤もすぐれたり。且、域内廣濶にして、樹木繁茂し、殿堂八九宇、孰れも宏麗なり。ことにその能舞臺は、舊と國主水野勝成の伏見桃山にありしものを、豊太閤より賜はりて此所に移せしものと稱し、甚だ名あり。

福禪寺 鞆津の海岸にあり。眞言宗にして、應和元年空也上人の創建と稱す。域内に本堂以下數字の殿堂あり。本堂には、海中より出現せりと唱ふる千手觀音像を安置す。境内の景勝に至りては、夙にその名高く、謂ゆる對潮樓に入りて眺望せんか、近く仙醉の一青螺を始めとして、島影散布、白帆隣接、而も讃豫の遠山は畫くが如く、眞に人をして快哉を叫ばしむるものあり。かの韓客南岡が匾額に題して日東第一勝と言へりしも、決して溢美の言にあらず。蓋、瀬戸内海中屈指の景勝たり。旭莊の晚登

仙醉寺に曰「小邱似鯨脊、突然起海濱、古寺枕其上、縹緲隱松筠、春雨霞外霽、夕陽海面均、暝色眇歸翼、沈光閃遊鱗、滅沒人馬影、空濛道路塵、清磬出孤嶠、片舫入遠津、晚風吹鄉思、獨遊易傷神、明日向何所、搔頭嘆羈身」。

仙醉島 鞆町と相對せる海上には、仙醉、辨天、玉津、皇后等の諸島あり。仙醉島は方十七町ばかりの樹島にして、町よりは海上僅かに十町許りを隔つるに過ぎず。島には辨財天の小祠を祀り、その風光の明媚たる、寔に鞆浦形勝の冠絶たり。郁文哉の詩に曰「醉仙縹緲小蓬萊、鞆浦風煙與海開、今古清雅無廢弛、總維偕樂行舟隈」。猶、この島の南に皇后と名くる小島ありて、神功皇后寄舟の古蹟を談す。

阿伏兔岬 鞆町より海濱に沿ひ西に迂回すること一里餘、千年村大字能登原に至れば、一岬角の海上に斗出するあり。阿伏兔岬といふ。岬は、前面田島の一青螺と相對して、謂ゆる口無瀬戸を作し、瀬戸内海航行の舟船は多く此所を過るを以て、船客は坐ながらにしてその勝景を望み得べく、また鞆津よりするも舟行を便なりとす。岬端



は海面より高さこと二十八米、岩石より成りて、斷崖削れるが如く、岩上に觀音堂を設く、故に一に觀音崎とも呼べり。吉田重房の筑紫紀行に曰、「鞆津より已刻過に漕ぎ出づ、海面廣遠にして南は伊豫國、北の方は平山波濤の如く濱邊には見事なる松ども茂り合て立續くは、鞆よりあぶとへ行く路の並木なり、佳景を玩びながらに我もいつしか景中の一物となりて、畫中の船とや人の見るらむ、街道の松の中に前觀音といふあるを過ぎ、飛島といふ小島をもあとに見なしてあぶとに至る、鞆より是まで一里、さて

登りて觀音堂に詣づ、此所は山の尾崎の海岸の上に堂を建て、南方海上に向けて觀音の像を安置し奉る、堂の下に海潮山、磐臺禪寺といふ寺あり、其庭より廊下の磴道を登りて堂には詣づるなり、廊の中程に鐘樓あり、堂の傍に常夜の燈籠あり、此觀音堂より見おろせば數尋の下に青々たる海潮足元に湧かへり、目も眩き身の骨も痒さばかり就なり云々と。盤臺寺は、禪宗臨濟派、曆應元年法燈國師の草創にして、後、毛利元之を再興す。前記の觀音堂は海面より高さこと九十二尺、廣さ六間四面にして、其他の堂宇は崖下の海濱にあり。鞍町の對潮樓(福禪寺)と相併びて國內景勝の尤とす。佩川の阿伏兔を詠せる詩に曰、「松櫻岩肩潮啣脚、上看纓緲之飛閣、定知呼騎有仙人、雲外驚回雙白鶴」玉山の月夜舟中望阿伏兔觀音閣に曰、「大悲高閣海之灣、磴道盤回易夕陰、經罷兔崖明月上、帆過牛渚碧流深、雲霞總染珊瑚色、爐氣偏饒菴菊林、爲是時々龍女至、諸天仙梵雜潮音」。

道路は、阿伏兔より半島の西岸をめぐりて松永町に至る。この間の名勝としては、

千年村大字常石に寶田院あり。山兩村に光照寺あり。福山志料に曰、千年藤の古跡は常石村にあり。平家物語に、御舟殿島より返り、備後國しきなの泊（口無泊）につかせ給ふ、此所は去ぬる應保の頃、一院御幸の時、國司藤爲成が造たりける御所の立けるを、入道相國御設にしつらはれたりしかども、上皇それへ御幸もならず云、岸に色ふかき藤の松の枝にさきかゝりけるを、上皇獻覽あり。

福山驛より、再び汽車に乗じて西すれば、頃刻にして松永驛に達すべし。國道は、赤阪（福山より二里）神村を経て今津に至り、その東より府中町に至る一路を派す、赤阪の水越より今津に至る西一里半許りとす。菅茶山の詩に曰「赤阪村邊片雨晴、白蛇峯畔斷雲明、樹間人語田秧稻、鴉背帆隨水繞城、草木自知興廢恨、風雲長載古今情、阿房銅雀皆塵土、倚杖青山一笑橫」。

松永町 人口四千、謂ゆる松永鹽の主産地として甚だ名あり。町に沼隈郡役所、松永警察署、同銀行、農商務省鹽業試験所等を置く。里程、福山へ三里、尾道へ二里半、府中へ四里、鞆町へ沼隈半島の西岸を傳ふて三里半とす。

承天寺杜鵑花 松永東町の承天寺にあり。停車場より五町とす。花時、福山、尾道方面より來觀の客多し。

薬師寺 松永停車場より八町にあり。寺境の眺望佳し。

潮崎神社 松永停車場より南方十町を隔つ。毎年秋季の祭禮には、煙花會を催し、頗る盛觀といふ。

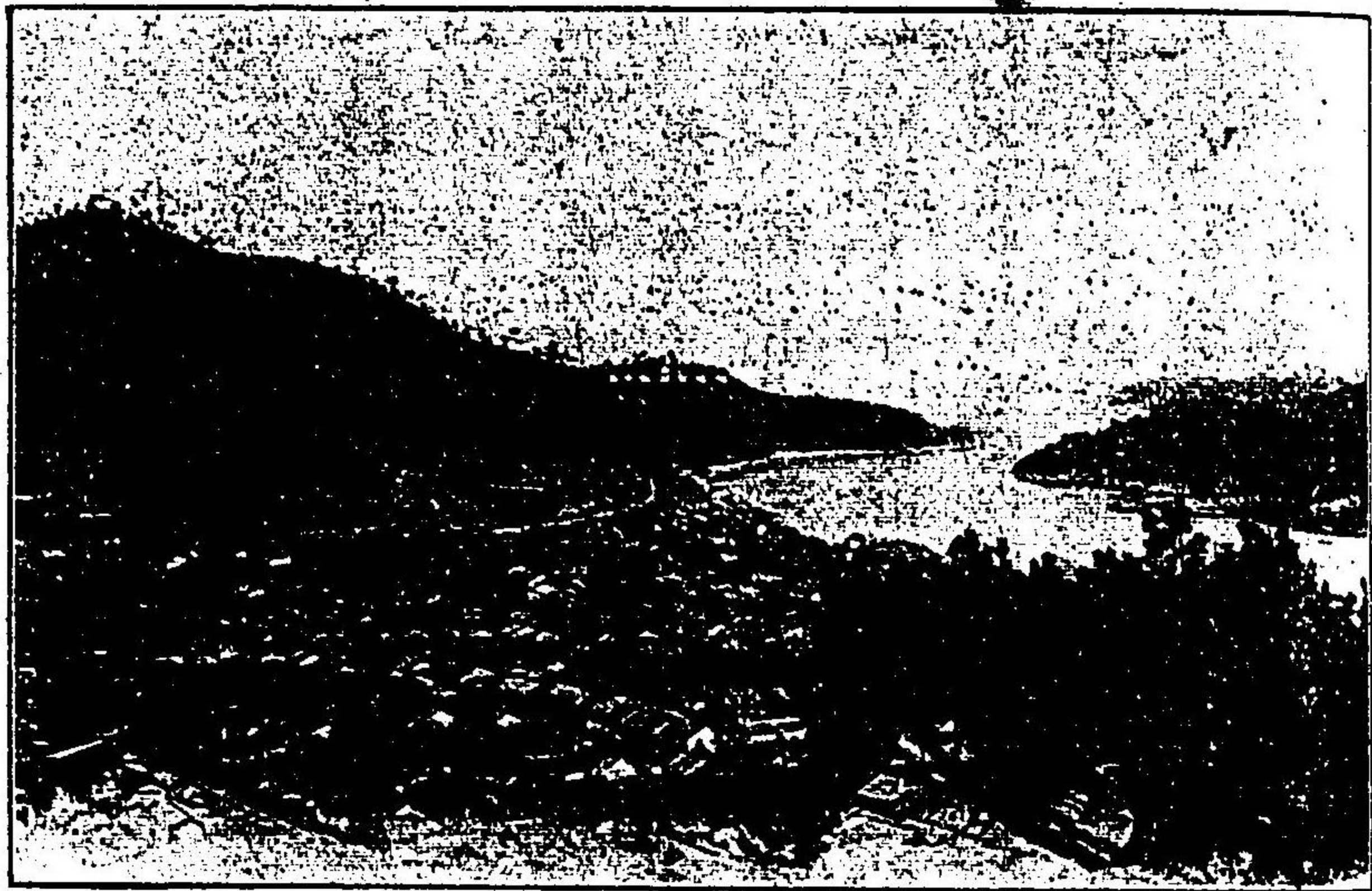
伊勢宮 松永停車場の東十八町にして、鏡山の中腹にあり。

高諸神社 松永停車場の西方十五町、今津村の中央にあり。劔神社とも稱す。式内の古祠なり。また同村の西端に陰陽石なる自然石あり、迷信者流の崇信多し。

松永より汽車は海岸を駛り、山波に至りて、向島の翠螺と相對し、風光明媚なる尾道瀬戸を左にしつゝ、遂に瓦葺粉壁夕陽に美しき尾道市に達す。

尾道市 今、人口三萬三百五十、岡山、廣島兩大市間に於ける第一の繁盛地にして實に備後第一の海津、瀬戸内海樞要の良港たり。市は、後に大寶、愛宕等一帶の峯樹を

帯び、前は向島の尨大なる姿と相對して、尾道海峡を作る。市街は東西に長くして十町、南北に短くして五町、南は高く山に連り、北は低くして海に至る。海峡は水深大にして小船の繫留に便なるが爲め、交通の便に富み、中國航路の汽船は總て此處に寄港するのみならず、當港を基點として四國の各地方に航海するものもまた尠しとせず。ことに、讃岐の多度津港には僅かに四時間の航路を以て、毎日定時の航海あり。其他大阪住友氏の所有船にして、伊豫新居濱に航行するもの、尾道汽船會社の汽船にして、今治、三津、別府、大分を経て宇和島に至るものあり。まことに中國と四國とを連絡する重要な要津と謂ふべし。また、陸上の交通には、山陽鐵道及び國道の他、出雲街道は、北方に通じ、備後の三次(二十三里)を経て、出雲の西南端なる飯石郡に入り、赤名、頓原、掛合、三刀屋等の諸驛を過ぎ宍道湖畔の宍道に通ずる縣道あり、宍道より松江市までは國道通ず。斯くして尾ノ道、松江、兩市を連絡し、其間殆ど四十里、山陽山陰の二道を連絡す。唯だ途中に山路多く、交通の容易ならざるを憾とすべし。



市は、かく交通の要街に當れるを以て、商況繁盛、大厦高屋多く、旅館、運酒店また少なからず。商業機關には商業會議所、十六銀行、住友銀行支店等あり。公衙には、市役所、御調郡役所、區裁判所、警察署、監獄署及び商業學校等を重なるものとすべく、物産には多く花菘、疊表、酒等を出す。ことに疊表は古來備後表の稱ありて、この附近に産出せざるの地なく、花菘は市の重要な海外輸出品を成せり。猶、此地は往昔玉の浦と稱せし地にして、天正中杉原元經此に居り、大寶山はその構城の地に當れ



りといふ。鐵道、福山を距る十二里、廣島へ五十二哩、海上神戸を距る百十六里、多度津へ三十海里とす。頼山陽曰、藝備之海多灣曲、而尾路最狹、島嶼與陸相對者、喚之可膺、屋瓦如鱗、帆檀如林、與山光水色、相出沒、非其他海國、太豁露者比、邑人往々因地勢、治園治亦佳。筑紫紀行(文化中)曰、午刻頃に尾の道につく、鞆より五里程なり、此所も猶備後の境ながら、安藝の領地たり、北東は山にて、南は入海の湊なり、町家五六千軒あり、町通り家屋のさまなると、上方に替る事なし、商家は萬の間屋多し、肴の市、野菜の市もたつ、穀物、干鰯、綿種、鹽等積める船ども諸國より夥しく輻湊す、寺は皆山の手が高く聳えて數多見ゆ、北西の方を三丁程登れば、仙光寺といふ寺あり、此庭に高さ三四間計なる玉の如く瑩徹たる石あり、之れに依りて玉の浦ともいふ、或人の萬葉集にぬば玉の夜はあけぬらし玉の浦にあさりする田鶴鳴き渡るなり、とあるも此玉の浦の事なるべしと云へり、されば甚古き名所なり、さて東南の方の町端に、築出しの新地あり、此内皆酒屋町にて、藝子女郎などあり、津ノ國

の兵庫より此所迄の間に第一の大湊なり、魚物、青物を女の賣歩く事、鞆に同じ、午刻過に風汐直りぬるに依りて船出す、西の方半里計にぬけとて大なる岩に、ぬけ穴のあるを見ゆ、鯨島人家なし、此南に山伏瀬戸、めくり瀬戸鼻くる瀬戸などいふ瀬戸どもあり、此邊備後と安藝の境なり、北に當りて三原の城見ゆ、廣島の殿の御家臣之を領せらるといふ。大日本地誌曰、廣島縣は古來備後表を以て聞えたるの地、吳産及び壘表に於ては、精巧産額遠く岡山縣の右に出でたりしを、近來花莖業の盛大なるに従ひ、隣縣の爲めに其の勢力を奪はれ、一時大に衰頽したりき、されど尾道市福山町の製造者これを遺憾とし、着々改良を計りたるが爲め、漸く衰運を恢復し、産額に於ては未だ岡山縣に及ばずと雖も、其の技術に於ては多く之れに譲るところ多きに至れり、主産地は御調郡にして、尾道市實にこれが集散地たり。又曰、壘表は本邦人生活上最も必要なる者にして、備後表、琉球の稱は古來人口に膾炙す、是れに近年世上生活程度の進むに従ひ、山村僻陬の地と雖も歳を追うて壘表の需要を増加するを以て、

現今全國に於ける本品製造の年額凡そ二千五百萬圓に達せりといふ、中國中、岡山、廣島の兩縣は由來本業の主産地たるを以て、此業に従ふ者多く、岡山縣は岡山市及其の附近を以て、廣島縣は御調郡を以て其の重なる産地となせり、唯、古來のその斯業者は利を趁うて、花蒔に轉じたるもの多く、従つて多少の熱心と忠實とを缺くに至りたるは惜むべしと雖も、猶本邦に於ては、この二縣の右に出づるものなし。菅茶山の舟抵尾道に曰「夢中棹過幾汀洲、三老傳呼已埠頭、起揭蓬窓星欲曉、旗亭歌板未全收」。千光寺 大寶山の半腹に居りて、停車場の東八町とす。寺は古義真言宗にして、一千百餘年前の創立に係り、多田滿仲の重興するところと傳ふ。境内廣く、磴道これに通じ、琴平祠、毘沙門堂、蟠龍ノ松、大悲閣等を過ぎて、一坦地に出れば懸崖に沿ひて本堂あり、千手觀音を安置し、一にこれを聖德太子作、多田滿仲の守本尊といへり。また、本堂の前數間を隔て、玉ノ岩あり。高さ四十二尺、幅三十尺、或はこれを烏帽子岩とも呼ぶ。岩の傍には護摩堂あり。之を過ぐれば方丈、庫裡、撫松庵等あり。

り。東端に奇岩數箇あり、重岩、屏風岩、蛙石といふ。皆其形に由りて名を得たるものなり。東南を望めば眼下に尾道の市街を一瞰し、一葦水を隔て、向島の海中に横はるを觀、遠くは伊豫、讃岐の翠巒を望み、その風光の明媚なる、玉の浦形勝中の第一位に居れり。猶、山上の平地所々に斷礎の殘存せるものあり。即ち天正中の古城墟にして、今、これを千疊敷と稱す。近年、山腹を開ひて遊園となし、多く花樹、楓樹を植えたり。山陽の上千光寺に曰く「崖腹篋僧寺、林頭露海門、波光分瓦色、梵唄壓人喧、鳥逝岸無影、舟過潮有痕、題名向怪石、幾日又東轅」。天寧寺 尾道停車場の東八町にあり。往昔、足利將軍義詮の創營といふ。境内に三重塔及び羅漢堂あり。

西國寺 尾道停車場の東十五町にあり。摩尼山總持院と號し、天平中僧行基の草創と稱す。後、祝融の災にかゝり、白河天皇勅して再修せしむ。爾後歷代天皇の勅願所たり。更に、後また回祿に罹り、將軍足利義教これを重營す。今、存するところの三

重塔は當時の構營といへり。その他、堂塔宏莊、また地方の一巨刹たり。寺内古松の幹に櫻の寄生樹あり、花時異觀といふ。毎年舊三月二十日より二日間花供養大法會を執行し、來賽者多し。寺寶には、古書古經數十種を珍襲すといふ。

淨土寺 尾道市の東方瑠璃峯の麓にありて、停車場より二十町を隔つ。寺はその草創頗る古く、一説に推古天皇御宇聖德太子の建立とも傳へたり。爾後、後白河天皇の勅願寺に充てられしことあり。また元弘の役、後醍醐天皇隱岐より還幸の際天下辭謚の繪旨を賜はりしことあり。建武三年、足利尊氏の西國に走るや、この寺に止宿して兵を集め、後、北上の折にも寺を訪ひて咏歌の事あり。今に、後醍醐帝の繪旨、尊氏手筆の和歌等を珍藏すといふ。猶、應安七年、足利義滿のこの寺に至れること、後太平記に見えたり。推して山陽道有數の名刹となすべし。寺に、三重塔あり。

天満宮 尾道停車場の東北十數町にあり。全國菅廟二十四社の一に居りて、延喜年間、菅公左還の折の遺跡を説く。

向島 尾道市を距る海上僅かに五町にあり。島中、向島東、向島西、立花の三村あり。周圍は六里三十町ばかりにして、住民は皆な獵を業とす。この向島と尾道市との間に小歌島あり。多く桃櫻梅を栽植し、花時は舟を舩して來遊するもの多く、風景よし。

祇園の尾道祭 大日本地誌曰、祇園神社は尾道にありて、素盞鳴尊を祀る、その祭禮は俗に尾道祭と稱し、市中の若者等三種の神輿を昇ぎて海中に入り、更に歸りて、御旅所の中央なる幟の所まで來れるを勝とする習俗にて、舊時は非常の盛大を極めたれども、現時は海中に投することなく、その儀古へに及ばずといへり。

尾道の次驛は糸崎驛なり。その間に栗原、吉和の二村あり。栗原にては毎月舊七、八日の兩日生牛市を開く。菅茶山の吉和に曰「風外鳴柳響、清江七曲渡、征帆銜鳥尾、去馬蔽松身、離戸潮爲圍、漁村鷺作隣、境會過此路、結伴遠尋春」。

糸崎港 尾道と三原との間に介立する小村落なるも、その地陸岸に圍まれて深く海

灣を爲し、近時開ひて開港場となさる。地に糸崎海務局、神戸税關糸崎支署、因島船渠株式會社、糸崎通船會社等あり。また、大阪商船會社中國航路の要津として、市況漸時殷賑を加ふるに至る。而も、本港は海陸運輸の連絡に便なれば、近き將來に於て、海外貿易の發展するに伴ひ、其の商況に一段の活氣を呈するに至るべし。人口四千、金融機關には玉島銀行出張所、三原銀行出張所あり。

長井浦水調の井 糸崎停車場の東十町、八幡神社の境内にあり。一書曰、長井浦は今東野の糸崎港なり、相傳ふ、神功皇后征韓の時、御船を此所に停め給ふ、木梨真人出て迎ひ奉り、埼の邊なる井の水を汲みて御船に供ふ、是より長井浦といひ、また郡名には水調といふ、また糸崎といふは井戸埼の義なり、八幡宮を祀り、皇后の遺跡を傳ふ。猶、この古跡に至る途中に船繫の松あり、同じく皇后の舊蹟といふ。

八幡宮 糸崎神社とも稱す。應神帝の御産髮を奉祀せりとの傳説ある古祠なり。  
院島 糸崎、三原兩邑の前面に横れる島嶼中、最も大なるものは院島(因島)にして

生日島(安藝國屬)これに次ぐ。院島には造船所あり、巨大なる船渠を有す。生日島の北端に瀬戸田と稱する港邑あり、稍々繁華なる漁津を爲せり。院島に大港、中の庄田、熊、外の浦等の諸邑あり、皆漁村にして居民多くは漁獵を業とす。

糸崎の次驛を三原町とす。

三原町 人口一萬二千を算す。備後の西邊にして、後に山を負ひ、前は直ちに海に開く。人烟稠密、商業また隆盛にして、食鹽、烟草、疊表、酒、醬油等の産多し。而も、その氣候及び海波も甚だ靜穩にして、朝に風あるも夕には必ず和ぐ、故にこれを三原夕風といふ、されど、沼田川の下流を受けて、積砂、水淺く、舟運には便ならず、稻田、鹽田等多きよし、一書に見えたり。交通は鐵道及び國道の他に雲石街道あり。即ち、西町河原小路を起點として、國道に岐れ、北方遠く出雲、石見に通ずるものにして、その里程は久井村へ五里餘、甲山町へ八里餘、而して作州津山へ三十五里、因州鳥取へ四十五里、雲州松江へ三十六里、伯州米子へ三十八里といふ。また、西南忠

海、瀬戸田町（安藝國）へは毎日一回の和船便あり。鐵道は神戸基點を距る百四十五哩といふ。青村の泊三原港に曰「粉壁丹樓夕照多、如城巨剝映蒼波、暮村隔在青山下、一葉扁舟賣紫茄」。

三原城址 今、三原市街の中にあり。城は、天正年間、毛利の將小早川隆景の築營にして、周圍の濠渠は海に通じ、宛然水中樓閣の觀ありしを以て、人呼んで浮城と稱せりきとぞ。維新前までは淺野家の一支封として、城また依然として其趣を傳へたりしも、明治に及び、全く頽敗して今は其の蹤跡たも止めずなりぬ。山陽の詩に曰「船尾動晨爨、揭蓬風撲面、過否柞原城、城牆隱復見、枕底間波聲、不知是何所、歸鄉夢未續、舟子夜相語」客恨憑帆影、鄉心寄櫓聲、落日粉榆隔、遙山讚豫橫、漁村相國塔、海路金吾城、疲勞來往、何知白髮生」。

妙正寺 三原停車場より僅に五町にして、野畑山の麓にあり。寺は延寶年間僧養雲の開基にして、享保中淺野氏の所建といふ。殿堂宏壯、且、境地、山に倚り、海に枕みて、風光尤も佳なり。文人雅客の吟詠頗る多し。

宗光寺 三原町の西にして、停車場より僅に八町を隔つるに過ぎず。開基不詳、天正中小早川隆景の重修、勝與上人の中興開基といふ。境地は大畑山の麓に位し、數字の殿堂あり。中、本堂は小早川秋景の所造といふ。宗旨は淨土に屬し、毎月舊十七日を以て緣日となせり。

宗光寺 三原停車場の西六町、宗光山の麓にあり。曹洞禪家にして、もとは安藝國高山の城内にありて、城主小早川隆景の祖先の菩提寺なりしといふ。而して隆景の三原に移るに及んで、天正十年當寺をもこの地に遷し、七堂伽藍を創建す。現在の堂宇八九宇あり。境内の景致また頗る幽邃といふ。

西野梅林 三原停車場の西北十八町にして、西野村にあり。著名なる梅林にして、夙に和州月ヶ瀬に併稱せられ、文人墨客の吟詠に入れる事尠なからず。梅林の廣袤東西十町、南北八町、これを舊時に比較するに、古樹既に枯朽してや、寂寥の感あるを

免れずと雖も、猶、その近傍、隋圃溪邊梅樹ならざるなく、細溪は透迤としてその間を縫ひ、東南は海に面して、幽趣頗る愛すべく、花時來觀の人尠なからず。林中に碑あり、刻するに芭蕉翁の俳句を以てせり。梁星巖の詩に曰く「幽討從他村路長、小橋流水帶斜陽、三枝兩枝寒弄影、五里十里雪吹香、微雨墊巾殊不惡、敝裘換酒也何妨、好教翠羽呼眠醒、又是浮山夢一場。余嚮以月瀨梅花爲海內無双、及今觀三原梅乃知有双也、彼以幽邃勝此則平遠、竹橋茅屋、境各有佳所耳」。

加羅加波神社 三原村より東北凡そ十五町にして、山中村大字千川にあり。社記を按ずるに延喜式内に於ても、所謂天神地祇官幣國幣社三千餘座の一に位し、蘇民命我が邸内に素尊を祀る云々とあるに由りてこの舊社たるを知るに足るべし。

八幡神社 三原停車場の北方三里、八幡村にあり。景雲三年の勸請と稱し、社殿は藤原百川の建立といへり。結構壯麗にして、頗る古色あり。且、域内に老櫻多し。

三原町を起點とせる雲石街道は、北方阪井原、久井を経て、甲山町に至り、同所にて尾道市を起點とせる出

雲街道に相會せり。久井は三原町を距ること約三里餘、人口四百餘を有する一村邑にして、毎月舊六月、九月十月の各月に各々日を定めて一週日生牛市を開く、頗る盛なり。久井より更に行くこと三里ばかりにして世羅郡の甲山町に達すべし。久井より出雲街道の市村に至る東南二里といふ。

○伯耆街道 山陽國道の幹線より北に岐る、街道に、まづ伯耆街道あり。而して、この街道は二路に岐れ、一は國の東邊を北行して東城町に至るもの、一は國の中部を西北に走りて庄原町に至るものこれなり。二路共に、殆ど福山町に接續して起り、比姿郡の西城町に於て相會す。前者には、下加茂、來見、油木等の諸邑あり。後者には戸手、新中、府中、木野山、上下の諸邑あり。而して、二路の連絡路としては、新市より起れる道路の、來見、油木間に於て前者に連續するあり。二道共に、行路は良好ならずして、半ば俵を通せず。

國の東邊を走れる街道にありては、東城町に至るまで、特記すべき名勝なし。唯、來見の東南に當り、深安郡の北隅に山野鱧泉あり。硫黄冷泉にして、山野川の北岸古生層の地より湧出し、浴場の設けあるも、土地僻遠に

して、行路不便なれば、浴客絶なく、たゞ樵夫、農民の來浴するあるに過ぎず。里程は、福山より下加茂へ二里半、下加茂より來見へ三里餘、來見より油木へ二里、更に東城へ大約三里ばかりとす。新市より來れる街道は、來見と油木との間に於て、この街道に連絡し、更に油木より東方豊松を経て國界を越え、備中國井原町に至る街道あり、豊松の邊牛馬の牧畜業盛なりといふ。

福山町より、蘆田川の流に沿ひて伯耆街道を逃れば、府中町に至る間戸手、新市の二邑あり。戸手の附近大佐山には石室多く、また同地に牛頭天王社あり。新市は府中より東南約一里に居り、戸手と共に備後緋の本場とす。

鑛業鑛山 新市の北一里餘、常金丸村にあり。採掘面積五萬七千餘坪、鑛石は黃銅鑛を主とし、その他黃鐵鑛、赤鐵鑛を副産し、皆な鑛石のまゝ大坂に送りて製煉すといふ。また、當鑛山の北に新榮鑛山あり。更にその北に金丸鑛山あり。新榮鑛山の主鑛石は黃銅鑛にして、その黃鐵鑛を雜ゆるの量は、鑛業鑛山よりも多しといふ。また金丸鑛山は黃銅鑛を主鑛石となし、これに斑銅鑛を雜ゆ。その含銅量は新榮鑛山のもの

のに超過すといへり。

府中町 福山より五里、尾道より六里といふ。蘆田川の北岸に縁り、人口五千餘を算す。即ち蘆品郡第一の名邑にして、郡衙また此所にあり。町に指物業を職とするもの多く、箆笥、長持等の製造盛なり。物産としては烟草を推すべし。またこの地はもと往昔國府の所在地なりしといふ。町の北に出口町あり。

吉備津神社 府中町の東一里、網引村大字宮内の虎睡山にあり。備後の一の宮として名高く、近世縣社に列せり。當社、一説には推古天皇九年の勸請と稱す。本社は虎睡山の中腹に鑛して、山上には老樹繁茂し、社地の入口には巨大なる石華表あり。これを入れば、神門、隨神門あり。この南北に樂所二棟相對し、舞殿あり、拜殿あり。その南にあるを神子殿、神饌所となし、本社を南北兩側には攝社、末社十餘宇あり。祭日は陰曆の三月十日、九月九日、十月十七日の三回にして、賽人頗る多く、境内爲めに立錐の地を餘さすといふ。地は福山町を距る西北凡そ四里なりとす。また當社の

神山櫻山さくらやまに洞窟あり。社の南方に櫻山神社あり、三原の人にして、南北朝時代の勤王家なる櫻山茲俊しげとの靈を祀る。

新市より北に岐れたる一路は、宮内みやうち、常金丸とこねまる（眞宮大明神ありといふ）、藤尾ふたな、父木野、上村、上小島等を経て國くにの東邊を走れる街道に合す。また、新市と府中との間より南方國道こくたう（松永町に近し）に接續する一路あり。

府中町を出で、より、街道は中國地方に特有なる丘陵地の間を越えて、甲奴郡に入る。その間、久佐村の邊り、溪流岩石、頗る清奇なり。菅茶山の父石村を詠ぜる詩に白「父石々爲村、一瀬鳴崖根、雉鳴春日午、晴潭花影温」。里程は、大約府中より久佐一里、更に木野山へ一里、木野山より上下町へ三里とす。尾道市を起點とせる出雲街道は、宇都戸より一路を派して、上下町の南矢野に來りて、この街道に連綴せり。

●●●●● 上下町 福山町より九里餘を隔つ。甲奴郡役所の所在地にして、人口二千五百餘、山間の一驛市なり。八幡神社あり。

●●●●● 矢野温泉 矢野村にありて、上下町の南一里とす。温泉は、田畝にある一小丘阜の



麓より湧出し、單純泉にして無色透明なり。上往時は浴客頗る多く、繁盛を極めたりしも、町下 繁盛を極めたりしも、中古地變の爲め、温度と湧出量とを減じ、今はその浴場殆ど廢類に歸せり。

上下町より北すること約三里にして、街道は、尾道より出發せる出雲街道の別路と相合ひ、その南少許に稻草村あり。

●●●●● 意加美神社 稻草村にあり。祭神高靈神。始め惠蘇郡寶蘇山に垂跡せしも、後、此地に遷座し、長久年間社殿を再興すといふ。境内三四の祠宇あり。



●庄原町 稻草の北三里餘にあり、西條川に縁り、一市邑を成す。人口四千四百、比婆郡役所の所在地なり。生糸、紙、茶等を産物とす。三次町に至る西四里なり。

●七塚原牧場 庄原町の西山内東村にありて、三次を距る三里餘とす。牧場は種牛を主とすれども、又種豚の飼養をも兼ね、其の設備最も完全せり。本牧場は晩近北海道に一大牧場の増設を見ざりし以前には、本邦唯一の官立大牧場たりき。然れども今尙ほ其他位を墜さず、益々改良を圖りて屢々種牛の糶市を成せり。

庄原町に於て、街道は三つに岐る。一は西して三次町に至り、一は北して新市に至り、一は北橋東して伯耆の國境に至る。

●西條川 庄原の東北三里餘とす。伯耆街道上の一山驛にして、人口四千二百を有す。西條川は驛東を西南流して、庄原に向へり。

●爾比都比賣神社 西城町の西なる丘上にあり。式内社にして、この地方の古祠に推さる。且、境内深遠、古雅愛すべし。

●帝釋の奇勝 帝釋村は庄原の東五里、西城の南三里半、東城の西三里ばかりにあり。即ち、西城、東城兩町の間を劃れる一小山脈より一水流れて南を指し、帝釋村大字未渡に一大奇景を形成せるものにして、流水の侵蝕作用に成りたる奇岩絶壁に富み、石門あり、石橋あり、奇姿百出、水はこれをくぐりて空湧激越、或は深潭を成し、或は奔瀨をなし、坐ろに遊人をして快哉措く能はざらしむ。また、地に一巨刹あり、永明寺と稱す。今、これ等の奇勝を細説せんか、石橋はこれを神橋と稱す。永明寺の北里餘帝釋川の上流にありて、二橋あり。一を雄橋と云ひ、水面より高さこと十三丈、一を雌瀧と云ひ、同じく高さ五丈餘にして、二橋の相距る凡そ三十町とす。天然の石砦にして、神工鬼鑿、頗る奇觀なり。而して之を渡るもの水上に横はるを知らず、其の側面より望みて始めて橋なるを知るを待べしといふ。また、石門は唐門と稱し、神橋と永明寺との間、路傍にありて、山峯の下とす。その洞門の高さ二丈四尺、幅二丈、深さ二丈四尺、巨岩累層して、門上更に門を架するが如く、山雲のその門に隠見するを見るべ

く門を通じて宇山に通ふ山徑あり。猶、その他、村内に水須幾、夏森巖等の奇景あり。永明寺は眞言宗にして、石雲山と號す。和銅二年の創建と傳へ、堂宇には、本堂、奥ノ院、釣鐘門、焰魔堂、六地藏堂、祈禱殿、別當殿等あり。境地の四面には數十丈の岩石雲際に屹立し、宛も屏風を繞らすが如く、千狀萬態一々名狀すべからず。また内に一大巖窟ありて、窟中より清水混々として涌出す、里人之を呼んで賽ノ河原といへり。又鞍掛山と稱するあり、天女の傳説を談す。御神山は寺の西南一里にして、高さ二千九百九十尺、甚だ高からずと雖も、頗る奇岩異石に富む。山嶺に旗立と稱する大石あり。また、この山に帝釋天王の故事を説く。未渡より一里十四町にして、その山頂に達すべし。志賀氏風景論曰、「帝釋の鬼橋は一に神橋と稱す、これに至るには福山町より五里二十町、若くは尾道より六里十一町、府中町に出で、更に町より北行し、二里、木野山村に到り、更に三里二町、上下町に到り、更に三里三十一町、稻草村に到り、更に二里十八町、庄原町に到り、此所にて東折し、行くこと四里三町、西城町

に到りて南折し、更に三里十二町、竟に帝釋村に到る、また伯耆國米子より東南五里二部に出で、二部より西南行し、更に三里、黒坂に到り、更に三里三町、霞に到り、更に三里十七町、多里に到り、更に四里四町、備後園小奴可村に到り、更に三里二十町、西城町に到りて、帝釋村に達す、帝釋村の東北、帝釋川の上流に一大洞窟あり、賽河原と俗稱す、帝釋村より帝釋川に沿ひ、山徑を攀づること凡そ半里、鬼橋の上に出づ、林樹鬱蒼、些も橋上にあるを覺えず、迂回して下に降り、仰望すれば、幅七間餘、厚さ五間餘、長さ三十間餘の灣曲せる一大石橋、山より山に架し、帝釋川を跨がり、水面上より高さ七間餘に懸るを看る。』風伴の俳句に曰く「雁きくやこゝは橋やら山路やら」。菅晋寶の鬼橋記に曰く、鬼橋、僻在一方、其境過清、石路至惡、傭人爲導、既險一嶺、嶺窮而坡、坡窮而嶺、四面皆山、如投井底、漸下得一憩亭、溪聲轟脚下、即橋脊也、雜樹茂生、如行山岡身在橋上、而不知橋、已奇、下溪仰瞻、始見全形、橋蓋一片石、架空而起、高大不可名狀、石皴鱗起、如眞龍卷騰、石液時滴、鏘然作響、山

氣陰森、不可久居也、自鬼橋至帝釋堂（永明寺）、十六町、兩壁皆石、屏立摩天、有唐門者、一石而二洞、直起可五十丈、門上架門、溪雲如鴻、自洞去來、傍有獨石人立、葛蔓縛之、如僧着袈裟、云々。坂谷朗廬の鬼橋に曰、於藏奇哉鬼橋奇、鬼耶神耶將化兒、海内異觀歸一掃、天台石梁亦徒爲、吟客夜投帝釋廟、大鱗壓夢夢纒支、曉霧攀入急峽際、怪障危巒貫翠圍、石門重開雲吞吐、波角牽掣倒垂枝、忽看大壑中否塞、飛來長流何處之、寧知空際通山脉、百丈橫跨千尋谿、萬古不撓穹隆勢、雲根天矯逸蟠螭、上生老樹爲欄楯、牛馬往來似坦夷、下如大月生溟渤、水蕩仙氛相爭馳、縱有霖潦漂山至、洞然流去屹不移、疑他老蚪奔駛觸、山死鱗甲化石不絕離、又疑天半長虹飲谷夕、靈淑固結疑不虧、不然太古架橋梁始、眞宰教民運巧思、萍梗嘗搜東方勝、金洞庚申屈指堆、不知絕奇在目睫、一條壓倒萬峯缺、寄語天下煙霞客、公論不是我言私、不攀晃嶽勿談美、不渡鬼橋勿觀奇。

西城より東五里にして東城町に至る

●德雲寺 八幡村大字管にあり。長祿年間、東城の領主宮下政盛の建立といへど、今大に衰へたり。寺後の峰に鬼臼おにうすといふ怪石あり。寺より東城町とうじやうまちに至る南一里とす。  
●東城町 西城町さいじやうまちの東五里、庄原町しやうげんまちの東八里、福山停車場の北十五里にあり。東條川に臨み、人口三千餘を有す。在近、鐵の所産多し。

西城より五日市、八島、三阪の諸村を経て、道後山を踰へ、伯耆國多理に出づ。道後山よりは、四國の山嶽、雲伯兩州の海を遠望し得べしといふ。奴可宿は三坂の東南にあり。油木は三阪の西方に當り、同所に鐵泉あり。また、その南に那知瀧あり。

庄原しやうげんより北を指せし一路は、山内北、比和ひわを経て新市驛しんいちゑきに至る、山内北村大字川北の勝光山よりは蠟石ろうせきの産多し。比和の東に觀音瀧、西に手水瀧あり。多加意たかかみ加美神社は、口北村大字向泉の寶蘇山たからすゑさんに鎮す。傳説によれば、大同以前の勸請くわんじやうなるべしと傳へ、社地の景致また幽邃なり。新市驛は、この縣道の終點にして、國の北界に近く、三次より七里、雲州三澤うんしゆさんざわまで五里といふ。村に曹洞宗功德寺あり、大同中の草

創と稱し、承久の役、後鳥羽天皇御駐輦の遺跡と傳説す。猶、庄原より此所に至る街道の西方山谷には隨所鐵を産出し、備後國北部の一特産に推さる。

○出雲街道 尾道市を起點とせる出雲街道は、北微西行、三次町に達し、更に國の西北邊より出雲國飯石郡に入るものにして、廣島市を起點とせる出雲主路とは、三次町に於て相會す。また、三次よりは、石見の江津まで二十餘里の間、江川に舟楫の便あり。尾道停車場より三次町に至る里程二十三里といふ。而して、これを伯耆街道に比するに、本道は行路や、便なり。重なる驛市には、宇都戸、甲山、吉舎、三次等あり。

宇都戸より伯耆街道に連絡する別路は、東上原に於て二路に岐れ、一は北して矢野より上下町に至り、一は北微西して、稻草に至る。また、山陽國道三原町より北に岐れし雲石街道は坂井原、久井を経て、甲山町に至り、この街道に合す。

●●● 甲山町 尾道より約四里半、三原より五里にして、世羅郡役所の所在地なり。人口

二千七百、戰國の頃は、毛利元輔築城の地なり。弘仁年間、僧空海の開基せしと傳ふる名刹今高野山またこの地にあり。

甲山より世羅郡の中部に蟠れる小丘陵を横斷し、双三郡に入りて、まづ吉舎村あり。

●●● 吉舎村 人口三千を有する小驛に過ぎざれども、街道に當れるを以てや、繁華なり。地に、私立中學校日彰館あり。廣澤山大慈寺あり。驛北に小富士山あり、里俗富巢山と呼ぶ。吉舎より東南上下町に至る里程約三里といふ。

吉舎より、丘陵を出で、三良坂村に至れば、本村川と東川とは相合して河成平原を成し、白雲流水と共に香々たるの觀あり。三良坂より二里半にして、三次町に至る。吉舎より算して五里弱なり。また、三次の南高杉村に知波夜比古神社あり、式内に列す。

●●● 三次町 尾道市より二十三里とす。町は、可愛、三次、西城三川の合湊點に位し、四面山を以て圍まれ、標式的盆地を爲す、地形頗る優勝なり。人口凡そ五千六百、三次川に一大橋を架して、河南を十日市、河北を五日市といふ。河南より橋を渡れば、

對岸に老松五六盤曲し、旗亭二三その間に點綴す、これ町の公園なり。市街は、商業繁盛、民屋稠密、双三郡役所、區裁判所、稅務署、中學校（畑敷にあり）等を置く。且つ、その地の盆地にあるを以て、頗る雲烟の氣に富み、四季を問はず、毎朝十時頃まで、暗霧はこの地を封じ、往々にして咫尺を辨せざることあり。されど、この雲霧の日に逢ひて消散する様はまた奇觀にして、市外の丘上よりこれを望めば、遠山近嶺漸次にその鬢髻を現はし來り、その景狀、宛然海中に島嶼を見るが如し。里人はこれを呼んで霧の海の奇景と稱し、以て他郷の人に誇る。猶、三次、可愛、西城の三水は合流して、山陰山陽第一の長流江川を成し、以て石見に入る。三次より以下那智郡の江津まで二十餘里の間、舟楫を通ず。三次に集散する荷物の運輸は、一にこの舟運によれり。その他、交通路は、廣島を起點とせる出雲主路のこの地に於て、當街道に合し、更に國の西北邊より雲州飯石郡に入れるあり。東方庄原に至りて、伯耆街道に連絡する縣道あり。里程は廣島市へ十七里八町、松江へ二十里餘、米子へ三十餘里といふ。

猶、これを開く、この地は古へより幕府の直領にして、多くの人材を輩出せしこと、廣島縣下の最に居ると。今も猶ほ町民の士氣旺盛なり。町の内外の名勝としては鳳源寺、照林坊、若一王子權現、岩屋寺（二者は町の東南畑敷にあり）を擧ぐべし。鳳源山 北熊山と號す。寛永年間、鳳源君の建立にして、僧天海を以て開山となす。古へは七堂伽藍巍然として聳え、北境の巨刹たりしも、星霜の久しき、且、近年回祿の災ありしより、漸く衰微に傾けり。その境地は即ち天正中三次氏の城址の一部にして、北には山を負ひ、南は開豁にして、門下に街道を通じ、その北には三次川の清流を望むべし。

照林坊 三次町五日市にあり。明鏡山と號し、眞宗を奉ず。慶長七年の重興にして近國眞宗一派の首唱に推さる。

布野は三次の北三里にあり。三次を出でし出雲街道は、これを通じ、更に同所より北二里にして、國界に至り、猶、行くと一里許りにして、雲州赤名驛に至る。布野村に延喜式内知波夜比賣神社あり。

## 安藝國

三三四

安藝國の東に備後に接し、西は石見及周防に連り、北は中國山脈の主軸になりて石見と界し、南は瀬戸内海に瀕す。東西二十五里、南北二十里、面積二百十方里を有し、二市七郡より成る。二市は廣島市吳市にして、七郡は安藝、佐伯、安佐、山縣、高田、賀茂、豊田即ち是なり。廣島縣これを管す。地勢は備後と同じく、北に中國山脈の主軸連互し、其餘波は國內に起伏して、幾多の峯巒連嶺をつくり、全く山地を成す。中國山脈は國の西北隅より北境に沿うて東北に連互す。鬼ヶ城山(一〇八〇米)五里山(一二四〇米)十方山(一二三〇米)等連互し、山勢稍低夷し、太田川の水源地に於て、再び隆起し、大佐山(一一〇〇米)冠山(一〇一六米)阿佐山(一〇八七米)等の諸峰を連ね、東するに従ひ漸く低く、遂に江川の流域に絶れて備後に入る。この主軸より岐れたる山岳は複雑せる山地をなし、所々高原狀を呈せる處あり。太田川以西には、本

野川の支流峠川と八幡川との間に西南し東北に走れる隆起帶ありて、傘山(六六〇米)經小屋山(五五九米)極樂寺山等の諸峯を有し、其他複雑なる山地狀を呈し、大峯山(二〇四九米)羅漢山(一一三六米)燒山峠(八四八米)深入山(一二五〇米)狩龍山(一二二〇米)等最も著名なり。國の北部、太田川上流と可部三次間の低地帯にある山岳は、雲萬山(一〇〇〇米)加計山(八四四米)柿木山(八八六米)瀧山(九八〇米)牛ヶ首山(九六〇米)等にして、可部町の北方には牛頭山(八四三米)片廻山(七二〇米)あり。國の東部には上原山(六〇七米)鬼ヶ城山(七七八米)白本山(八九四米)を起し、備後の境を成せる大土山(七九五米)に及び、これより低夷なる分水嶺は安藝、備後の境を劃す。三田川の東南には、五社山(六三二米)木の寄山(四〇〇米)硫黃山(八二五米)鷹巢山(一〇三〇米)等あり。海田川と西條川の間には、灰の峰(八一二米)小田山(七二三米)等あり。西條川以東は全く山地狀を爲し、西部は稍高く、野呂山(九六一米)龍王山等の諸峰なれど、東部は低夷した秀峰なし。沼田川の下流地方は高距四五百米の丘

巒起伏す。かくのごとく山巒重疊せるを以て、平地は河岸及び海岸に於て僅かにこれを見るのみなり。可部町附近はや、盆地状をなし、これより吉田川に沿ひて細く長く山間に延びたる溝状窪地あり。其他三田川、西條川の沿岸も一帯の低地をなし、太田川、木場川、西條川、沼田川の未流また稍々廣き平地を開く。就中、太田川下流の平地最も大にして面積七十平方軒を有し、河口には數多の三角洲をつくり、廣島市、宇品港皆この上に位置せり。河川は吉田川を除きて、皆南流東流して瀬戸内海に注ぐ、東より數へて、沼田川、西條川、太田川、八幡川等あり。太田川尤も大なり。吉田川は國の北境山縣郡に發し、南流、東流、北流して、吉田町より漸く安藝備後の境を流れ、三次町に至り三次川を合せ、これより江川の名を帯びて、中國山脈を横斷し、本地方第一の大河を成す。海岸には大小島嶼多く、嚴島、似島、阿多島、江田島、大黒神島等尤も大なり。

●沿革 古へ國府を安藝郡に置く。平氏の盛なる時、その管國に屬し、後、これを納

めて院の御領となす。承久年間甲斐の守護武田信光軍功を以て當國の守護を兼ね、その五世の孫信武足利尊氏に従ひ、再び守護を兼領し、これを三子氏信に傳へ歷世沼田郡山本村なる金山に治す。永享十二年氏信の曾孫信榮若狹を加封し、その弟信賢繼ぎ、文明年中子國信若狹小濱に移り、その弟元綱を以て當國の守護となし、金山に治す。既にして國內の豪族毛利、吉川、熊谷の諸氏各々一隅に據り、武田氏の威令行はず。永正の末元綱の子元繁兵を起して諸族を攻撃す。毛利元就元繁を討ちてこれを殺し、その近隣を略取す。大永三年尼子經久當國を徇へ、元就元繁の子光和、吉川興經才皆なこれを屬す。明年大内義興來り攻め、元就に破られて歸る。於是、元就兵力日に振ひ、信直はこれに屬す。天文三年光和これと戦ひ克たずして死し、姪信實繼ぎその黨皆な散じ、信實金を棄て、若狹に奔り、その地元就に歸す。同九年尼子晴久大舉して來り侵し、元就を吉田に攻む。大内義隆これを援ひ、共に晴久を撃ちて大にこれを破り、國の豪族皆な大内氏に歸す。二十年、義隆その臣陶隆房に殺され、元就

隆房を誅して悉く故地を併す。永祿九年尼子氏を滅し、提封安藝、周防、長門、備後備中、石見、出雲、伯耆、隱岐、豊前の十箇國に連り、威を海内に振ふ。元龜二年元就卒して嫡孫輝元封を襲ぎ、文祿二年従つて廣島に治す。關ヶ原の役輝元西軍に屬し敗後降を乞ふ。徳川氏その封疆を削り、更めて長防二州を賜ひ、福島正則を當國に封す。天和中、罪あり、國除せられ、淺野長晟代つて封せられ、十二を長勳に至りて王政革新に遇ひ、廢して廣島縣を置く。これを一國沿革の概要とす。

交通 官設山陽線は備後の三原より來り、沼田川の北岸に沿ひて、漸く丘巒の中に入り、本郷、河内、白市を経て、西條に達し、八本松、瀬野の二驛を経て、海田市の海岸に出で、此處に吳市に至る一支線を南に岐ち、直ちに廣島に達し、横川、巳斐、五日市、廿日市、宮島、玖波、大竹等風光明媚なる海岸を過ぎて周防國に入る。吳支線は海田市驛より南し、矢野、阪、天王、吉浦を経て吳市に達す。東部海岸路は、竹原より三津、内海、仁方の諸邑を経て吳市に至るものあり。出雲街道は可部町より吉

田町を経るものと、廣島市より井原を経るものとあり。共に備後の三次を経由す。また可部町より山縣郡を経て石見に至る路なり。水運は宇品港を中心とし、瀬戸内海航海の汽船は多く此處に寄港す。また四國伊豫美津宮に巡航する定期汽船なり。日々此に發着す。

産業 米は太田川沿岸に産す。畑多く、麥の産額また多し。食用農産物には小豆、粟、馬鈴薯、甘藷等なり。甘藷ことに盛なり。特用農産物には蘭(安佐郡)大麻(山縣安佐二郡)あり。果實には西條柿最も著名なり。水蜜桃、葡萄の栽培また稍行はる。林業は北部に於て良材に富めり。水産物は鯛、鰻、鮪、鯖、黒鯛、鮫、牡蠣等なり。廣島近海の牡蠣は大なるを以て知らる。水産製造物には煮乾鰻、乾鰻等なり。外國に輸出す。工業は織物に山繭織あり。また内海耕なり。製作工業品は廣島市に雨傘あり。廣島に宮島細工あり。

○官設山陽線沿線 山陽線の鐵路は、國內に入りてより沼田川の流に沿うて西稍北



を指し、全く海を離る。春水の詩に曰「菜花分藝備、松籟踰二關、極嶺乃西顧、何所辨故山」。本郷、河内、白市、を経て西條町に達し、八本松、瀬戸海田市に至りて再び海に近く、此處に吳市に達する一支線に岐ち、廣島市に達し、己斐、五日市、廿日市、宮島、玖波等風景明媚なる間を西南に走り、大竹を経て周防に入る。嚴島は宮島驛前二町より海を渡りて至るべし。吳支線は海田市より南し、矢野、阪、濱崎、天王、吉浦を経て吳市に達す。又廣島より宇品に至る一支線あり。

壬生忠岑墓 備後三原驛より西南一里にして、田野村字壬生にあり。忠岑が延喜中歌道の達人たりしは、既によく世人の知るところ、また茲に贅せず。

本郷驛 三原の次驛にして、安藝國內に於ける山陽線の第一次驛なり。國道はこの地より鐵道に岐れて、正西を指し、莊野、田萬里、吉土實等を経て西條町に到り、再び鐵路に相合す。本郷驛より莊野(新庄)に至る二里、更に田萬里に至る一里半とす。猶、この國道より南に岐れて海岸に出づる縣道二あり。一は忠海町に到り、一は竹原

町に達す。本郷驛よりの里程は忠海へ二里半、竹原へ三里とし、共に人車の便あり。

小早川氏城址 本郷驛の北八町に聳ゆる高峰これなり。城は始め土肥氏の所築にして、その裔小早川隆景(毛利元就三男)また實にこの地に居れり。頂上の眺望甚だ佳にして、三原海灣を脚下にし、大小島嶼を隔て、豫州の翠螺を一眸の下に收む。また、地方形勝の尤たり。

米山寺 本郷停車場の南二十五町、沼田東村大字納所にあり。寺は、仁平年間僧誓願の開基と稱し、寺内に土肥實平以下小早川隆景に至る十七世の墳塋あり。また三河守範頼、土肥實平、小早川隆景の木像を安置す。

沼田神社 沼田東村大字本市より。本郷驛を距ること東南一里ばかりとす。

佛通寺 本郷停車場の東北一里十八町、高坂村大字許山にあり。臨濟宗にして、應

永年間、小早川隆景九代の祖春平公の創立に係り、愚中和尙を以て開山となす。現今境内の坪數は一萬二千坪なるも、昔時は小早川氏周回六里の山林を寄附し、殺生禁斷

の地境となせりといふ。四圍奇石怪岩重疊して、古松之を點綴し、中央に清流を夾みて東西を分つ。東南を伏龍窟といひ、西北を猛虎岩といふ。又川を活龍水と稱す、其上流寺より北十五町餘に三級瀧あり。風景の閑雅幽邃なる國內稀に見る處にして、古へより文人墨客の或は十景を撰び、或は三十二勝を擧げ詩に賦し歌に詠せるもの少なからず。殿堂十餘宇、その佛殿には、開山愚中が大天より齋來せる華嚴釋迦如來を安置して本尊とせり。寶物には宋徽宗、雪舟の畫、東坡、文徵明その他明人、名僧の筆唐磬唐硯、紫衣綸旨及び、細川、畠山、小早川、武田、毛利諸家の寺田寄進狀等數多を收藏せり。賴杏坪の宿佛通寺に曰「遠問許山入青谿、百峰扶路左右排、危岩怪石樹間出、或似臥虎或怒猊、佛殿鐘樓度橋重、水竹淨所幾僧住、別有一亭置祖像、金字高揭御扁題、看遍雙書臥小院、燈暗飢鼠嚙佛臍、十圍杉間月如燭、水聲破夢怪禽啼、晨起出寺蝙蝠藏、重踏磔确向歸谿、欲留一詩題歇得、翻羞山石老昌黎」。

本郷の大驛を河内といふ。その地の物産には、板、木材、薪、炭、米、樺才軸などあり。重なる地方への里

程は、世羅郡小國へ七里、徳良へ三里、豊田郡野美へ五里、掠梨へ二里、河戸へ一里、戸野へ二里、久芳へ三里、入野へ一里半とす。

竹林寺 入野村の山上にありて、河内停車場より山麓まで三町、山上へ十七町とす。縁起に依れば、天平年間聖武帝の勅建なりといふ。また、當寺に小野篁の事蹟をも附會せり。境内に本堂、護摩堂、十五堂、三層塔、鐘樓、寶藏、二王門等ありといふ。また、二王門の右側には御衣木櫻と稱するものあり。その附近に手水池、阿宗岩等の舊蹟あり。

大津瀧 河内停車場の北八町にあり。四圍樹木密生して、境、頗る幽遠なり。  
 棲真寺瀧 河内停車場の東一里半にして、船木村にあり。一に曝雪瀧といひ、高さ十四丈、幅四間、郷原川の源を成して、その下流は沼田川に入れり。また、附近に瀧見堂あり。地境閑寂にして、尤も避暑に宜し。

河内より、豊田、加茂、兩郡の間に横はれる小丘陵の隧道數箇を穿ち、白市を過ぐれば、賀茂郡北部の名邑

西條町に達す。田萬里は白市停車場の東一里十三町、竹原町は南方四里とす。

西條町 一に四日市と稱す。鐵道併に國道の街に當り、北には鷲山、南には鏡城山を擁して、土地高燥、且、人烟稠密にして、今、民口二千餘を算す。賀茂郡役所、稅務署、山林局監視區所等の設置あり。清酒、柿、木綿等を物産とし、ことに西條柿の名は世に喧傳せらる。國道の他、重なる交通路には東方三津町に到るもの、南方西條川に沿うて長濱に到り以て仁方、吳等に連絡するもの、及び町の西より北徼西方志和堀に達するもの等あり。孰れも縣道とす。里程、三津町へ五里三十三町、竹原町へ六里二十五町、廣村へ八里、吳市へ十一里十八町許り。志和堀へ二里半とす。

鏡山 西條町の南一里ばかりにあり。平原の間に峙立し、形狀頗る愛すべし。且、山は往時山内氏築城の地として名高し。

吾妻子瀧 西條停車場の南一里、御園宇村にあり。即ち、鏡山の南とす。西條川此に至りて瀑布を成し、巖を挾みて左右に分る。左を雄瀧といひ、高さ十八丈二尺、右

を雌瀧といひ、高さ二十九丈、幅は各々七間、二瀑はまた相合して、西南流し、未は二級瀧となれり。瀧の頂に古墳あり。傳へて吾妻子なるもの、墓なりとなせり。

白鳥神社 西條の東方約二里半餘、西高屋村大字郷にあり。景行天皇四十三年の草創と稱し、延喜中これを再興せり。境内の風致また頗る愛すべきものありといふ。

國分寺 西條町の北、吉士實村大字吉行にあり。往時は堂塔盛大なりしならんも、今は衰頽見るに堪へず。また、同村に八幡宮あり、長和二年の勸請といふ。

賀茂郡の北部は低山性の峰巒起伏し、溪流湍急、嵐氣縁を拖く。汽車は此山中を轟々として西に進み、八本松驛に至る。山中の一小驛にして記すべしとなし。これより西、瀬野に至る線路は四十分一の下りにて、山陽鐵道中實に最急勾配を有する處とす。これを以て此區間列車には常に補助機關車を使用せり。汽車の線路はかくて兩山の相迫れる間を過ぎて、瀬野(志和堀)への縣道あり一里といふに至り、これより瀬田川に沿うて遂に廣島平地の東端、海田市に至り、此處に再び海光に接す。

※

三原町より海岸に沿ひて豊田、賀茂兩郡の南端を通せる一路あり。内海街道又吳街

道といふ。

**忠海町** 本郷停車場の南二里半にあり。人口七千四百、頗る繁華なる港邑を成す。豊田郡役所、中學校、女子技藝學校また此處にあり。港灣は南に向ひ、前方に久野、小久野の二島を帯び、水運の便に富めるを以て、船舶常に輻湊す。前面の海中には、上蒲刈島より東に連りて、豊島、長島、大崎下島、大崎上島、白島、生野島、阿波島、久野島、高根島、生口島、佐木島等の諸島嶼、星の如く羅列せり。就中、最も大なるものを生口、大崎下、大崎上の三島となす。今、忠海町には重砲兵藝隊を置けり。**大長桃林** 忠海町より海上六里、大崎下島の大長村にあり。山陽線停車場糸崎(備前)より行けば、海上約八里にして毎日汽船便あり。大長村は、御手洗町を距る西十町にして、地勢高坦、村内に桃樹數百株を栽る、夏は其實を齧ぎて業を營む者多し。花候に至れば、紅霞變態として天も亦醉へるかと怪しまれ、美觀云ふばかり無し。猶御手洗町は島中の一都會にして、人口千六百許りを有し、商業や、盛なり。

**竹原町** 忠海町の西一里半にして、本郷停車場より四里とす。忠海と繁華相競へる海港にして、人口凡そ八千九百、その港灣は東南に向ひ、大阪商船會社中國航路の要津をなす。且、地は、舊藩時代、嚴島、廣島、尾道、三次と共に町奉行を置かれし地にして、五十宮には文天祥の眞筆を刻せる忠孝の碑あり。かの名高き頼山陽は、實にこの地に生る。西北方田萬里へ三里餘、廣島へ十五里七町といふ。

**三津町** 竹原町の西方二里半にあり。舊稱を三津浦と呼び、清酒の醸造多きを以て著はる。戸數約千を算する一海津なり。この町より西條町へ至る縣道あり。里程五里三十二町といふ。

**内海町** 同じくこの海岸の一海驛にして、人口三千五百を有す。内海灣は東南に開け、船舶また常に來集す。西二里に野呂山(鍋蓋山)あり。海拔八百十九米、航海者の常に海上より望見するところといふ。

**仁方町** 野呂山の南麓海濱にありて内海の西南とす。地に鹽田あり。

長濱は野呂山の西南麓にして、廣村に屬し、西條川の三角洲に發達せる一邑なり。街道はこれを過り、西條川を渡りて阿賀町に達し、更に灰ヶ崎山脈の低所を越えて、安藝郡の軍港吳市に達す。二級瀧は俗に廣の大瀧と稱し、廣、郷原兩村の界にありて、西條停車場を距る南八里許り、即ち西條川の下流なり。瀧二層にして高三十四丈、幅七間、その一を小瀧或は白絲瀧といひ、廣村に屬す。その高さ十六丈九尺、幅一間、即ち大瀧の下層を存すものにして、これ二級瀧の名ある所以なり。

※

瀨野の次驛を海田市驛とし、吳市に達する鐵道は、この地より分れて南を指す。  
海田市町 人口三千四百を有する一名邑にして、西、海田灣に臨み、淺野川これを貫流して海にそぐ。商業頗る繁盛なり。重なる地方への里程は、矢野村へ二十町、府中へ一里餘、烟賀村へ一里、中野村へ一里半とす。菅茶山「夷唐山始斷、城近簇人烟、厓曲藩藩圃、江灣牡蠣田、舍郎供驛遞、賈豎課官船、一宿津亭夕、潮鳴客枕前」。府中多祁理宮 海田市停車場の西方一里十町にあり。一に多家神社埃宮とも稱し、

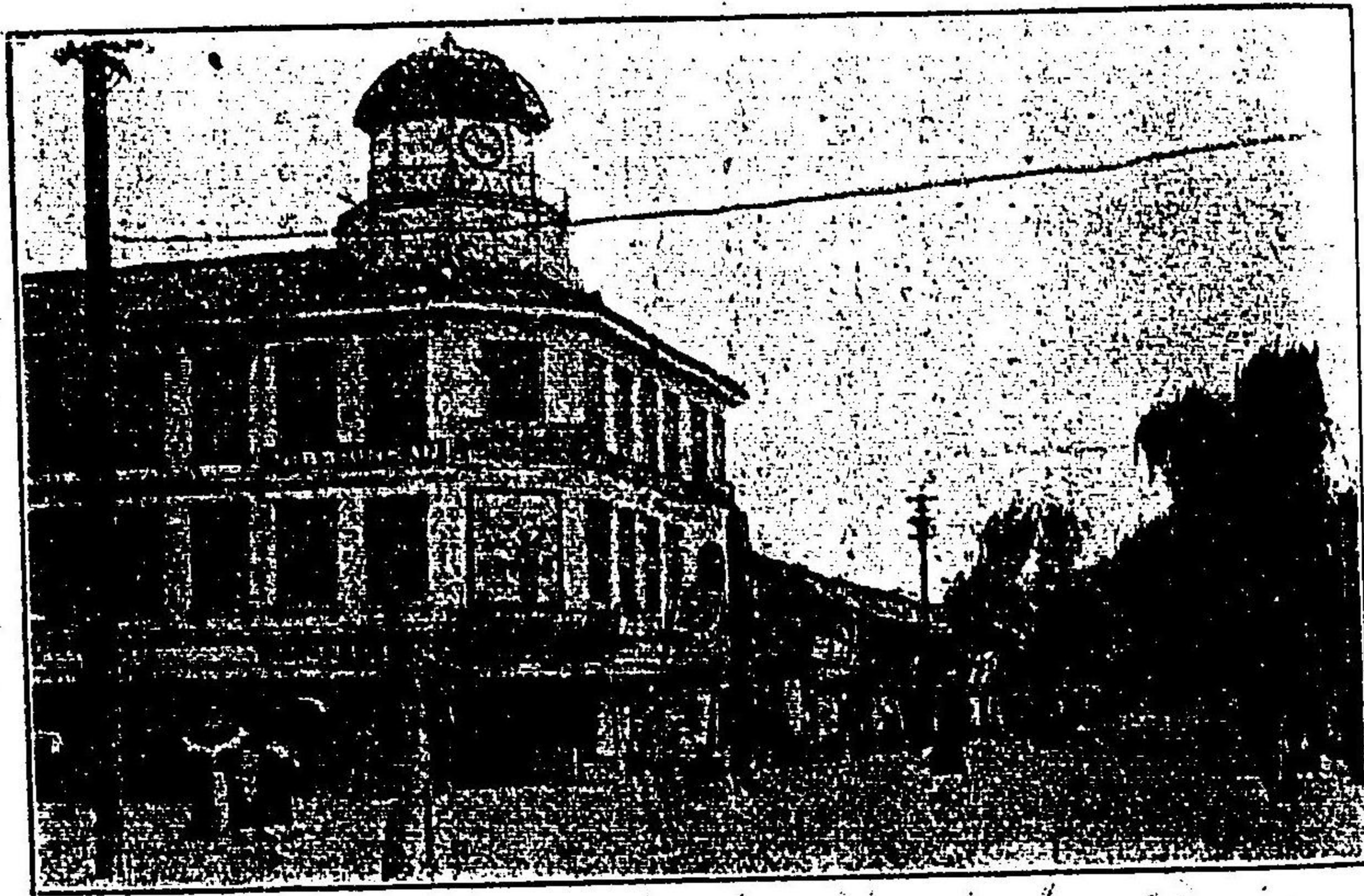
神武天皇行在所の古蹟とす。一書に曰く、「神武帝に至り、始めて天業恢弘の大志を發し、於是東征の舉あり、帝、まづ諸皇子群臣等を卒ら、日向國高千穂の宮を發し、豊國宇沙に至り、轉じて筑紫岡田宮に入り、此より安藝に航して多祁理宮に在すこと七年、進みて吉備の高島宮に在すこと八年に及ぶ、神話時代以後、中國の地名にして、古史に散見せるは實に之を以て嚆矢となす。而して共に現今の何處に相當せるか詳になしがだし、多祁理宮は書紀埃宮に作る、谷川士清の説に、安藝郡府中總社は、素盞鳴尊、大己貴尊神武天皇を祭る。相傳ふ、これ埃宮の舊址なりと。社の邊りに川あり埃湊といふといひ、本尾宣長は、高宮郡高宮郷あれば、多祁理は蓋し此の地なるべしといへり。然れども現に高宮郡と稱する場所は、古へ安藝郡の内にして、中古安北郡と稱し、江戸時代郡名復舊の際、正確に考證せずして、濫に安北を改めて高宮と爲したるものにして、其の舊地は今の高田郡西半の地、多治比、吉田諸村の附近に當り、山間にありて海を距ること甚だ遠し、而して安藝郡府中は、瀕海の地にして、最も事

狀に適せり、恐らくは此の地なるべし。猶、當社より東二町ばかりに長福寺と稱する佛刹あり、その境内の櫻樹は、一幹にして種々の花を着く、奇樹と謂ふべし。

●國府址 同しく府中村にあり。和名抄曰、國府在安藝郡、上十四日下七日、海路十八日。延喜式曰、安藝、上遠國、管八郡、流移人配所、安藝爲近流、去京四百九十里。

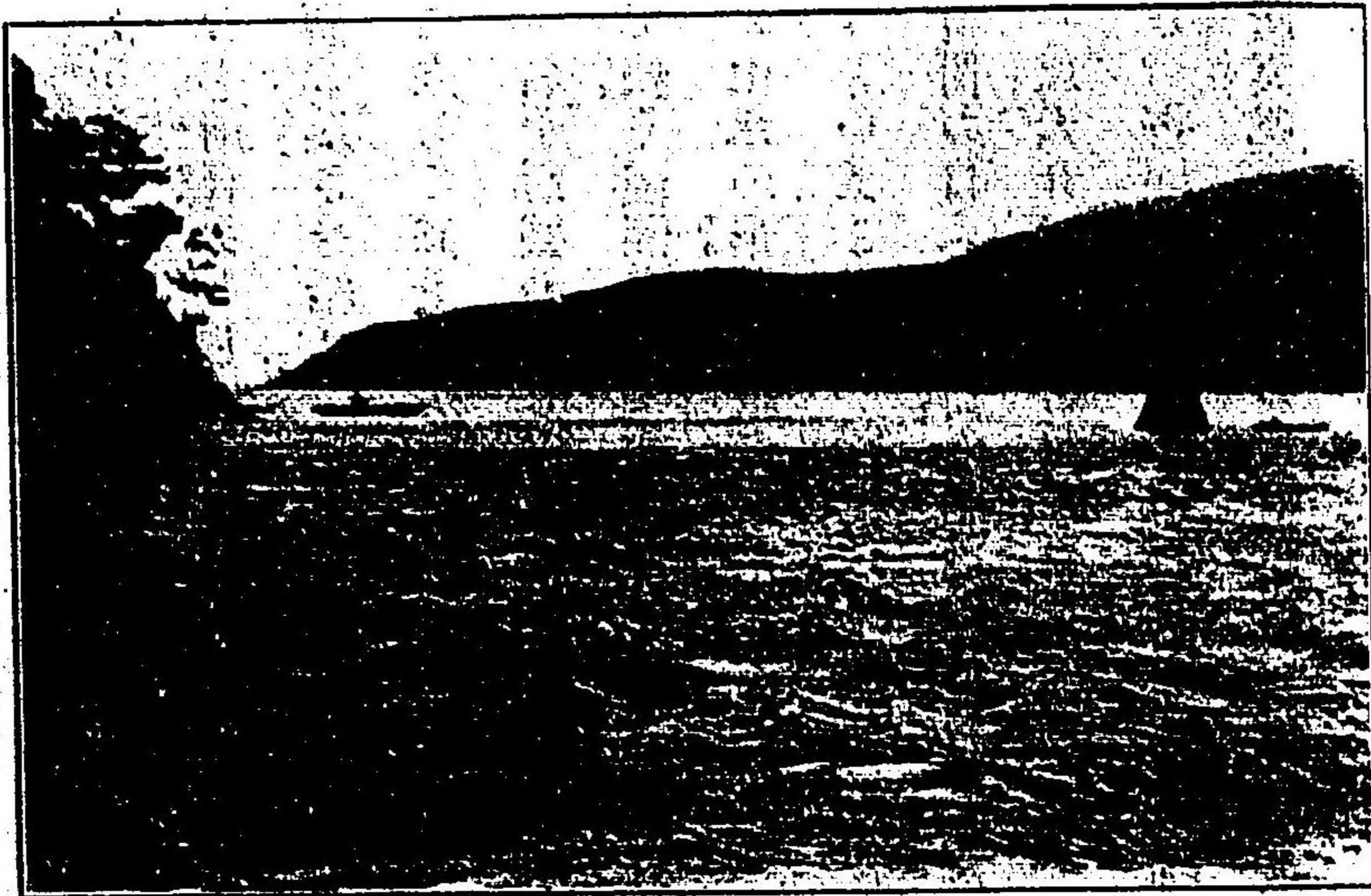
海田市より南に岐れたる鐵路は、矢野、坂、濱崎、天照、吉浦諸驛を経て吳市に達す。その哩數約十四哩半といふ。

●吳市 今、人口六萬二百八百餘、本邦屈指の大軍港たり。而も舊時は海岸の一小邑たるに過ぎざりしが、明治二十八年、軍港としての價値を認められ、第二海軍鎮守府の設置を見しより、漸次隆盛に赴き、造兵廠、造船廠、製鋼所等設置せられ、長足の進歩を爲して、殆ど全く舊來の面目を一新せり。殊に其造兵廠は本邦第一にして、其規模の宏大なる殆ど人をして驚嘆せしむるの概あり。日清、日露戰役に於て、如何に重要な動作を爲せしかは既に世人の熟知する所たり。和庄町に、安藝郡役所あり。



區裁判所あり。繁華日に加り、人口月に増し、市街の整正たる、人烟の稠密なる眞に國內屈指の都會たるに負かず。軍港は西南に面し、江田、渡子、能美の諸島これを扼し、瀬戸内海を行くものも、容易に港の所在を知るを得ざるがごとき地形を爲す。之に加ふるに、港内水深く、如何なる大軍艦市もこれを碇泊せしむるを得べしといふ。猶市の南宮原に姫島明神あり。更にその南に警固屋町あり。里程、海田市の南五里餘、海路宇品へ十海里、佐世保へ二百二十五海里、神戸より百四十五海里とす。

●●●●●  
 吳鎮守府 明治二十三年四月の開廊にした、始め第二海軍鎮守府と稱す。紀州楯ヶ  
 崎より以西、瀬戸内海及び四國の海面、九州の東海岸等即ち第二海軍區を主管せり。  
 ●●●●●  
 瀬戸瀬戸 吳市の南警固屋町と倉橋島との間の瀬戸なり。此所は、もと一地峽を成し  
 て相互接続せしを、平清盛の開鑿せしものと傳ふ。その峽路甚だ狭く、且、海潮急激  
 にして、帆船は順潮に乗ずるに非ざれば、容易にこれを通過する能はずといふ。附近  
 風光明媚にして、また内海景勝の一に居れり。續西遊記曰、「安藝國穩戸の瀬戸といふ  
 海あり、此は島山の陸地に連るところ甚だ細ければ、その山を穿ち切通し、舟の通ふ  
 海路を新れに造りしなり、人力を以て切りあげたりしことなれば、兩方の岸迫り居て  
 その間の潮行甚だ急、常に舟人の恐るゝ所なり、昔、平清盛安藝守にて、この國に居  
 給ふ時、舟にて毎度往來に此所に至り、出崎の山にさへられ、遙に南の方へ廻りて  
 十里餘も海路遠くなれば、此所を通り給ふ度毎に怒りて、この出崎の山を切通し、舟  
 を真直にやるべしと下知し給ふ、人皆なこの事人力の及ぶところにあらずと恐れしか



とも、清盛の下知止しがたく、數萬人の力  
 を以て終に陸地に連るところを斷切つて、  
 舟の通ふ海を造りなせり、その後は、數百  
 年の後もその恩を蒙りて舟路近く往くこと  
 を得るなりとぞ、余、兵庫の築島を見て、  
 清盛の志の大にして豪邁なることを感じ驚  
 きしが、またこの事を聞きて、一世に威を  
 振ひ給ひしもその故なきにあらざりしと、  
 その世のことまでを思ひやりし。文化中筑  
 紫紀行曰、「忠海より舟路十三里餘、おんど  
 に至る、又おんどの瀬戸といへり、山を後  
 にしたる小湊にて、人家二百軒計り、南

より東へ向けて濱邊に立續けり、寺三四箇寺みゆ、昔平相國清盛公嚴島の御神を拜まむと祈誓ありしに、明神大蛇と化して見えさせ給ひければ、相國恐れ給ひて東の方に漕ぎ戻させ給ふに、折しも向ひ汐にて船のほり難かりしかば、相國怒り給ひて、舳先に立ちて海上を疾視給ひしかば、汐逆に上の方に引しとなり、然るに依りて此瀬戸の一名を清盛のにらみの瀬とも云ふとぞ例の船人は語りける、瀬戸間一丁計にして、至て狭く淺瀬多し、此瀬戸を過ぎて西の方里程にして、館岩といふ所に至る、此あたりありさまの山水の形状、誠に畫景と云つべし。頼杏坪曰、「御塔追戸(穩戸瀬戸)を平公開通したりといふことは、國史に見ゆることなし、然れども、土人の所傳にして然かいふのみ追門の口(倉橋島の北邊瀬戸島村の濱)に石塔あり、塔凡そ四層、高さ六尺、臺座方一尺六寸、この塔を經石の瘞塚とも、また平公追福の塔ともいふ、因りて御塔の名起る。杏坪の御塔門に曰「海山斗破實神工、人道平公疏鑿功、一睨千年今尙在、怒潮却所萬帆通」。山陽の舟宿暗門に曰「蓬窓月暗樹如煙、拍岸波聲驚客眠、默數浮沈十年事

平公塔下兩維船」。星巖の詩に曰「連山中斷一江通、禹鑿隋開豈讓功、薄夜潮聲驅萬馬平公塔畔月如弓」。船頭かわいやおんどの瀬戸で一丈五尺の櫓がしわる。」

倉橋島 島の面積凡四方里といふ。全島花崗岩より成り、三村に分る。即ち瀬戸島(御塔あり)、渡の子島、倉橋島の三村これなり。倉橋島の北に火山あり。標高四百八十二米突にして、往時はこの山より多く船材を伐出せりと稱し、今も同村に船大工多し。猶、この島の附近には、無數の小島蒼波に浮び、その風光の美、容易に名狀すべからざるものあり。

能美島 東、西の二島に大別すべく、東能美島は、早瀬瀬戸を以て倉橋島に限り、北は一地頭を以て江田島に連接す。屬島頗る多く、その重なるものに、大黒神島、阿多田島、大、小那沙美島等あり。その西能美本島と大那沙美島との間は謂ゆる那沙美瀬戸を成し、大那沙美島と嚴島との間は宮島瀬戸を成す。この附近に要塞多し。

江田島 吳灣の西に横りて、南方は地頭を以て能美島に相連る。周圍八里餘、全島



花崗岩くわがうがんより成り、附近海波清穩せいじんにして、風景佳絶なり。また、地方廣島市ひろしましと相望む間に似島にのしまあり。宛然小芙蓉よすうの觀を成すを以て、一にこれと呼んで安藝の小富士といふ。

地に似島檢疫所あり、宇品港うしなに入港する船舶を検し、その設備頗る完しといふ。

海軍兵學校 江田島えだしまの本浦にあり。明治十九年の創置さうちとす。設備完全、訓育嚴正、

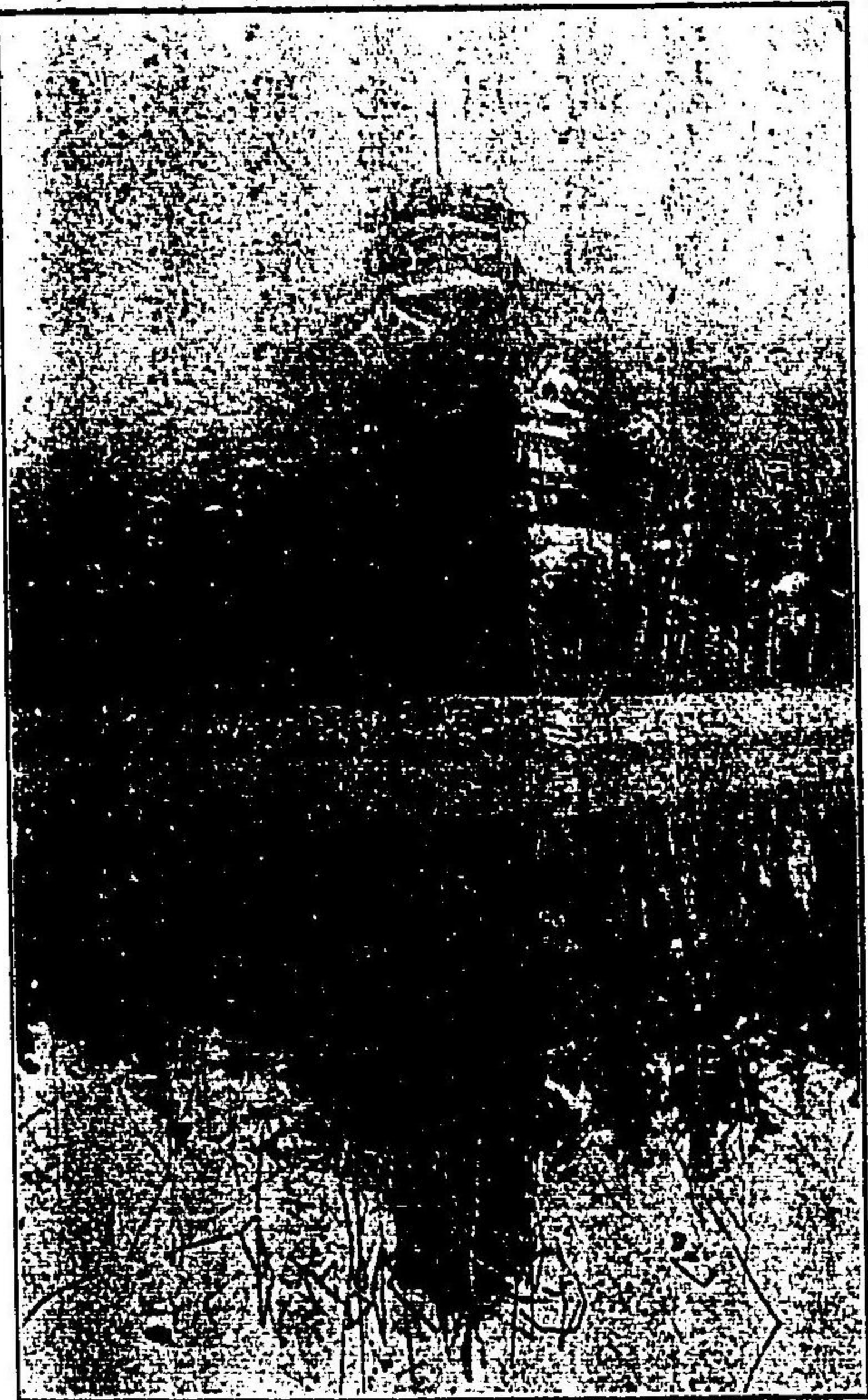
將來に於ける帝國海軍かいてんかいぐんの首腦者は、一度本校の門に入らざるべからざるものとす。

山陽幹線海田市の次驛は即ち廣島市なり。神戸基點より此所に至る百八十九里六十二鎮といふ。

廣島市 廣島縣廳の所在地にして、太田川の成せる三角洲上かくすたやうにあり。太田川は市の北部に於て二派に別れ、東より南に流れる京橋川は更に支派を東に分ち、一は横川橋よこがわはし以東に於て元安川を岐わかち、本川を分つ。かくのごとく諸川分流せるを以て、橋梁の數頗る多く、宛然水の都會とくわいと稱せられたる大阪市と相似たり。東西一里十八町、南北一里、戶數三萬一千、人口十一萬三千五百を有し、瓦葺櫛比、人烟稠密、まことに中國第一の都會たるに恥ぢず。本市は毛利輝元てるもとが地形の優秀なるを相して、天正十七年を

以て始めて此處に居城きやうじやうを築き、其祖先の地なる吉田城よしたじやうより移りて此に居りたるより、漸次其繁榮はんえいを増加するに至りしなり。市坊の數百二十、他に宇品町、川添かはぞへ、觀音、江波、船入、吉島、國春、竹屋、段原等の諸村しよせんを併せて市制を布けり。廣島停車場は市の東北部にあり。先づ汽車を下りて廣島市に入るとせんか、松樹並立せる街路かいろを過ぎ、猿猴川に架したる猿猴橋えんこうはしを渡り、更に京橋より橋本町に至り左折し、右折し、鉾屋町、堀川町、平田屋町、草屋町、鹽屋町を経て、南北に縦貫せる繁華なる大手町通を横り、元安橋を過ぎ、本川橋を渡り、堺町さかひを四町目まで過ぎ、天満橋てんまんはしを渡り、已斐村に至るものを主要なる幹線街路と爲す。宇品港に赴くの街路は大手町通を南に下り、更に東南に向ひ、京橋川に架けたる御幸橋を渡るものと、京橋附近より比治山に添ひて南に下るものとの二路あり。其他本川橋と天満橋との中間、十日市町より直ちに一直線に北を指せるの一路は、縣の北部吉田、三次方面に通ずる所謂出雲街道いづみかだうなり。最も繁華なるところは大手町の縦街路と元安橋の横街路にして、高樓相接し、老舗相連り、行

人織るが如く、宛も東京の小川町通を此處に移したるが如く、然かも市塵の風は凡て  
範を大阪に取れるを見る。其他、中島本町、横町、播磨屋町、平田屋町等これに次ぎ  
て繁華なり。中島本町にある住友銀行支店は宏壯なる建築物として一異彩を放ち、大  
手町なる三井銀行支店及び日本銀行出張所と共に市の重要なる金融機關なり。



廣島城は大手町  
通を北に向ひ、廣  
なる練兵場の奥に位  
し、今に猶天守閣を  
存せり。城は、天正  
十七年毛利輝元此地  
を相して築城の計を  
定め、文祿元年工を

起し、三年にして成る。慶長五年關ヶ原の役毛利氏は西軍に與みしたる爲に長門に徙  
され福島正則代りて藝備二州に主と爲り、此城に主たること二十年にして、また幕府  
の嫌疑を得て領地を沒收せられ、元和五年以降、淺野氏此所に封せられ、安藝全州と  
備後北部の八郡を領し、十二代の主、長勳侯に至るまで、二百五十三年間居城たり  
(封四十二萬六千石)。明治六年廣島鎮臺を置かれ、後に第五師團と改稱し、司令部は  
舊城内に置かる。明治二十八年の戦役中には大本營を此所に置かせられ、大元帥陛下  
の行在所たり。當時第五師團は、事變の起るや直ちに韓國に派遣せられ、牙山の開戦  
以來、平壤の包圍攻撃に拔群の偉功を奏し、後に滿洲の各地に轉戦し、最も多く戦闘  
の衝に當り、また三十三年北清の事變には、天津北京の間に轉戦し、勇武を世界列國  
軍の前に輝かし、續いて日露戦役にも、毎戦赫々の功を表はしたり。誠軒「豪門壁別  
占林邸、翠榭朱棚映水流、宴罷半宵人散盡、月高四十八城樓」。星巖「猫子橋邊重繫刀、  
炊煙繞樹市聲驚、一般樓櫓四十八、雲際依稀鷓尾高」。

元安橋を渡りて左折したる地は天神町にして、大阪の千日前、京都の新京極に似たる繁華を呈し、頗る雜鬧を極む。萬代橋と新大橋との間、水主町に廣島縣廳あり。縣立病院、市役所と相接す。

廣島縣廳 その所管備後、安藝兩州四市十六郡にして、人口凡そ百五十萬といふ。

廣島控訴院 小町にあり。岡山、山口、松江、松山の各地方裁判所を管轄す。

廣島地方裁判所 區裁判所と共に三川町にあり。小町なる廣島控訴院の管轄に屬す。

師範學校、中學校は、小町にあり。猫屋川の東岸、水主町に監獄署あり。その北方

に公園あり。

興樂園 といふ。園は、維新前淺野家の別邸たりし所、今は縣立病院の附屬地たり。

園内、池水夕陽に映じ、奇岩怪石に富み、林泉の林美し。就中、千石石尤も名あり。

別名を水主町公園ともいふ。

白神社 字小町に屬す。傳へて曰く、往時、この廣島の地が一帶の海なりし頃、海

中に一岩石あり、船舶の航路を妨ぐることを憂なからざりしを以て、舟人小祠をその上に立て、白神と稱す。これ即ち當社の起源なりと。

國泰寺 同じく小町に屬す。鳳林山と號し、曹洞禪家なり。舊名は安國寺と稱し、

文祿三年毛利氏京都東福寺の西堂惠瓊をして當寺を創建せしむ。而して、これより先

豐臣秀吉朝鮮征伐の際、惠瓊もまたかの國に渡り多く良材を齎らして歸朝せしかば、

安國寺は悉く朝鮮の良材を以て築營せしといふ。即ち今の西堂橋も惠瓊の架設に係

り、門前の古松もまた同僧の手栽せしものと稱す。後、福島正則の入國するや、豐太

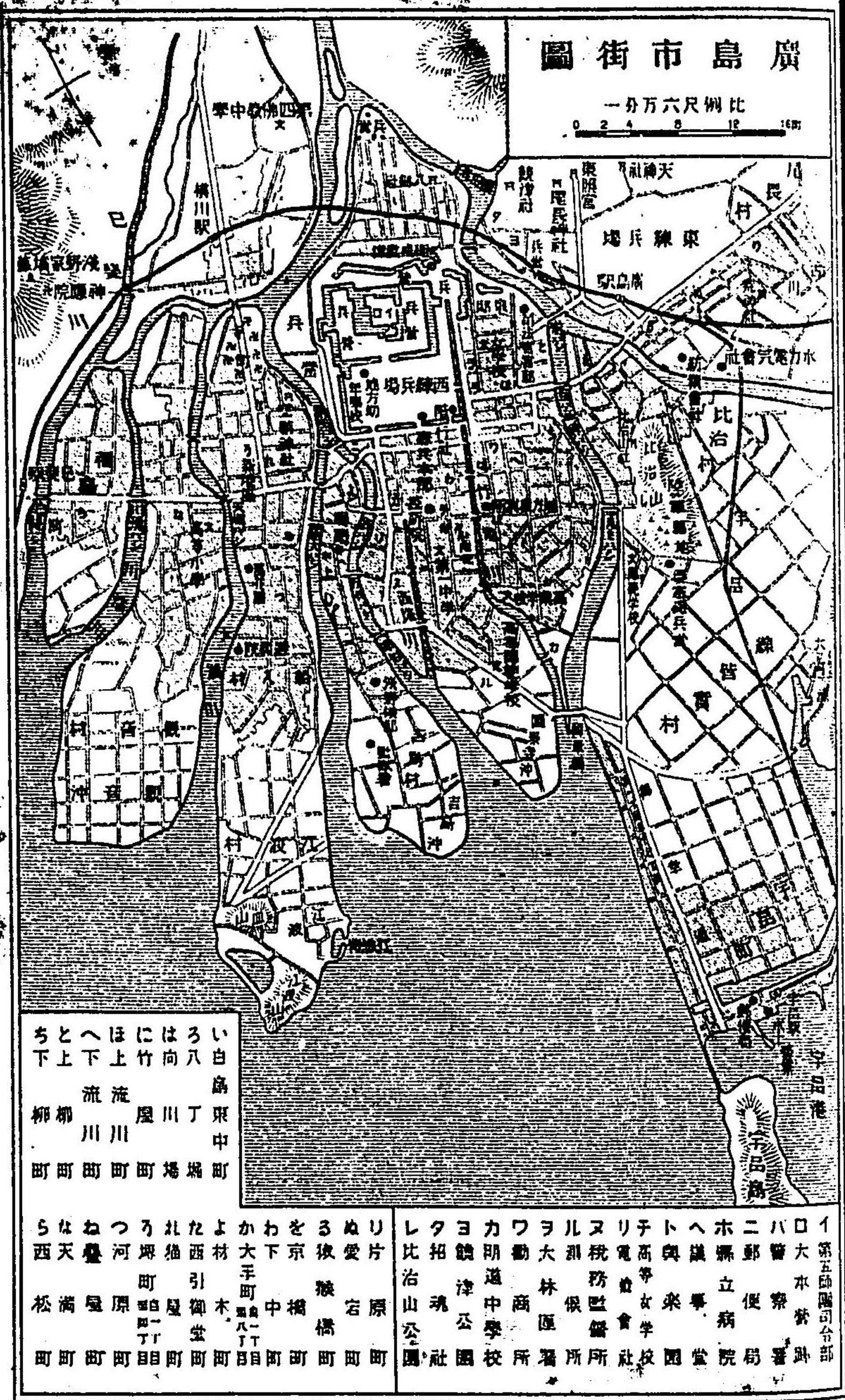
閔の諡號に基きて國泰寺と改稱し、同人の弟普照和尚を以て住寺となす。されど、近

世、回祿の災に逢ひて、惠瓊遺蹟の大伽藍も終に烏有に歸し、現時の堂宇は再築に係

れるものなりといふ。附近花樹多し。

西練兵場を南より北に横り、八町堀、鐵砲町等の屋敷町を過ぐれば、市の名園とし

て名高き淺野侯の縮景園に至るべし。



縮景園 俗に泉邸と稱す。平時は人の觀るを許さざれど、その園の趣致に富めるは夙に人口に膾炙せるところにして、現今廣島市中第一の勝區に推さる。而して、始めてこの園を經營せしは、元和五年淺野長晟入國の翌年にして、今より凡そ二百八十年を経たり。茲を以て樹木鬱蒼として繁茂し、泉石共に古色を帯び、幽邃の致を極む。園の後部は神田川の清流を隔て、二葉山と相對し、岸に閘門を設けて、河水を泉池に引く。池を濯纓池と名づけ、池中に小島を設く。池の南は地平坦にして、清風館と稱する一屋あり。座して以て全景を望むべし。岡山の後樂園に比しては、其規模小なれども、泉石の配置、樹木の幽邃は此却つて彼に勝るものあるを覺ゆ。ことに往年、今上陛下の行幸あらせられ、續いて東宮殿の行啓ありしより、園名ますます著はる、停車場よりは西方六町なり。

縮景園より、少しく迂回して三軒紺屋に至り、常葉橋を渡りて東すれば、忽ちにして饒津神社の祠前に達すべく、祠前に二葉公園あり。

二葉公園(饒津神社) 二葉公園は明治七年の開置に係る。地は後に二葉山の翠を負ひ、前に神田川の水流を臨む。古松老檜參差として繁茂し、綠苔青芝甃を布くが如く、その間に二三の茶亭を置く。凭つて以て憩ふべし。また、境域に櫻、萩、藤等の花木多し。饒津神社は、天保年間淺野氏の創建に係り、その祖淺野長政の靈を祀る。殿堂壯麗、今、縣社に列せり。猶、この祠の傍に小路ありて、二葉山に登るべく、山の中腹には一旗亭あり。廣島市の全薨を望み、風景畫圖も及ばず。

二葉公園より東すれば、招魂祠あり。猶十歩にして、東練兵場に至る。その南角、山上に東照宮あり。

鶴羽神社 二葉公園と東照宮との間にあり。源三位頼政の室菖蒲前の遺言に由りて創建せしものなりと傳ふ。櫻樹多く花時は遊客多し。又池沼に多く菖蒲を栽ゆ。

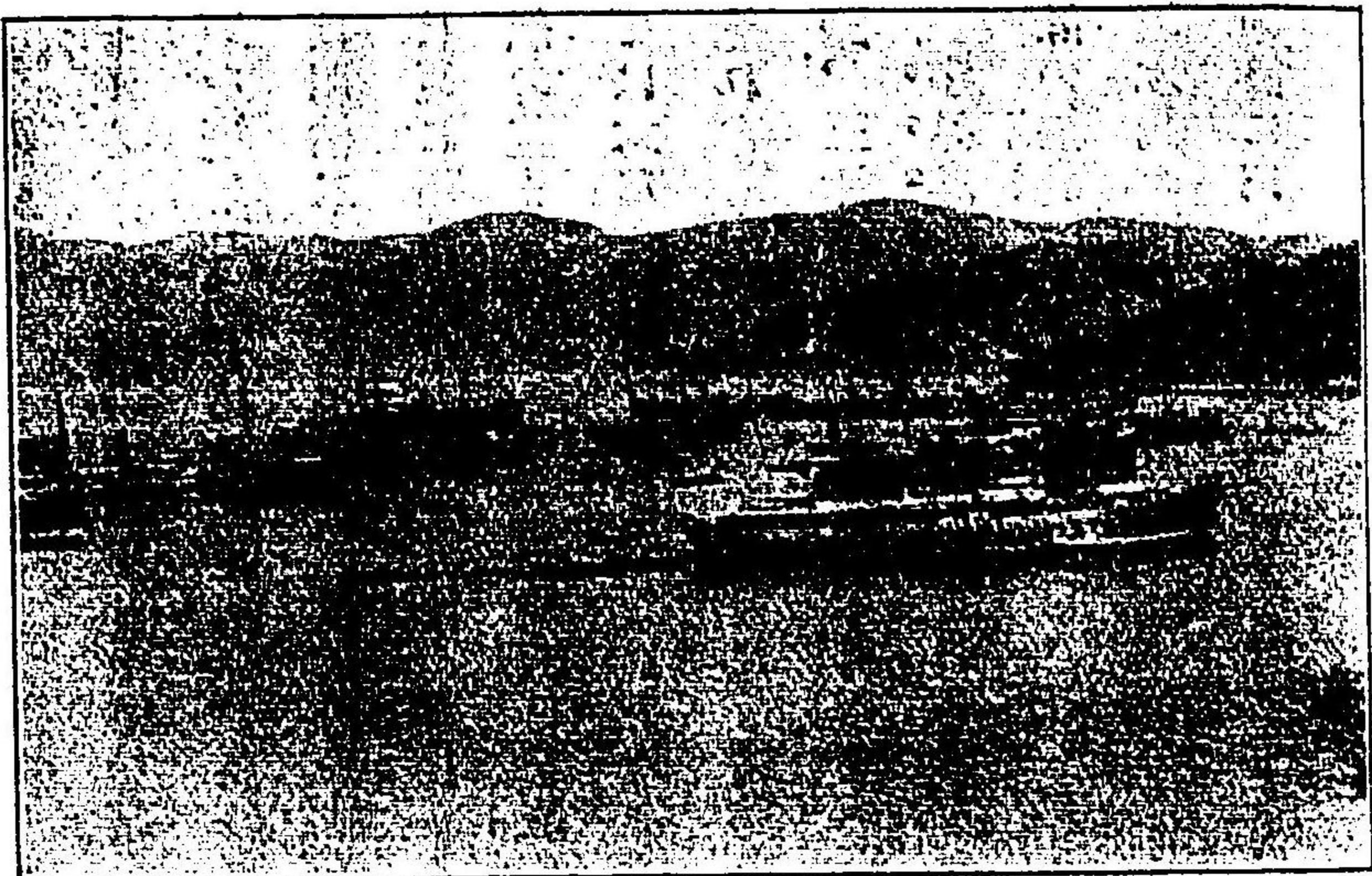
東照宮 慶安元年の創建と稱す。石階高く尾長山山上に通じ、樹木四面に繁茂せり。社殿昔時は頗る輪奐の美を盡したる由なるも、今はやゝ衰頽せり。社の東傍に旌忠



天正年間僧惠瓊豊太閣に請ふてこれを重興す。堂宇の中、薬師堂、二王門、鐘樓の三宇は、豊公朝鮮征伐の際の收容品なりといへり。また、寺後に天籟瀧なる小瀑布あり。本堂の東丘上に五重の碑あり。

●●●●● 日通寺 不動院の南數町にあり。元祿五年清野綱長の建立と稱し、法華宗を奉せり。廣島市より宇品までは東南一里半とす。その間は、陸軍の軍用鐵道敷かれ、平時は鐵道廳之を管理して貨客を運搬す。宇品港も今は廣島市の一部なり。

●●●●● 宇品港 この港は明治十七年、築港の工を起し、時の知る千田貞曉が萬難を排して二十二年十一月に完成せしもの、明治二十七年清國との和破るゝや、本港は兵士の兵器、軍糧の主要輸送港となり、數十隻の御用船は、常にこの海上に浮び、壯觀、實に狀するの語なく、昔時荒涼たりし漁村は、一躍して雜關の港となり、廣島市またその爲めに非常なる繁華を致すに至れり。爾來、清國事變、日露戰役に際しても、また重要なる輸送港となりしことは前に異ならず。されば、陸軍荷物廠、陸軍糧秣宇品支廠、



同豫備倉庫、宇品通信支部などを設けられて、陸軍の大兵を海外に派遣するに必要な設備は盡く備はり、また別に大阪商船會社と日本郵船會社の各支店あり。其他平時宇には、伊豫の三津ヶ濱へは毎日二回、同國今治へは毎日一回の定期航海汽船あり。また吳へも毎日數回汽船の往復するあり。其他中國各港の間を往來する汽船は、毎日一回上下ともに寄港し、陸海の交通甚だ便なり。一地誌曰、「宇品港は宇品島の東部にあり。一港にして、始めてこの島は全く海中に孤立せるものなりしも、築港に際し、廣島市

を流る、太田川の搬出する土砂を避る爲に、廣島市の南方に新地を作り、それより石垣を築きて、宇品島を連結し、島の東方を割して、宇品港となしたるものなり、此港は明治二十七八年戦役に際し、兵站基點として、俄に其價值を高め、其重大なる價值は更に明治三十七八年戦役に際して之を繰返したりき、是を以て戦時に當りては運送船の集まる者頗る多く煤煙天日を蔽ふの壯觀を呈すれども、内地の貿易なく商港としては大なる價值なきを以て、平時には内海航路の小汽船の寄泊する者あるに過ぎず、然れども中國第一の大都會たる廣島市の前港たるを以て其價值決して尠なからず。海路、三津濱へ四十四海里、神戸港へ百六十海里、馬關へ百十海里とす。

宇品島觀音寺 宇品島は、宇品港の西にありて、同所より橋梁を架す。方二十七町餘の樹島にして、空氣清澄、頗る景致に富めり。觀音寺は島の山頂にあり、文祿年間坂本氏の開基といふ。避暑、海水浴澡等を兼ねてこの島に來遊するもの多し。林春齊の詩に曰「渺々氏名島、柴門半掩扉、簞推斜照去、帆伴晚潮飛」。また石川丈山の遊宇

治奈島書岩上に曰「鬱々絶島、屹々遠山、蟬燥樹上、鷗睡波間、風月無邊塵外境、晚來江上喚舟還」。

廣島市の物産 重なるものには、雨傘、建具、蚊帳、牡蠣、海苔、藍、綿、山繭紬等あり。その中、雨傘は市の特産物とも稱すべく、廣島傘の名は夙に高し。而も、一時は粗製濫造の弊に陥り、著しく聲價を墮せしも、近來再び恢復し、一年の産額凡そ十五萬圓に上るといふ。販路は重に九州地方及び大阪地方なり。牡蠣及び海苔は江波村を以て主産地となす。大日本地誌曰く、「中國地方に於ける水産養殖の主なるものは牡蠣にして、廣島縣を以て第一となす。同縣の養蠣は今より二百年前に始まり、之を大阪に輸送して販賣し來りたるものにして、其始めは藩主淺野家の紀州より移封の際同國和歌浦より其種を移植して、佐伯郡草津村に養ひたるを始めとす。現今廣島灣内の養蠣場の區域は沿海十里に及び、年々八萬圓以上の收穫を見る、斯の如く著しき發達をなせるは、海岸の傾斜頗る緩にして、潮汐干満の差大なるを以て、干潮の時干潟の





木せしめ、以て農利を助けしめたるによれり。爾後、一株を失へば従つて一株を植うるを以て、當今到るところ田圃の周邊、邸宅の圍繞、該樹を見ざるの地殆ど稀にしてこれを昔に比して増加するとも減することなし。

三瀧 新庄山の山腹にありて、横川停車場より西北約十八町といふ。

安神社 横川停車場の北約一里半なる祇園驛にあり。舊號、祇園天王社と稱し、貞觀年間の創建と傳ふる古祠なり。

銀山城址 祇園驛の西にあり。山を武田山とも稱し、本州の守護武田氏の古城墟とす。即ち、武田信光五世の孫信武足利將軍に従ひて安藝の守護となり、この地に治して三子氏信に至る。氏信の孫信榮若狹を加封し、其弟信賢繼ぎ、其の二子元綱亦此地に居りしが、戰國の頃武人各地に起り、武田氏守護の勢力を失ひ、遂に毛利氏に屬せり。山は高からずして頂上や、平坦、其南に茶白山あり。今、城墟として存するものなしといふ。

八木梅林 横川停車場より北二里半に當り、八木村にあり。馬車及び人車を通すべし。地方屈指の梅林にして、樹數六百餘株、花時は來觀の客多し。

横川の次驛に己斐驛あり。

己斐驛 横川と共に、廣島市の北西に沿うて同市の外邊を圍む。廣島の西部方面へ赴くものは、この二驛の中より下車するを便とすべし。己斐驛に名物大石餅あり。驛より重なる地方の里程は古田村へ十八町、井ノ口村へ一里半、江波村へ一里半宇品港へ二里十町とす。

草津村 草津村は己斐驛の西南一里ばかりにあり。由來牡蠣の本場としての名あり。村に梅林あり、また海水浴場あり。北山手の海藏寺には北條氏直の墳墓を存す。幸田氏卷筆日記曰「名物大石餅を草津に賞味もせで、たゞ宮島ばかりを心の的に急ぎける、この地は二千餘の人家多くは魚賣りのよしにて、赤脚に草鞋を穿き、袖窄き衣を捲り上げて、外見も外聞も捨てたる甲斐々々しき姿をなし、天秤棒を肩に様々の魚類

を擔ひつゝ、えいさくと駈け歩く女ども、三々五々と廣島の方へ行くに逢ひぬ。  
五日市驛 己斐の次驛なり。海岸にありて、當地より朝鮮木浦及び釜山港へ航海の和船便あり。早きは一ヶ月、遅きは八十日間に、一回の航行をなし、朝鮮釜、板、傘等を搭載し行くといふ。重なる名勝には、驛を距る二十五町に陳久の瀧あり。同一里半に大塚観音あり。

廿日市町 五日市より八幡川を渡りてこの車驛に至る。町は人口三千六百、佐伯郡役所の所在地なり。附近より分岐する重なる街道には、町の西より國道に岐れて北を指し、河内、水内（字和田の湯山に炭酸泉浴場あり、上水内の多田にも鑛泉あり。堀氏水内靈泉記を参照すべし）を経て加計町及び雲州街道に連絡する街道あり。廿日市より河内まで六里許り、更に加計町へ三里といふ。また、廿日市の南地御前より國道に岐れて西する一路は友原、津田を過ぎて周防に入る。里程友原へ三里、津田へ一里とす。鐵道は、廣島廿日市間九哩といふ。

篠尾山天満宮 廿日市停車場の東三町にあり。天満年間、櫻山の城主（櫻山城今廿日市の海濱に残れり）藤原親實の勸請といふ。眺颯頗る佳なり。

洞雲寺 觀音寺村寺佐方に屬す。長享元年、櫻山城主教親の建造にして、殿堂數宇、境内に金剛水あり。また、陶全姜の墳墓あり。寄附狀凡三十七通、大内氏制札四枚、その他古器、古書等を所藏す。

極樂寺觀音 廿日市停車場の北三十餘町、極樂寺山（七〇〇米）の山中にあり。寺を上石見山淨土王院と號し、天平年間僧行基の創營に係る。堂宇、數字行基及び弘法大師所作の佛像多く、地境また深邃なり。

立善寺 原村字半明原にあり。僧祐正の重興にして、その境地は三面山嶽を繞らし南は開けて嚴島に對し、能美島、江田島其他大小の島嶼を望みて、風景頗る佳なり。

速谷神社 立善寺を距る十餘町にして、平良村大字上平良の折敷山麓にあり。廿日市を距ること西約半里ばかり、社は慶安元年の再建と稱し、嚴神社に亞で當國の二宮

といふ。

廿日市驛を出て、より、汽車は風光明媚なる青松白沙の間を過ぎて、直ちに宮島驛に達す。日本三景の一なる一嚴島の姿は忽ち眼中に落ち來らん。地御前は、廿日市の南半里とす。此所に嚴島神社の外宮あり。幸田氏巻筆日記曰、「地御前といふに到れば、此所には嚴島の神の御旅行あり、昨年の風雨に破れたりとて、屋は落ち崩れ、柱は傾きて、見る影もなし、此地より一里ばかりを小舟にて宮島に渡る」。吉田重房筑紫紀行曰、「館岩より二里程進みて、北の方に、廿日市とて濱邊に町家立續ける見ゆ、音に聞えし宮島は、今半里ほどなりときいて心怠がる、廿日市の向手、宮島に續きたる地方には、既に末社の宮々見ゆ、これより宮島の入口まで、濱手は岩立續き、様々の形したる岩どもに、振よき面白き松ども茂り生てかす知らず見ゆ、また山の切間毎に平なる谷ありて、これにも面白き松ども繁茂せり、その間にぞ末社の宮々は見えたる、凡てこの邊の松は皆な赤松にて一しほよし、この佳景を賞しつゝ、宮島に至る、忠海より二十里許、おんどより七里なり」。

●●●●● 嚴島 宮島停車場より徒歩すること一町、棧橋あり。汽車の時間に連絡せる小汽船は直ちに旅客を風光明媚なる別天地に運び去るべし。嚴島は日本三景の一として往昔

より人口に膾炙せられしところ、時に規模の小なるを言ふものなきにあらずと雖も、しかも其風光の他に卓絶せるは元より言ふを待たず。島は大野村の東七町の海上にありて、周圍七里三十二町、東西二里六町、南北一里、中央に彌山高く聳え、岩船山の脈蜿蜒として西南に連る。島をめぐりて七浦あり、一浦毎に神社を安んじたれど、村落を爲せるものなし。

●●●●● 嚴島町 は、島の南端に位し、人口三千四百を有す。往時は廣島に輸送すべき百般の貨物は、先づ此港に陸揚を爲し、更に船に移して廣島に送るの例なりしを以て、港内に船舶輻湊せしも、宇品港成りてより全く出入船舶の數を減せり。されど地に嚴島神社と絶佳なる風景とあるを以て、人の來りて遊ぶもの常に絶えず。商家の七八分まではこれに由りて以て一年の生計を營むといふ。

●●●●● 嚴島神社 は市街の西にありて、一箇の大華表は海中に高く聳え、長き廻廊は湖水に其の美しき影を醜し、小丘の上なる千疊敷の巨館は空翠の間に隱見し、其風景の美